

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第26集

新 開 遺 跡

－福岡県久留米市田主丸町所在遺跡の調査－

2 0 2 3

九州歴史資料館



新開遺跡遠景（南東上空から）

序

福岡県では、国土交通省九州地方整備局の委託を受け、昭和 54 年度から一般国道 210 号線浮羽バイパスの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成 30 年度および令和 3 年度に行った福岡県久留米市田主丸町豊城に所在する新開遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は、筑後川の南岸に形成された沖積地上に位置し、周辺には支流である巨瀬川や三津留川が西流しています。今回の調査では弥生時代中期および古墳時代後期から古代の集落跡や中世の遺構・遺物を確認しました。この調査によって、これまでの浮羽バイパス関連調査の成果とともに吉井・田主丸地域における弥生時代から古墳時代を経て、古代に至る集落の変遷をはじめとした地域の歴史を解明していくための新たな資料を加えることができました。

本書が教育、学術研究の資料とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助力をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

令和 5 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 城戸秀明

例 言

1. 本書は一般国道 210 号浮羽バイパス関連建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県久留米市田主丸町豊城に所在する新開遺跡の記録で、福岡県刊行による一般国道 210 号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第 26 集となる。
2. 発掘調査および報告書作成は、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は坂本真一・坂元雄紀、梶佐古幸謙が、遺物写真の撮影は坂元が行った。空中写真については、東亜技研株式会社・ワールドフォトサービスに委託し、撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は、坂本・坂元・梶佐古が行い、発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小川泰樹の指導の下に実施した。
6. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行 1/25,000 地形図を改変したものである。
8. 本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。
9. 本書の執筆は、IV をパリノ・サーヴェイ株式会社、その他を坂本・坂元・梶佐古が行い、坂元が編集した。

目 次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	2
II	遺跡の位置と歴史的環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	5
III	発掘調査の記録	8
1.	第1次調査	8
(1)	調査の経過	8
(2)	調査区概要	10
(3)	遺構と出土遺物	16
2.	第2次調査	73
(1)	調査区概要	73
(2)	遺構と出土遺物	73
IV	化学分析	81
1.	はじめに	81
2.	試料	81
3.	分析方法	81
4.	結果	82
5.	考察	84
V	まとめ	88

図 版 目 次

巻頭図版 新開遺跡遠景（南東上空から）

図版 1 1 調査区遠景（東上空から） 2 調査区遠景（南東上空から）
3 調査区遠景（北上空から）

図版 2 1 第1次調査区第1面全景（上空から・上が北）
2 第1次調査区第2面全景（上空から・上が北）

図版 3 1 第1次調査区東壁基本土層（西から） 2 第1次調査区西壁基本土層（東から）
3 第1次調査北側調査区全景（南から）
4 第1次調査北側調査区基本土層（北から）

図版 4 1 1号竪穴住居跡（北から） 2 1号竪穴住居跡カマド（北から）
3 2号竪穴住居跡（南から）

図版 5 1 2号竪穴住居跡カマド（南から） 2 3号竪穴住居跡（南から）
3 3号竪穴住居跡カマド（南から）

- 図版 6 1 4号竪穴住居跡（東から） 2 4号竪穴住居跡カマド（東から）
 3 5号竪穴住居跡（東から）
- 図版 7 1 6号竪穴住居跡遺物出土状況（東から） 2 6号竪穴住居跡（北から）
 3 6号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版 8 1 7号竪穴住居跡（南から） 2 7号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 8号竪穴住居跡（南から）
- 図版 9 1 8号竪穴住居跡カマド（南から） 2 9号竪穴住居跡（南から）
 3 9号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版 10 1 10号竪穴住居跡（北西から） 2 11号竪穴住居跡（南から）
 3 11号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版 11 1 12号竪穴住居跡（南から） 2 12号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 13号竪穴住居跡（南から）
- 図版 12 1 14号竪穴住居跡（南から） 2 15号竪穴住居跡（東から）
 3 16号竪穴住居跡（西から）
- 図版 13 1 17号竪穴住居跡（西から） 2 17号竪穴住居跡炉跡（西から）
 3 17号竪穴住居跡南側屋内土坑（西から）
- 図版 14 1 1号土坑（西から） 2 2号土坑（西から） 3 3・4号土坑（南から）
- 図版 15 1 5号土坑（西から） 2 5号土坑土層（北から） 3 6号土坑（北から）
- 図版 16 1 7号土坑（西から） 2 8号土坑（北から） 3 9号土坑（北から）
- 図版 17 1 10号土坑（北から） 2 11号土坑（北から） 3 12号土坑（西から）
- 図版 18 1 13号土坑（北から） 2 14号土坑（北から） 3 15号土坑土層（北から）
- 図版 19 1 16号土坑（西から） 2 17号土坑（北から） 3 18号土坑（東から）
- 図版 20 1 19号土坑（北から） 2 19・20号土坑（北から） 3 21号土坑（南から）
- 図版 21 1 22号土坑（東から） 2 23号土坑（東から） 3 24号土坑（東から）
- 図版 22 1 1号溝（南から） 2 1号溝土層 [a-a']（東から）
 3 1号溝土層 [b-b']（東から） 4 1号溝東端部土層（西から）
- 図版 23 1 2号溝（南西から） 2 2号溝土層 [c-c']（北から）
 3 2号溝土層 [d-d']（北から） 4 2号溝土層 [e-e']（北から）
- 図版 24 1 3号溝（南西から） 2 3号溝土層 [f-f']（東から）
 3 3号溝土層 [g-g']（北から） 4 3号溝土層 [h-h']（北から）
- 図版 25 1 3号溝（東から） 2 4号溝（南から） 3 4号溝土層 [i-i']（西から）
- 図版 26 1 5号溝（南西から） 2 5号溝東端部遺物出土状況（南から）
 3 5号溝土層 [a-a']（東から） 4 5号溝土層 [b-b']（東から）
- 図版 27 1 流路跡トレンチ土層 [j-j']（南から） 2 流路跡トレンチ土層 [k-k']（東から）
 3 第2面北東部包含層土器・炭化種子出土状況（東から）
 4 第2面北東部包含層土器溜り（東から）
- 図版 28 1 第2次調査区全景（南から） 2 18号竪穴住居跡（北東から）
 3 19号竪穴住居跡（東から）

図版 29	1 20号竪穴住居跡（北西から）	2 22号竪穴住居跡（北から）
	3 23号竪穴住居跡（北から）	
図版 30	1 24号竪穴住居跡（北から）	2 1号落ち込み（南から）
	3 6号溝土層（南から）	4 7号溝土層（南から）
図版 31	1 空中撮影実施状況	2 水汲み風景
	3 出土遺物整理風景	
図版 32	竪穴住居跡出土土器①	
図版 33	竪穴住居跡出土土器②	
図版 34	竪穴住居跡出土土器③	
図版 35	土坑出土土器①	
図版 36	土坑出土土器②	
図版 37	溝・流路跡出土土器	
図版 38	ピット・包含層等出土土器	
図版 39	1 出土石製品①	2 出土石製品②
図版 40	1 出土石製品③	2 出土石製品④
	3 出土土製品	4 出土金属製品

挿 図 目 次

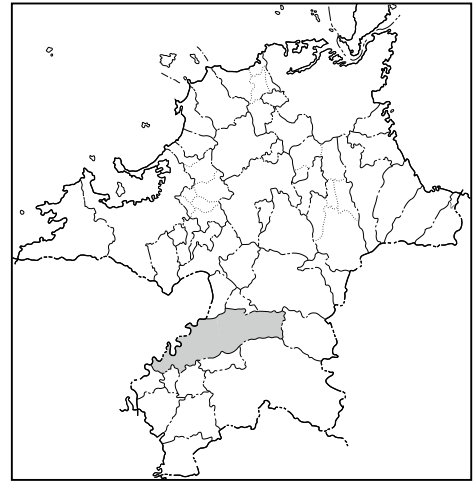
第 1 図	福岡県久留米市の位置	1
第 2 図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	4
第 3 図	新開遺跡調査区位置図（1/2,500）	9
第 4 図	第 1 次調査区（Ⅰ区）第 1 面全体図（1/250）	11・12
第 5 図	第 1 次調査区（Ⅰ区）第 2 面全体図（1/250）	13
第 6 図	第 1 次調査区基本土層実測図（1/60）	14
第 7 図	第 1 次調査北側調査区全体図及び基本土層実測図（1/250・1/50）	15
第 8 図	1号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	16
第 9 図	2号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	17
第 10 図	3号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	18
第 11 図	1・2・4・5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1は1/3、他は1/4）	19
第 12 図	4号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	20
第 13 図	5号竪穴住居跡及び6号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	22
第 14 図	7号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	23
第 15 図	8号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	25
第 16 図	7・8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	26
第 17 図	9号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	27
第 18 図	10号竪穴住居跡実測図（1/60）	28
第 19 図	11号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	29
第 20 図	9～11号竪穴住居跡出土土器実測図（17は1/4、他は1/3）	30
第 21 図	12号竪穴住居跡実測図（1/60）	31

第 22 図	12 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	32
第 23 図	13・14 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第 24 図	12～14 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	34
第 25 図	15・16 号竪穴住居跡竪穴住居跡実測図 (1/60)	36
第 26 図	15・17 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1～10 は 1/3、他は 1/4)	37
第 27 図	17 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第 28 図	1 号土坑実測図 (1/30)	39
第 29 図	2・5 号土坑出土土器実測図 (1/3)	40
第 30 図	2～4 号土坑実測図 (1/40)	41
第 31 図	3・4 号土坑出土土器実測図 (1/3)	42
第 32 図	5・6 号土坑実測図 (1/40)	44
第 33 図	7～12 号土坑実測図 (1/40)	45
第 34 図	7～10 号土坑出土土器実測図 (1/4)	46
第 35 図	13～17 号土坑実測図 (1/40)	48
第 36 図	13・14・16・18・19 号土坑出土土器実測図 (1/4)	50
第 37 図	18・19・21・22 号土坑実測図 (1/40)	52
第 38 図	20 号土坑実測図 (1/40)	54
第 39 図	23・24 号土坑実測図 (1/40)	55
第 40 図	20・21・23・24 号土坑出土土器実測図 (1/4)	56
第 41 図	1～4 号溝及び流路跡土層実測図 (1/40)	58
第 42 図	5 号溝土層実測図 (1/40)	59
第 43 図	2～4 号溝及び流路跡出土土器実測図 (36 は 1/4、他は 1/3)	60
第 44 図	5 号溝出土土器実測図 (1/4)	62
第 45 図	ピット出土土器実測図 (11～13 は 1/3、他は 1/4)	63
第 46 図	第 1 面包含層等その他の出土土器実測図 (1/3)	64
第 47 図	第 2 面包含層等その他の出土土器実測図① (1/4)	65
第 48 図	第 2 面包含層等その他の出土土器実測図② (1/4)	66
第 49 図	第 1 次調査北側調査区 (Ⅱ区) 出土土器実測図 (1・2 は 1/3、他は 1/4)	67
第 50 図	出土石製品実測図① (1/2)	68
第 51 図	出土石製品実測図② (1/2)	70
第 52 図	出土石製品実測図③ (21 は 1/2、22 は 1/3)	71
第 53 図	出土土製品及び金属製品実測図 (1/2)	72
第 54 図	第 2 次調査区全体図 (1/250)	74
第 55 図	18～21 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	75
第 56 図	22～24 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	76
第 57 図	6・7 号溝土層実測図 (1/40)	78
第 58 図	第 2 次調査出土土器実測図① (1/3)	79
第 59 図	第 2 次調査出土土器実測図② (1/3)	80

I はじめに

1. 調査に至る経緯

一般国道 210 号線は、大分県大分市と福岡県久留米市を結ぶ主要幹線道路で、総延長は 147.7km である。福岡県内の本線は、筑後平野の北部の呼称である両筑平野の福岡県旧三郡（朝倉郡・三井郡・浮羽郡）域の筑後川南岸域を東西に走る延長 45.2km の基幹道路であり、久留米市（旧田主丸町）・うきは市（旧吉井町・浮羽町）の各市街地の中心部を東西に貫く対面 2 車線の道路となっている。このため、交通量の増加によって、交通渋滞の悪化、交通事故の発生、住環境の悪化などの問題が発生していた。そこで、それらの問題解消を目的として総延長 14.0km の国道 210 号線の改築（バイパス建設）が事業化され、昭和 48 年度より着手された。工事は東側より進行し、救急搬送ルートの拡充、企業立地の促進による産業振興の効果も生じている。平成 25 年度に供用されて以降、県道甘木田主丸線と交わる「板町北」の交差点以東が開通しており、令和 5（2023）年 3 月現在では、事業西端の 1.1km の区間の供用を待つ状況となっている。



第 1 図 福岡県久留米市の位置

浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財保護の対応については、昭和 47 年度に建設省地方建設局福岡国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）に対して工事箇所に対する埋蔵文化財の有無についての調査依頼があったのを端緒とする。その後昭和 61（1986）年度、平成 10 年度の 2 回にわたって浮羽バイパス計画地内における埋蔵文化財の分布調査を行い、計 19 地点の発掘調査の必要箇所の存在が確認された。これに基づいて福岡県文化財保護課を調査主体とする試掘・確認調査及び本調査は、昭和 54 年度から平成 17 年度まで断続的に続き、平成 19 年度までに 25 冊の報告書を刊行した。

平成 16 年度末の旧浮羽郡田主丸町の久留米市との合併に際し、旧田主丸町内の発掘調査対象箇所については、久留米市が主体として事業の対応に当たることとなった。平成 18 年度から 24 年度まで久留米市文化財保護課により、試掘・確認調査や本発掘調査が実施され、平成 27 年度までに 5 冊の報告書が刊行されている。その後、久留米市と福岡県文化財保護課及び九州歴史資料館との協議により、平成 29 年度から再び福岡県が主体として事業対応に当たることとなった。また、上記の開通区間の西端である「板町北」の交差点以西で一部既に発掘調査を終了した地点を除き、実態的な試掘・確認調査と本発掘調査を九州歴史資料館が実施することとなった。

本書で報告する新開遺跡の調査地点を含む、「板町北」の交差点から県道三川田主丸線に挟まれた区間について、用地買収が終了した地点を平成 29 年度に 3 月 26 日から 28 日にかけて試掘・確認調査を行い、その際遺跡が確認された範囲について平成 30 年度に第 1 次の本調査を実施した。また、令和 2 年度に更に用地買収が終了した地点について、2 月 2 日・3 日に試掘調査を行い、遺跡が確認された範囲について令和 3 年度に第 2 次の本調査を実施した。

2. 調査の組織

平成30年度、令和3年度および令和4年度の発掘調査および報告書作成の関係者は以下のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成30年度	令和3年度	令和4年度
所長	安部勝也 鈴木通仁	福本仁志	仲谷俊昭
副所長	千年康秀	島川浩一	森 賢二
建設監督官	伊東良二	藤井節朗	藤井節朗 花田賢司
計画課長	野村文彦 駒井正樹	佐々部智文 沼尾健太	沼尾健太
専門官	田中貴弘 石橋正	猿渡基樹	猿渡基樹
調査係長	戸高哲也	尾形泰則	相川雅央
工務課長	中山福德	下尾崎隆博	下尾崎隆博 大川雄一郎
工務第一係長	村崎修司	江崎修平	柿内和哉
工務第二係長			藤島将矢
専門員	富田真也	坂本哲治	

福岡県教育委員会

教育長	城戸秀明	吉田法稔	吉田法稔
副教育長	吉田法稔	寺崎雅巳	上田哲子
教育総務部長	辰田一郎	上田哲子	松永一雄

九州歴史資料館

館長	杉光誠	城戸秀明	城戸秀明
副館長	東 良	安永千里	吉村靖徳
総務室長		伊藤幸子	黒岩計光
総務班長	中村満喜子	高山美保子	高山美保子
事務主査	林田朋子	古賀知香	古賀知香
主任主事	原野貴生	小原大輔	小原大輔
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋		
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次	森井啓次
参事補佐	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹（整理）
技術主査	坂元雄紀（調査）	坂本真一（調査）	坂本真一（報告） 坂元雄紀（報告）
主任技師		梶佐古幸謙（調査）	梶佐古幸謙（報告）
技師	梶佐古幸謙（調査）		

発掘調査にあたっては、発掘作業員の方々をはじめ、福岡国道事務所および久留米市文化財保護課と多くの方々のご協力によって、円滑かつ無事に調査を終了することができました。ここに記して感謝いたします。

Ⅱ 遺跡の位置と歴史的環境

1. 地理的環境

九州一の大河、筑後川は、阿蘇外輪山の北部に端を発し、大分県の日田盆地で周囲の小河川を吸収して大河川となり、福岡県域で広大な平野を西流し、最終的に福岡・佐賀県境を曲流して有明海へと注ぐ。筑後川の解析・堆積作用および有明海の堆積作用により、福岡県から佐賀県にかけて広大な筑紫平野が形成されているが、この平野は、北の脊振山地と南の耳納山地からそれぞれ延びる派生丘陵群によって形成された久留米－鳥栖地峡帯により福岡－佐賀県境付近で東西に区画され、西を佐賀平野、東を筑後平野と呼ぶ。更に筑後平野について、有明海沿岸から久留米市の西部にかけてを南筑平野、久留米市東部から浮羽・朝倉両市にかけてを両筑平野と呼び分けることがある。

この両筑平野は、北を古処山系、南を耳納山地という2つの山系に区画されている。この2つの山系は大分県との県境付近を扇の要として、東に狭まり西に開く二等辺三角形の両辺のように直線的に延びている。筑後川は、この二等辺三角形の東側の頂点から両筑平野に流れ出し、平野の中央南側を直線的に西流し、久留米地峡帯を抜けて南筑平野へと流出する。上記のように、その流路が両筑平野内でも南側に片寄るため、平野の北側には広い沖積平野が広がっている。この広い沖積地には、さらに北にそびえる古処山系から流れ出して筑後川に注ぐ、佐田川、小石原川、宝満川といった多くの中規模河川がある。一方、筑後川の南側には耳納山地がせまっているために、沖積地は狭く、筑後川の支流はほとんど発達していない。また、筑後川北岸の支流が、筑後川に対して直角に流れ下るのに対して美津留川、巨瀬川といった南岸の支流は、狭い沖積地を筑後川と併行して西に向かって流れるのが特徴的である。

筑後川の北岸と南岸での地形的環境は、上記のような河川の状況に応じて大きく異なる。古処山系に端を発する中河川が広い沖積地を流れ下る北岸では、それら河川の堆積作用によって幅が広く傾斜の緩やかな扇状地が形成される。さらに、この扇状地が中河川自体や筑後川本流に解析されることで、非常に幅の広い河岸段丘が形成されている。そこでは、広くフラットな段丘面が展開する特徴的な景観がひろがり、その地形を利用して水田耕作や穀物栽培が行われ、福岡県を代表する穀倉地帯となっている。一方で、筑後川の南岸では、断層によって形成された耳納山系は筑後川に面した斜面は急峻で、さらに筑後川がこれに近い位置で流れることにより、扇状地や沖積地の発達が十分ではない。その結果、耳納山麓には狭い扇状地が形成されるとともに、その端部に併行して流れる筑後川とその支流によって形成された自然堤防帯が東西方向に連なるといった特徴的な地形が見られる。そこでは、扇状地を利用した果樹・苗木の栽培が盛んで、地域を第1の産業の1つとなっている。

今回の調査地点は、2022年度現在の国土地理院地図(電子国土 Web)で示される地形分類では、「氾濫平野」の範囲に含まれている。一方で、西側に自然堤防が隣接し、また北東部へ300～500 m程度の自然堤防に分類される地点(「板町北」の交差点周辺)は、ちょうど浮羽バイパス関連調査で既報告の日詰遺跡の所在地点と重なる。したがって、新開遺跡の所在する地点は、現地表からでは判断が難しいものの、それらの確認された自然堤防地形と連続して周囲より高くなった位置に所在しているものと考えられる。



- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 1 新開遺跡 | 2 関戸遺跡 | 3 日詰遺跡 | 4 大の遺跡 | 5 玉田遺跡 |
| 6 水分遺跡 | 7 松門寺A遺跡 | 8 船越二ノ上遺跡 | 9 原東遺跡 | 10 松門寺遺跡 |
| 11 力常遺跡 | 12 秋成遺跡 | 13 小川遺跡 | 14 豊城中ツプロ遺跡 | 15 吉田遺跡 |
| 16 殖木地区遺跡群 | 17 瀬ノ上遺跡 | 18 中原狐塚古墳 | 19 森山古墳群 | 20 寺徳古墳 |
| 21 麦生遺跡 | 22 益生田古墳群 | 23 益永遺跡 | 24 二田遺跡 | 25 大井遺跡 |
| 26 石垣宮原遺跡 | 27 石垣遺跡 | 28 大塚古墳群 | 29 田主丸大塚古墳 | 30 清長橋古墳群 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

2. 歴史的環境

新開遺跡は久留米市田主丸町豊城に所在し、先述のようにうきは市を含めて両筑平野の南側で、地形的には筑後川と耳納山地の間に位置する。久留米市田主丸町は、2005年2月の市町村合併以前は田主丸町で、同様に2005年3月に合併してうきは市となった旧吉井町、旧浮羽町とともに旧浮羽郡を構成していた。浮羽郡は福岡県の中央やや南寄りに位置し、旧国名では筑後に含まれる。旧三井郡の北野町・城島町・三潆町とともに合併して新たに成立した「久留米市」は、2022年5月現在、面積230km²弱、人口30万人を超える県下唯一の中核市である。田主丸町は、その東端部に当たり、北側に朝倉市・三井郡大刀洗町、南側に八女市、東側にうきは市と接している。

久留米市田主丸町を含む両筑平野の筑後川南岸の地域では、遺跡の分布は大きく筑後川寄りの平野部の一帯と耳納山麓の一帯に帯状に広がっており、その間の遺跡の分布は希薄である特徴が見られる。この2つの遺跡の集中地点に挟まれた市街地や扇状地の中腹では、発掘調査を実施する機会が少ないのに対し、耳納山麓部では古くから群集墳の存在が知られており、筑後川に近い部分では圃場整備や道路建設等の大規模事業に伴う発掘調査が多く行われて遺跡の所在が確認されてきたという人為的要因によって差が生じた点が考慮される。

一方で、この遺跡分布の差は、土地利用の歴史により起因した側面も考えられる。筑後川寄りの平野部では、弥生時代から自然堤防上等の安定した場所での居住と湧水の豊かな低地、湿地での水田がセットとなった生活の場が築かれるとともに、耳納山麓部でも安定した居住域と狭い谷水田による生活の場が築かれたと考えられる。対して、遺跡分布が希薄であるこの扇状地帯では、細かな扇状地形の連続であって凹凸が多く、表面水が浸透しやすい地質であるため、元来広い範囲での灌漑が難しかったと考えられる。そこで、広域の水田化を行うには強い権力により統率された大規模な労働力と計画的な水路配置を可能にする技術の結集が可能となった古代以降、条里制による大規模な耕地の開発が進んだため、土地利用のあり方が単純であった可能性がある。なお、この条里地割は、現在でもJR久大本線の南北で広く残っている。

このような遺跡分布が、両筑平野の筑後川から南側の久留米市田主丸町やうきは市で広く見られるのは、これまでの国道210号浮羽バイパス建設事業や圃場整備等に係る埋蔵文化財発掘調査で多くの重要な成果が上がっているが、個別の内容は各報告書を参照されたい。ここでは、今回報告する新開遺跡の周辺を中心に各時代の確認事例を概観する。

旧石器時代の明確な遺跡は確認されておらず、耳納山麓で細石刃や剥片が採集されている。縄文時代には、新開遺跡から東方に離れた事例が多く、竹重遺跡（うきは市吉井町富永）において縄文時代前期頃の土坑等の遺構が確認されている。耳納山麓の扇状地上の法華原遺跡（うきは市吉井町富永）をはじめ、山麓各所で早期から晩期の土器や石器が採集されている。長栖地区遺跡群（久留米市田主丸町長栖）では、溝等から後期から晩期にかけての土器が出土している。若宮外屋敷遺跡（うきは市吉井町若宮）など縄文時代後期の竪穴住居跡が検出された遺跡があり、千代久遺跡（久留米市田主丸町長栖）では縄文時代晩期の土器が確認されている。

縄文時代から弥生時代への移行期となる夜臼式の資料は確認されておらず、前期になると船越高原遺跡（久留米市田主丸町船越・うきは市吉井町下古賀）、鷹取五反田遺跡（うきは市吉井町鷹取）、大的遺跡で自然堤防帯やそれに隣接する河岸段丘上に集落が展開し、初期農耕集落が低地周辺に展開した様相が見られる。前期後半には、水分遺跡（6）、竹重遺跡、豊城中ツブロ遺跡（14）は、竪

穴住居跡等が確認され、日詰遺跡（3）でもわずかながら土器が出土している。これらのほとんどが中期初頭までに途絶えている。このうち大碇遺跡では環濠が確認されており、また竹重遺跡は、扇状地上への集落の展開を示す資料である。

弥生時代中期になるとまとまった資料が大幅に増加する。大碇遺跡（4）、仁右衛門畑遺跡（うきは市吉井町新治）、船越高原遺跡では、前期末から中期初頭に出現して中期中葉まで継続する集落が確認され、仁右衛門畑遺跡では環濠となる可能性のある溝が検出されている。その時期の甕棺墓群が、秋成遺跡（12）や広園地区遺跡などで確認されている。中期中葉には大規模な集落が成立し、堂畑遺跡（うきは市吉井町新治）では二重の環濠を伴う集落が確認され、船越高原A遺跡でも環濠の可能性のある溝が検出されており、鷹取五反田遺跡では甕棺墓を伴う集落が確認されている。

弥生時代後期では旧浮羽郡で資料が豊富とは言えない中で、後期中葉までに近隣の水分遺跡や吉井中学校遺跡（うきは市吉井町福永）、塚堂遺跡（うきは市吉井町徳丸・宮田）で大規模な集落が成立し、後期末や古墳時代初頭まで継続する。水分遺跡は、水分小学校を中心とした水分台地にし、弥生時代後期後半になると爆発的に集落が拡大し、二重区画溝が設けられ、集落の盛行は古墳時代初頭まで続く。水分遺跡のその時期の検出された竪穴住居跡の数は300棟を超え、ガラス勾玉、300点近くのガラス小玉、銅鏃や辰砂粒等、豊富な出土遺物が見られる。後期中葉の短い期間のみ確認される小規模集落もあり、銅矛・銅戈の埋納遺構で知られる日永遺跡（うきは市吉井町）などがそれに当たる。なお、当該地域では、特に中期に甕棺墓が多数検出されているものの、弥生時代を通して墳墓から明瞭な首長層の存在が認識できるような資料は確認されていない。

古墳時代前期の集落は少なく、大碇遺跡、千代久遺跡、殖木地区遺跡群、船越二ノ上遺跡等のいずれも小規模で継続性のないものがほとんどで、当該地域に前期の大規模な古墳がほとんどない点と関連して捉えられる可能性がある。古墳時代中期には、船越二ノ上遺跡、大碇遺跡をはじめ、比較的大規模となる集落もある。また、塚堂遺跡は他の集落と異なり、弥生時代後期中葉から継続する可能性があり、5世紀前半の普及初期のカマドを伴う竪穴住居跡が確認されており、拠点性を示す要素として特徴的である。これらの大規模集落は、月岡古墳、塚堂古墳、日岡古墳の首長系列をなす前方後円墳からなる若宮古墳群の5世紀中葉から6世紀前半にかけての造営と深く関連すると考えられる。古墳時代後期には、旧田主丸町域では、船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡、船越高原遺跡などがあり、集落数が急増する。これらの集落は6世紀中葉以降に扇状地帯に展開する群集墳の造営と深く関連すると考えられ、『筑後国史（筑後将士軍談）』によると、幕末には1000基以上の古墳が所在したことが窺える。扇状地帯の開発が本格化と対応する古墳群の形成において、旧田主丸町域の中原狐塚古墳（18）や寺徳古墳（20）のような装飾古墳の存在や全長103mを測る後期の前方後円墳、田主丸大塚古墳（29）が当該地域において象徴的なものである。装飾古墳は、旧吉井町域では、珍敷塚古墳などからなる屋形古墳群、旧浮羽町域では、塚花塚古墳などからなる朝田古墳群と旧浮羽郡に広く数々の著名な古墳が分布する。

上記の古墳時代後期の集落は7世紀代のうちにほぼ廃絶し、新たに7世紀前半以降に古代の集落が形成されるのが、船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡、船越高原遺跡、日詰遺跡で確認されている。この時期以降に扇状地帯は条里制の施行により、広大な水田域へと姿を変え、8世紀初頭までにはほぼ完成したとみられる。この耳納山麓一帯の条里地割は、広く現存しており、律令期の景観の一端を残していると言える。

中世では長栖地区遺跡群（うきは市吉井町長栖）の長栖西の前遺跡で、11～12世紀の庇付の掘立柱建物跡と建物を区画する溝が検出されており、屋敷の範囲を示す例と考えられる。その他には、日詰遺跡や船越二ノ上遺跡などで確認された中世の遺構は、大半が溝のみであり遺跡の実態が明確ではない。

以上のように、筑後川と耳納山地の間に挟まれ、河川に近い低地における自然堤防上、山麓部・扇状地といった立地と関連しつつ、各時代における開発を示す遺跡の展開について概観した。

参考文献

- 生野里見編 2013『長栖地区遺跡群』うきは市文化財調査報告書第17集 うきは市教育委員会
- 今井涼子編 2003『大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第19集 福岡県教育委員会
- 江島伸彦編 2000『船越高原遺跡』田主丸町文化財調査報告書第13集 田主丸町教育委員会
- 大庭孝夫編 2005『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第23集 福岡県教育委員会
- 小澤佳憲編 2005『日詰遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第22集 福岡県教育委員会
- 小澤佳憲編 2008『玉田遺跡 船越高原A遺跡Ⅳ 西隈上中川原遺跡』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第25集 福岡県教育委員会
- 梶佐古幸謙編 2019『鷹取ヒゲジロ遺跡』久留米・うきは工業団地造成事業関係埋蔵文化財調査報告 九州歴史資料館
- 岸本圭編 2004『竹野小学校遺跡』福岡県文化財調査報告書第188集 福岡県教育委員会
- 熊代昌之編 2015『水分遺跡-第7次調査遺物編-』久留米市文化財調査報告書第355集 久留米市教育委員会
- 重藤輝之編 2002『堂畑遺跡Ⅰ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第17集 福岡県教育委員会
- 進村真之編 2002『船越高原A遺跡Ⅲ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第16集 福岡県教育委員会
- 馬田弘稔編 1983『塚堂遺跡Ⅰ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 福岡県教育委員会
- 丸林禎彦編 1998『豊城中ツブロ遺跡』田主丸町文化財調査報告書第10集 田主丸町教育委員会
- 水ノ江和同編 1999『鷹取五反田遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集 福岡県教育委員会
- 吉田東明編 1999『船越二ノ上遺跡』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第11集 福岡県教育委員会
- 吉田東明編 2001『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第13集 福岡県教育委員会

Ⅲ 発掘調査の記録

1. 第1次調査

(1) 調査の経過

調査対象地での南側で、県道三川田主丸線の北側に隣接する道路用地に作業ヤードを設置することになった。平成30年6月26日にバックホーを搬入し、ヤードの設置及び調査対象地の表土掘削を開始した。排土を保管位置まで移動するのにやや距離があるため、2台のバックホーで表土の掘削・処理を行うこととした。

7月4日に作業ヤードへユニットハウスや建機の搬入・設置を行った。7月12日から発掘作業員の現場での諸作業を開始し、発掘道具類の搬入を行った。以降、Ⅰ区において重機による表土掘削が終わった範囲から作業員による遺構検出作業を行っていった。遺構検出を進める中で、7月23日に初めて調査区の東端部で、カマドを伴う竪穴住居跡の存在を確認し、しばらくその検出が作業の中心となった。

7月27日には図面作成のための調査区内の杭打ちを開始した。また、この日は接近する台風12号の対策として、現場周辺の飛散防止等の処置を行い、台風通過後の7月30・31日には排水等の現場内の復旧作業を行った。作業ヤードとⅠ区の間を東西に通る用水路の流量が、農業用水の放出により8月3日から急増し、用水路の上部の隙間から流水が溢れ、調査区内が流入する事態となった。対策として、隙間周辺に盛土を行い、直接の流入を止める措置を講じたが、用水路に多量の流水が絶えないことから、地下水圧が上昇して特に南・東側の調査区壁から水が染み出し、調査区内の低い箇所に水が溜まる状況となった。そのため、以降のしばらくの期間は、調査区内でも高くなっている調査区中央部での作業を進めることとし、その範囲の検出、調査区の中央を南北に長く延びる試掘時のトレンチの掘り返し、流路跡内などのトレンチの掘削を行った。その過程で確認された15・16号竪穴住居跡や3号溝の掘削も行った。

10月9日に用水路を流れる水量が大幅に減少し、調査区内への水の流入が落ち着きを見せたため、溜まっていた水を排水し、東側の竪穴住居跡の掘削など、一旦中止していた作業を再開した。以降竪穴住居跡や土坑などの掘削、撮影、図面作成を全面的に進めていき、一方で以降の2面目では更に下層での作業のため、より湧水による支障が想定されることから、11月1日に仮設電源を設けて備えることとした。11月9日の金曜日には調査区内の排水を進め、翌週のⅠ区1面の調査区の清掃、空中撮影に備えた。11月13日と14日の午前中に調査区の清掃を行い、14日の午後に空中撮影を終えた。その後、11月26日にⅠ区の2面までの掘り下げのためにバックホーを搬入するまでⅠ区1面の調査を続けた。

第2面までのバックホーによる掘り下げを行う中で、11月27日には1面での検出時には把握することができなかったものの、本来1面に帰属する竪穴住居跡を2棟確認し、急遽掘削と記録を行った。以降第2面までの重機による掘削をしつつ、作業員による遺構の検出・掘削を進め、順次撮影・図面作成を続けていった。Ⅰ区から農道を挟んで北側に位置するⅡ区については、12月5日に重機による表土掘削を行い、12月12日に作業員による遺構検出を行ったが、Ⅰ区と内容の共通した遺構は確認されず、谷地形の落ち込みやそこに包含される遺物が確認された。12月25日で平成30年内の作業を終了した。



第3図 新開遺跡調査区位置図 (1/2,500)

平成 31 年 1 月 8 日に 2 面の調査を再開し、1 月 21 日に調査区の清掃、1 月 22 日に 2 面とⅡ区の空中撮影を行った。以降は、図面の作成や遺構の追加の掘削、下層の遺構の有無の確認を行い、Ⅰ区の南東部及び北西部調査区壁、Ⅱ区の南側調査区壁を整えて、基本土層の最終的な確認を行った。2 月 14 日まで図面類の確認と包含層などの掘削を続けた。2 月 20 日から調査区埋め戻しのためのバックホーを搬入し、埋め戻しを開始した。現場撤収に向けての出土遺物の整理や道具類の片付けを行い、2 月 27 日に出土遺物や道具類の搬出を行った。3 月 12 日に最終的な埋め戻しと建機類の搬出を完了し、発掘調査を終了した。

(2) 調査区概要

第 1 次調査の調査区は、路線の形状により北東から南西の軸でやや細長く、南端を水路、北端を農道で区切られた範囲の南側調査区（Ⅰ区）と農道を挟んで北側の飛び地となる狭小な北側調査区（Ⅱ区）からなる。これらの範囲は、調査以前はほぼ全体的に農地であった。

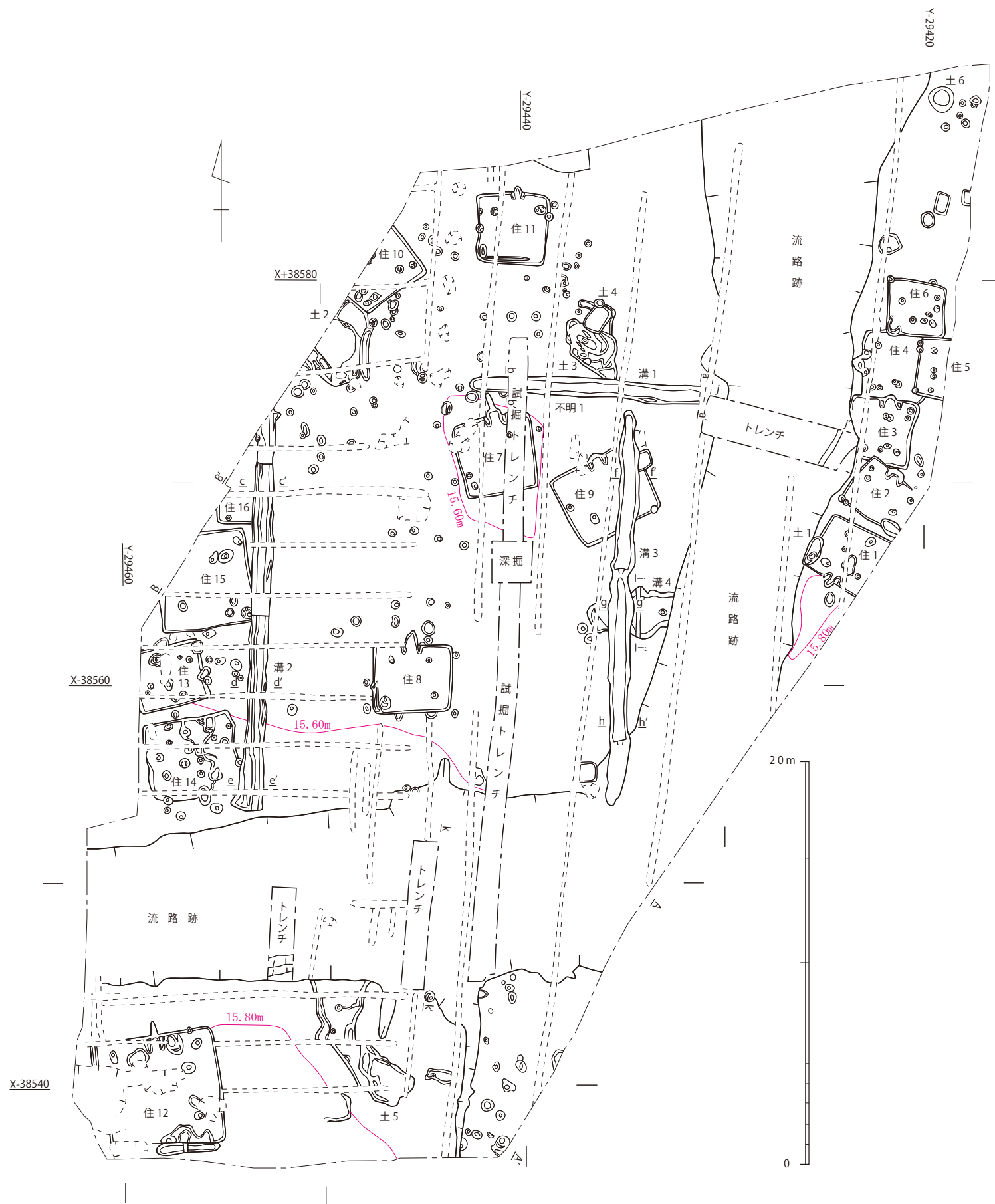
調査範囲の大部分を占める南調査区では、2 面からなる遺構面が確認され、第 1 面では古墳時代から古代を主体する遺構を調査し、第 2 面では弥生時代中期を主とする遺構の調査を行った。第 6 図は、南調査区の南東隅の調査区壁（A - A'）と西側調査区壁（B - B'）の基本土層を記録したものである。

（A - A'）では耕作地にかかわる粘質の耕作土、床土、客土（1～5 層）の下位に茶褐色系でシルト質の包含層（7～12 層）が堆積し、これらを切って掘削される第 1 面の遺構が認められ、第 1 面の遺構面は標高 15.8 m 前後である。包含層である 12 層の下位から切り込む第 2 面の遺構（31 層）が認められ、32・44～47 層も同様に第 2 面に帰属する遺構とみられるが、直上に広く流路跡の埋土が堆積するため、明瞭に包含層との先後関係を示すのは先述の 31 層のみである。したがって第 2 面の遺構面は標高 15.6 m 前後である。また、淡黄茶褐色系でシルト質の 13・14 層と更に下位の茶褐色系の砂質土が基盤層と考えられる。

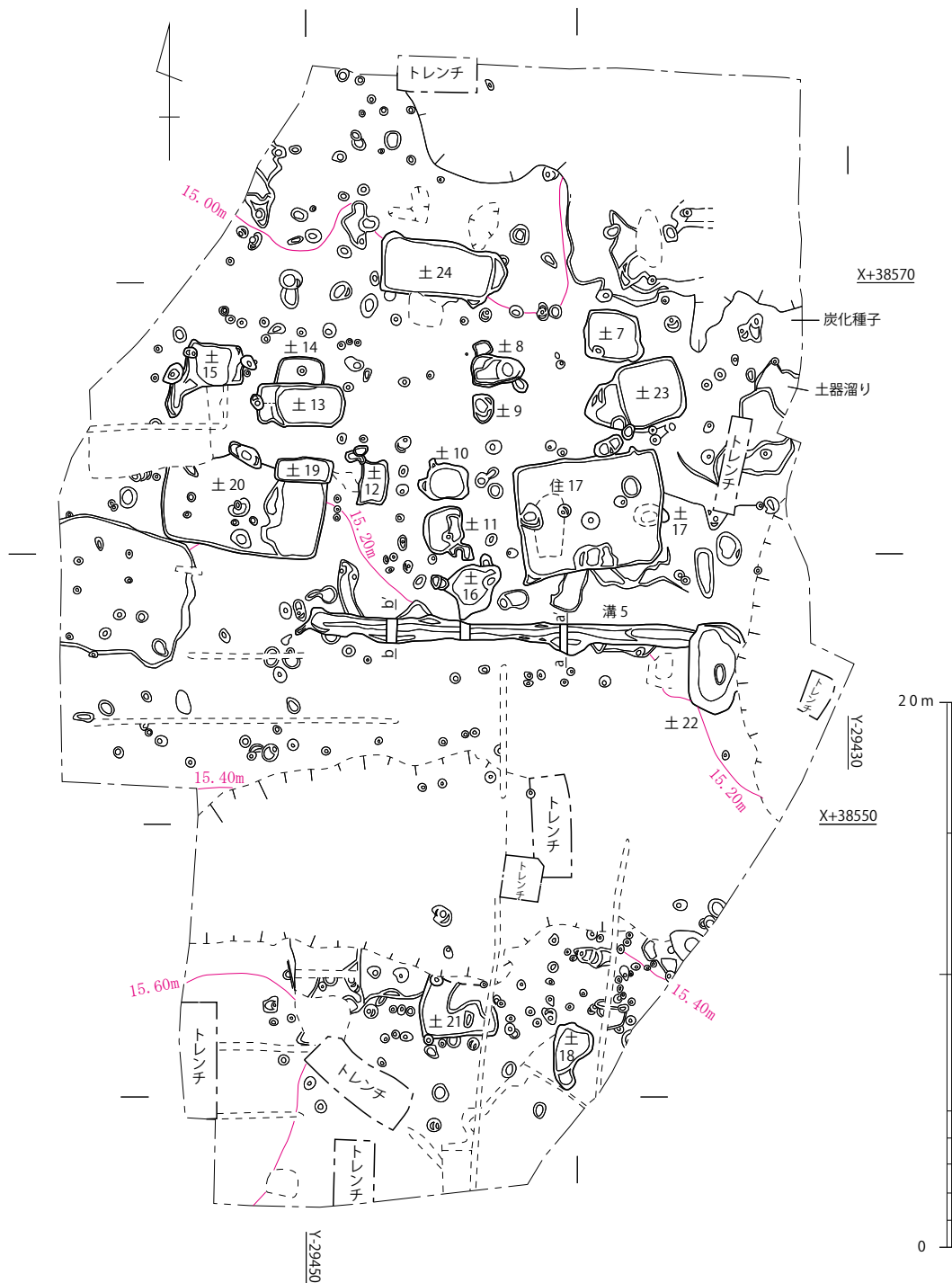
（B - B'）では民家に近接するため地表近くはかく乱が著しく、遺構面自体は確認できないが、（A - A'）と同様に主に茶褐色系の包含層（2～5 層）を切り込む第 1 面に伴うと考えられる遺構が認められる。2 層の下位から掘削される遺構（26 層）もあるため、厳密にはより多くの遺構面があると考えられる。（A - A'）と同様に更に下位に淡黄茶褐色系（6～9 層）と茶褐色系の砂質（10 層）の基盤層が認められる。ここでは、第 2 面の遺構が基本土層で確認できなかったため、包含層との先後関係を示すことができなかった。

第 1 面の調査面積は 1530㎡で、基本的にカマドを伴う竪穴住居跡 16 棟、土坑 6 基、溝 5 条、不明遺構 3 基、その他多数のピットを検出した。調査段階では、調査区北東端に更に 4 棟の竪穴住居跡があるものとして遺構番号を付していたが、それらを掘削した結果、床面が判然とせず、カマドも伴わないため包含層中の差異を区分して検出したものと判断した。これらを報告しないことで、報告で調査時から変更となる遺構番号の対照を示したのが第 1 表（15 頁）である。また、この第 1 面の検出面では、埋土が主に灰褐色の旧流路跡が、基本的に幅 8 m 以上で南北及び東西に通り、調査面の一定の範囲を占めている。

第 2 面の調査面積は 910㎡で、竪穴住居跡 1 棟、土坑 18 基、溝 1 条、その他多数のピットを検出した。第 1 面の調査終了後の第 2 面までの重機による掘削の際に、北側及び東側で地形の落ち込みが確認



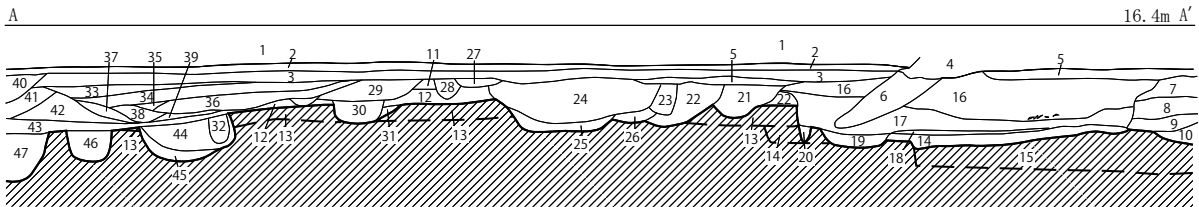
第4図 第1次調査区（I区）第1面全体図（1/250）



第5図 第1次調査区（I区）第2面全体図（1/250）

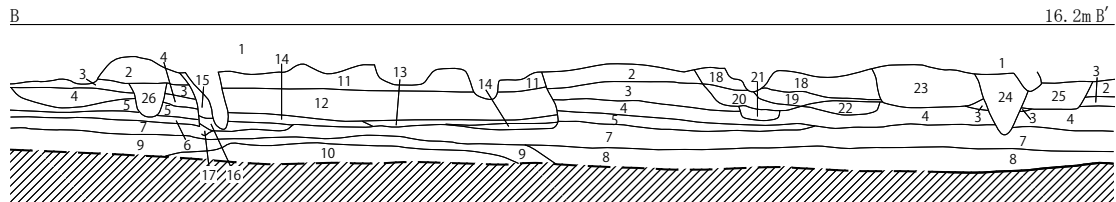
され、それらをもとに第2面の調査範囲を設定したため、調査面積が第1面より狭小となっている。

北側調査区は、試掘調査から本調査対象としていたが、重機による表土掘削を行ったところ、一部溝状の遺構が見られたが、非常に浅く時期も判然としなかった。そのため、掘削範囲を限定するとともに、調査区端部の一部を深く掘削したところ、遺物を含む堆積層が低位の方向へ落ち込む様相が確認されたため、その状況を記録するとともに遺物の取り上げを行った。第7図の土層図から、標高 15.6 ～ 15.8 m 程度で東方向へ遺物を含んだ層が落ち込んでいく状況が確認でき、またトレンチのすぐ横の壁面の土層から北側から南側へと同様に落ち込んでいる状況が見られたため、谷状の落ち込みが南北調査区の間広がっていることが想定される。



東壁

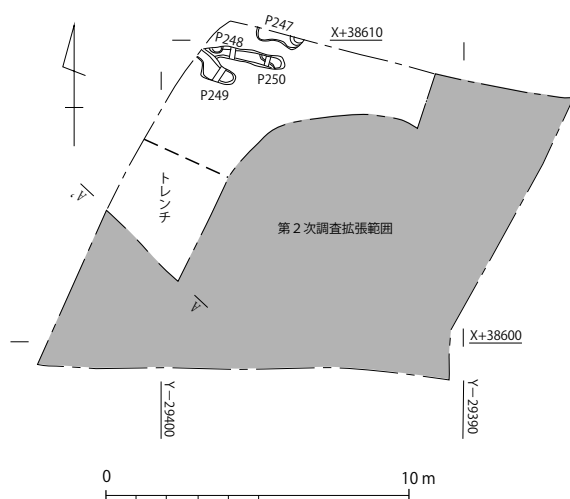
- | | | | |
|-----------|---|-----------|--|
| 1 灰褐色土 | 耕作土、粘質 | 25 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い、
24 よりやや明るい炭、焼土わずかに含む |
| 2 淡黄灰褐色土 | 床土、粘質 | 26 淡黄茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり強い |
| 3 黄灰褐色土 | 床土、粘質 | 27 淡灰茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり強い |
| 4 灰褐色土 | 客土、粘質 | 28 淡灰茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり強い、27 よりやや暗い |
| 5 淡黒灰褐色土 | 包含層、粘質、しまり強い、にごり多い | 29 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 6 淡灰茶色土 | 暗渠埋土、粘質 | 30 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い、29 より明るい |
| 7 茶褐色土 | 包含層、シルト、しまり非常に強い、焼土粒炭粒有 | 31 淡茶褐色土 | 下層埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 8 淡茶褐色土 | 包含層、シルト、7 に近いがやや明るい | 32 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 9 茶褐色土 | 包含層、シルト、8 よりやや暗い、炭粒やや目立つ | 33 灰茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い |
| 10 淡茶褐色土 | 包含層、シルト、しまり強い | 34 淡灰茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い |
| 11 茶褐色土 | 包含層、シルト、しまり強い | 35 淡茶褐色土 | 流路埋土、砂質、しまり非常に弱い |
| 12 淡茶褐色土 | 包含層、シルト、11 より明るい、しまり強い | 36 淡灰茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い、まだらににごる |
| 13 淡黄茶褐色土 | 地山、シルト、しまり強い | 37 淡灰褐色土 | 流路埋土、砂質、しまり非常に弱い |
| 14 淡黄茶褐色土 | 地山、シルト、13 より明るくやや砂質が多い、
しまり 13 よりやや弱い | 38 淡灰茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い |
| 15 茶褐色土 | 地山、砂質、しまり弱い | 39 灰褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い、やや粘性強い |
| 16 淡茶褐色土 | 住居埋土、シルト、しまりやや強い | 40 淡灰茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い、やや粘性強い、
まだらににごる |
| 17 淡茶褐色土 | 住居埋土、シルト、しまりやや強い、16 よりやや明るい、
炭やや目立つ | 41 淡灰茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い、やや粘性強い、
まだらににごる、40 よりやや暗い |
| 18 淡茶褐色土 | 住居埋土、シルト、17 よりしまりやや弱く、粘性やや強い | 42 淡茶褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い、砂質が多い |
| 19 淡茶褐色土 | 住居内ビット埋土、シルト、17 よりやや明るく、
粘性やや強い | 43 灰褐色土 | 流路埋土、シルト、しまり非常に弱い、やや粘性強い |
| 20 淡黄茶褐色土 | 住居周壁埋土、シルト、しまり非常に強い、ややにごる | 44 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり強い、やや粘性強い、炭粒含む |
| 21 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い | 45 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり強い、44 より暗い |
| 22 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い、21 よりやや明るい | 46 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまりやや強い |
| 23 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い、22 よりやや暗い | 47 淡灰茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまりやや強い、粘性やや強い、
炭わずかに含む |
| 24 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い、23 よりやや暗い、
下方に一部、炭、焼土が集中 | | |



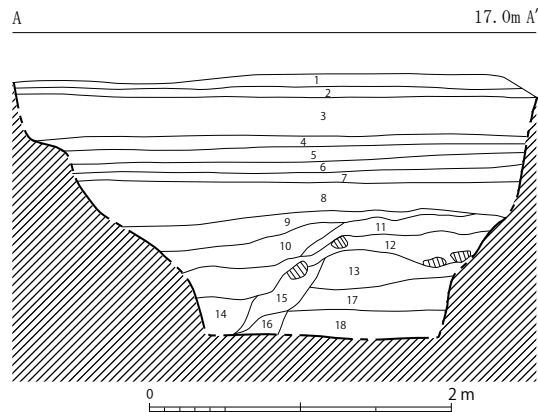
西壁

- | | | |
|----------------|-----------|--|
| 1 カクラン、造成土、暗渠等 | 15 淡黄茶褐色土 | 住居埋土、粘質、しまりやや弱い、焼土、灰を含む |
| 2 暗茶褐色土 | 16 暗灰褐色土 | 住居埋土、粘質、灰、炭、焼土が非常に多く、
まだらににごる |
| 3 淡灰茶褐色土 | 17 暗灰褐色土 | 住居埋土、粘質、しまりやや弱い、灰、炭を含む |
| 4 淡茶褐色土 | 18 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 5 淡黄茶褐色土 | 19 橙灰褐色土 | 遺構埋土、粘質、しまりやや強い、
灰、炭、焼土（ブロックも）著しく集中する |
| 6 淡黄茶褐色土 | 20 暗茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 7 淡黄茶褐色土 | 21 淡灰茶褐色土 | 遺構埋土、粘質、しまりやや弱い |
| 8 淡黄茶褐色土 | 22 灰茶褐色土 | 遺構埋土、粘質、しまりやや強い |
| 9 淡黄茶褐色土 | 23 灰茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 10 淡茶褐色土 | 24 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 11 暗茶褐色土 | 25 淡茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い、
24 よりやや明るい |
| 12 暗茶褐色土 | 26 灰茶褐色土 | 遺構埋土、シルト、しまり非常に強い |
| 13 暗灰褐色土 | | |
| 14 淡黄灰褐色土 | | |

第 6 図 第 1 次調査区基本土層実測図（1/60）



- | | |
|---------|-------------------------|
| 1 灰褐色土 | 耕作土 |
| 2 黄褐色土 | 床土 |
| 3 淡茶褐色土 | シルト、しまりやや弱い |
| 4 茶褐色土 | シルト、3よりしまりやや強い |
| 5 淡茶褐色土 | シルト、やや黄色味帯びる、ややしまり強い |
| 6 暗茶褐色土 | シルト、ややしまり強い |
| 7 茶褐色土 | シルト、やや黄色味帯びる、ややしまり強い |
| 8 暗茶褐色土 | シルト |
| 9 淡茶褐色土 | 砂質、ラミナ形成、しまり非常に弱い、砂粒細かい |

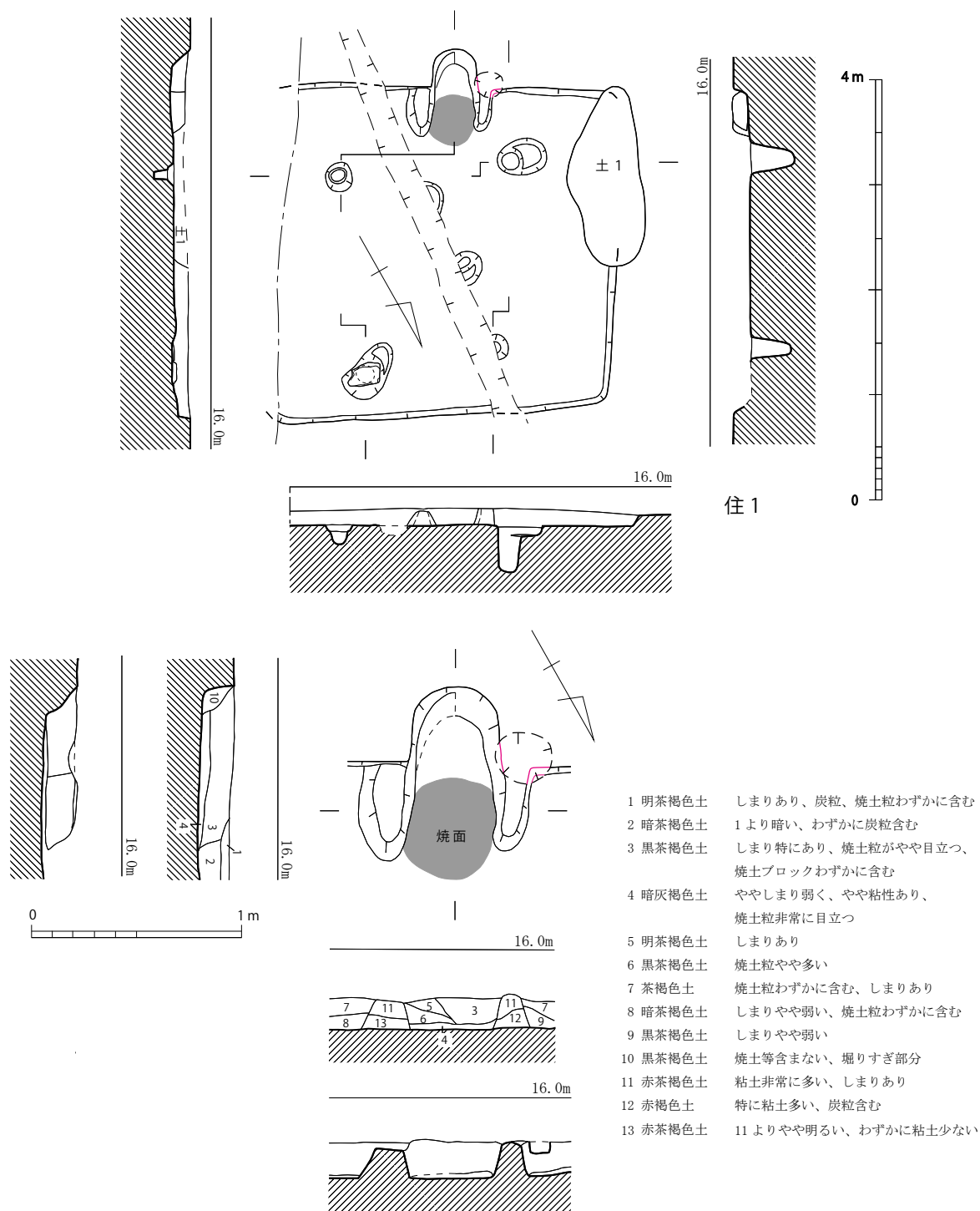


- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 10 淡灰茶褐色土 | 砂質、砂粒やや粗い、しまり非常に弱い、上方に粘質土ブロック含む |
| 11 茶褐色土 | 粘質、しまりやや強い、まだらで部分的に砂がラミナ状に入る |
| 12 暗灰茶褐色土 | 粘質、しまり強い、大きな礫を含む、砂がラミナ状に入る |
| 13 淡茶褐色土 | 砂質、しまり弱い、全体的に均質 |
| 14 淡灰茶褐色土 | 砂質、しまり弱い、砂粒粗い、ブロック状の粘質土多く含む |
| 15 淡茶褐色土 | 砂質、しまりやや弱い、砂粒やや粗い、13に近いがややにごる |
| 16 淡茶褐色土 | 砂質、しまり非常に弱い、15に近いがにごり少ない |
| 17 淡灰茶褐色土 | 砂質、しまりやや弱い、全体的に均質、砂粒やや粗い |
| 18 淡灰紺色土 | 砂質、砂粒非常に粗く、礫を多く含む、しまり非常に弱い |
- ※ 1～5層はやや粘性あり、その他の層は粘性少ない

第7図 第1次調査北側調査区全体図及び基本土層実測図（1/250・1/50）

第1表 新開遺跡遺構番号対照表

調査次数・面	報告番号	調査時番号
第1次第1面	7号竪穴住居跡	12号竪穴住居跡
第1次第1面	8号竪穴住居跡	13号竪穴住居跡
第1次第1面	9号竪穴住居跡	14号竪穴住居跡
第1次第1面	10号竪穴住居跡	16号竪穴住居跡
第1次第1面	11号竪穴住居跡	17号竪穴住居跡
第1次第1面	12号竪穴住居跡	18号竪穴住居跡
第1次第1面	13号竪穴住居跡	19号竪穴住居跡
第1次第1面	14号竪穴住居跡	20号竪穴住居跡
第1次第1面	15号竪穴住居跡	21号竪穴住居跡
第1次第1面	16号竪穴住居跡	22号竪穴住居跡
第1次第2面	17号竪穴住居跡	23号竪穴住居跡
第2次	18号竪穴住居跡	19号竪穴住居跡
第2次	19号竪穴住居跡	20号竪穴住居跡
第2次	20号竪穴住居跡	21号竪穴住居跡
第2次	21号竪穴住居跡	22号竪穴住居跡
第2次	22号竪穴住居跡	23号竪穴住居跡
第2次	23号竪穴住居跡	24号竪穴住居跡
第2次	24号竪穴住居跡	25号竪穴住居跡
第2次	1号落ち込み	26号竪穴住居跡



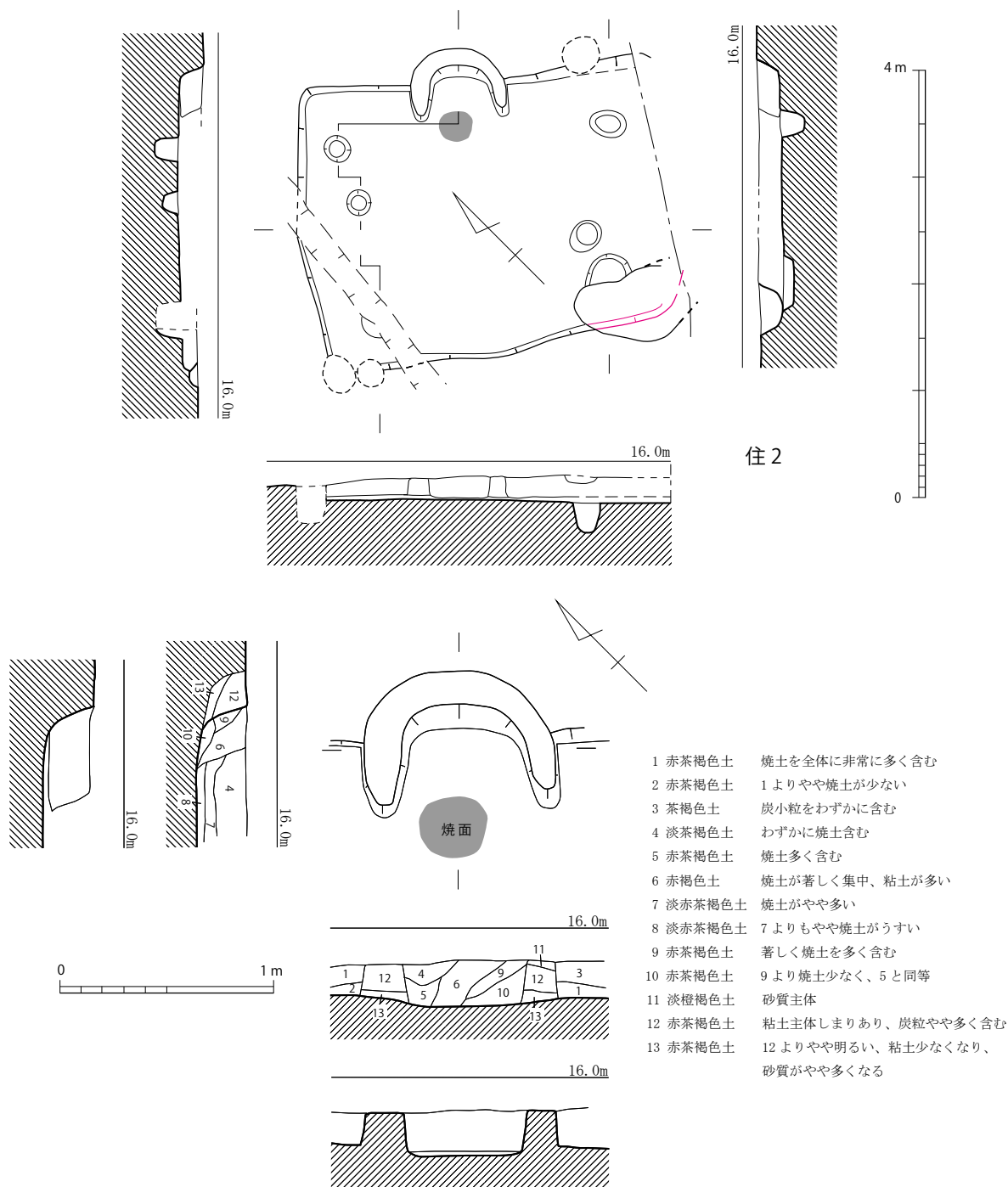
第 8 図 1 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

(3) 遺構と出土遺物

a. 竪穴住居跡

1 号竪穴住居跡 (図版 4、第 8 図)

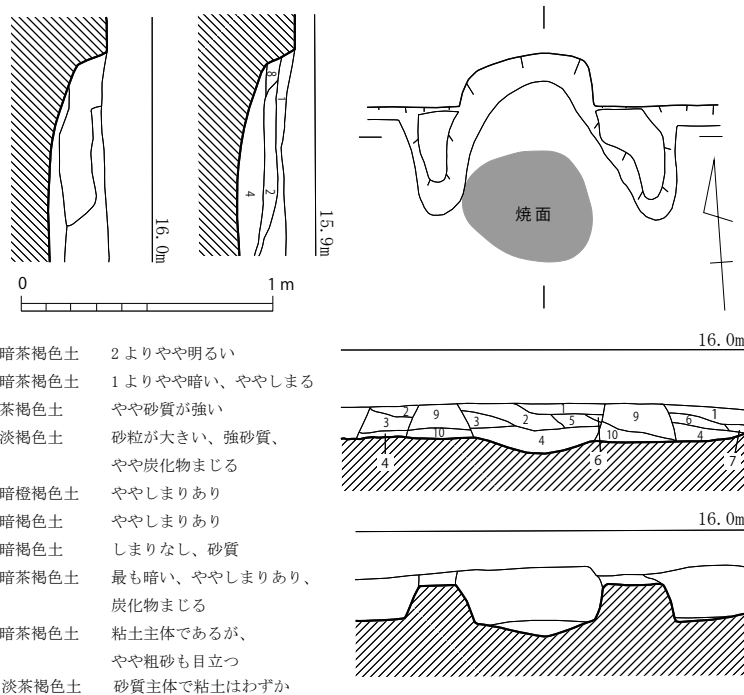
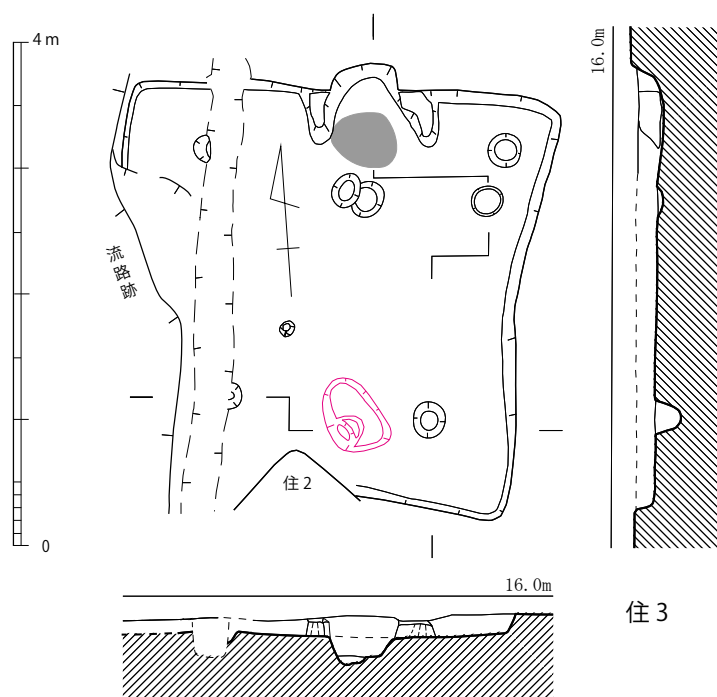
第 1 面の調査区東壁沿いの中央よりやや北側で確認され、2 号竪穴住居跡の南に位置する。西壁の一部を 1 号土坑に切られ、暗渠排水溝により南北に縦断した攪乱を受ける。南側の壁に突出型のカマドを附設する。主軸は南北方向で 3.1 m を測り、東側は調査区外へ及ぶため、正確な平面形は不明であるが、支柱穴の位置関係から正方形に近いと考えられる。住居跡の壁はおよそ 15cm 程度



第9図 2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

残っていた。支柱穴は4基とも確認されたが、南東側のものだけ特に浅く、判然としない。また、北東側の支柱穴直上の床面付近で平石が検出されている。出土遺物は須恵器甕の胴部の小片のみ。

カマド（図版4）住居跡南壁に突出型のカマドが確認された。突出部の掘り込みは最大幅40cm、奥行40cmほどを測り、袖は内向きに40～50cmほどが確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は80～90cmほどである。深さは奥壁に接する部分が15cmほどで、先端部に向かって徐々に深くなり、最深部で19cmほどとなる。燃焼部の埋土は、上層の明茶、黒茶褐色系のものと下層の薄く堆積する暗灰褐色のものに分かれる。奥壁の立ち上がりはやや緩やかで、半裁時に先に掘削した東側は掘り過ぎている。



第10図 3号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

85cm、奥行 33cm 程度であるが、粘土を貼った後は最大幅 60cm、奥行 15cm 程度で、袖は内向きに 30cm 程度確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は 45cm 程度である。深さは 23cm 程度である。燃焼部の埋土は住居跡の埋土に近い上層と焼土をやや多く含む下層に分かれるが、それらと奥壁の間に粘土・焼土が多い複数層を挟んでいる。これらは最終段階での奥壁をなしていたと考えられる。

出土土器 (図版 32、第 11 図 2)

2 は弥生土器甕で、口縁部から胴上部にかけて、口縁部付近はほぼ廻る程度まで遺存する。逆 L 字形の口縁の内側への突出はわずかで、胴部外面にはかすかにハケ目が残る。

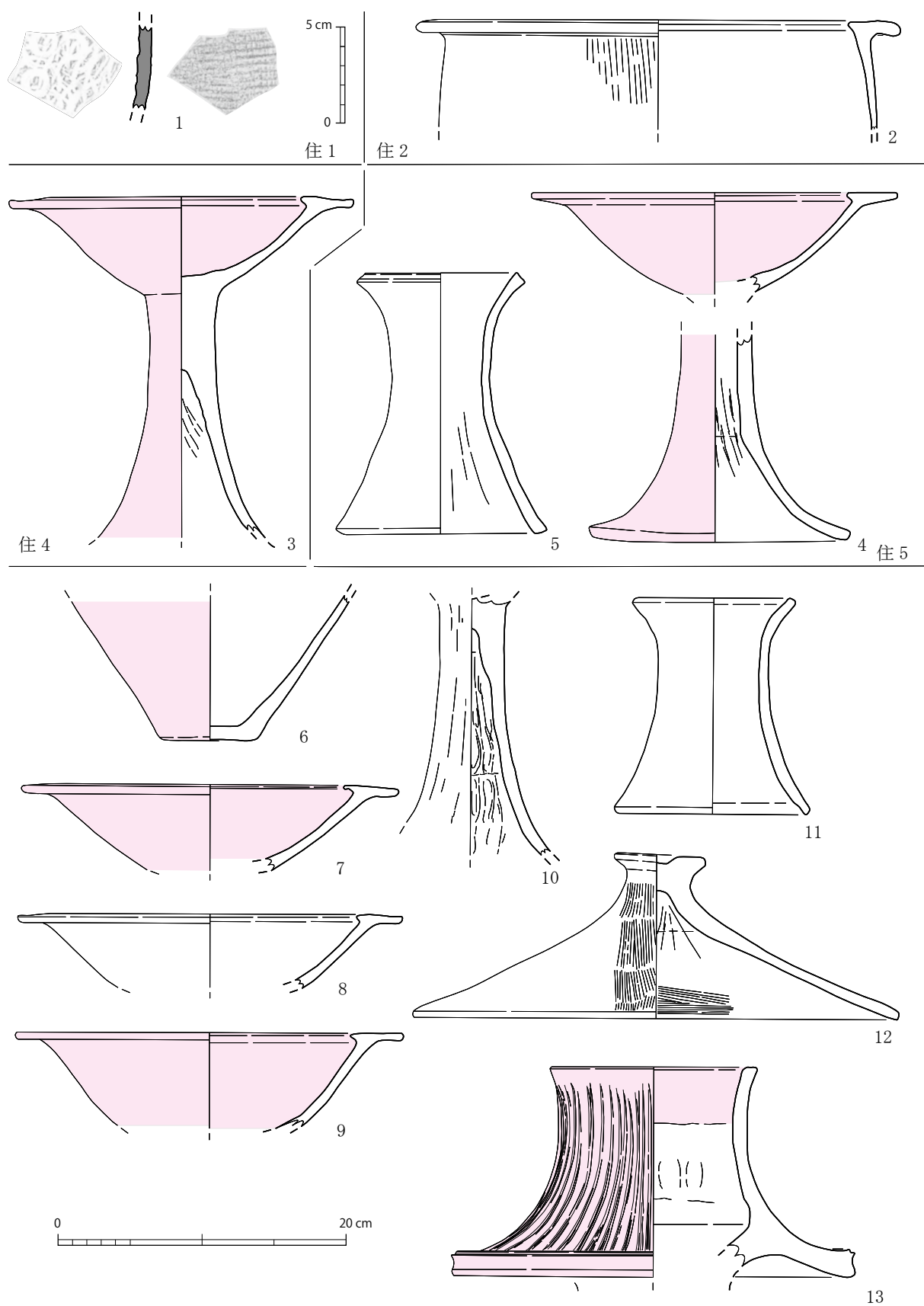
出土土器 (第 11 図 1)

1 は須恵器の大型の壺の胴部片。タタキを施し、内面に青海波文、外面には横に比して縦のラインが細かな格子目タタキが残る。

2号竪穴住居跡 (図版 4、第 9 図)

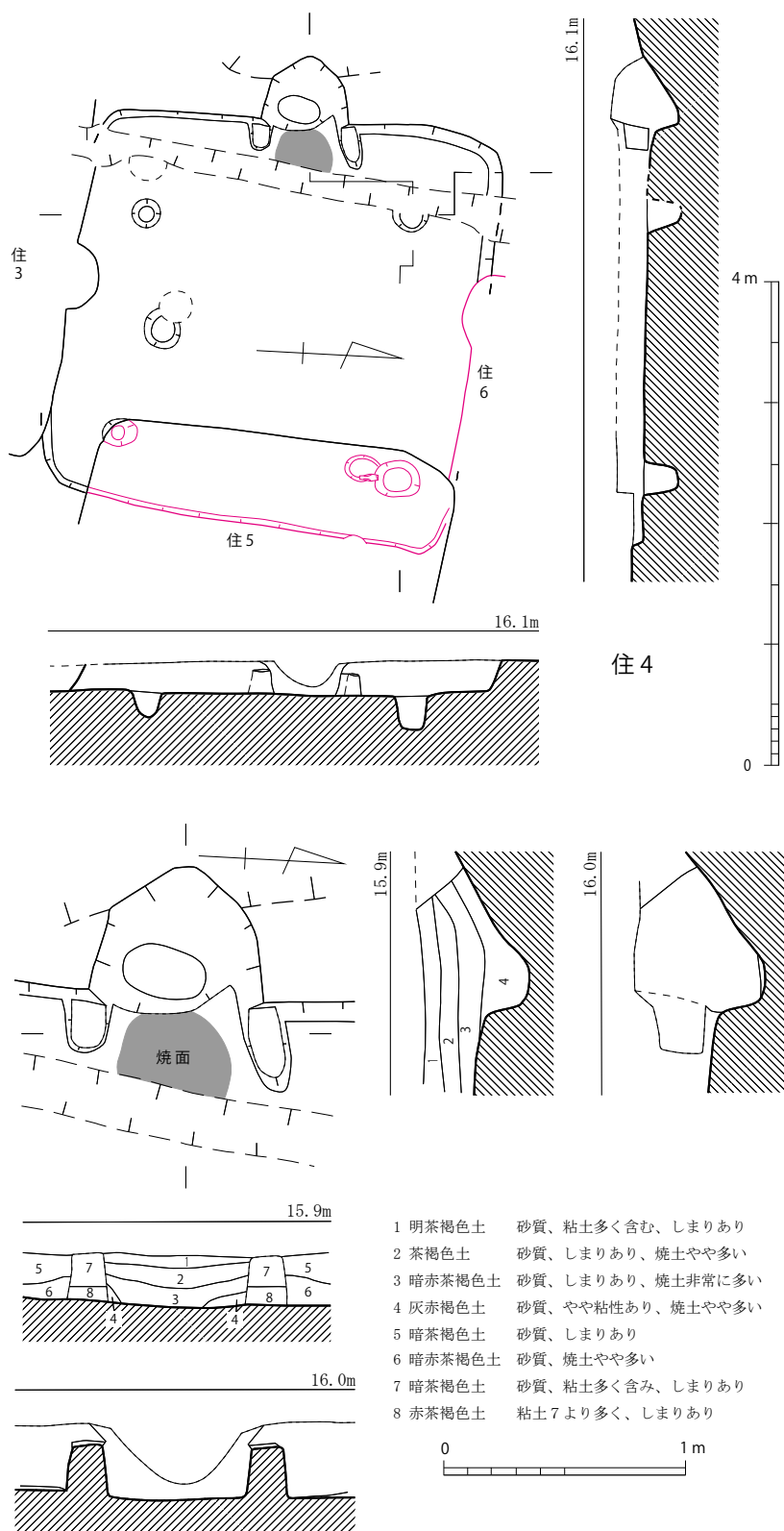
第 1 面の調査区東壁沿いの中央よりやや北側で確認された。1 号竪穴住居跡の北に位置し、北側の 3 号竪穴住居跡を切り、西側の一部が暗渠排水溝によって攪乱を受ける。北側の壁に突出型のカマドを附設する。主軸は北東－南西方向で、2.6 m を測り、東側は調査区外へ及ぶため、正確な平面形は不明であるが、支柱穴の位置関係や南壁から東壁への平面プランの変化から正方形に近いと考えられる。住居跡の壁はおよそ 10cm 程度残っていた。支柱穴は 4 基とも確認されたが、いずれも深さが 10cm 程度で判然としない。一定量ある出土遺物は弥生土器のみで、明らかに混入品であり、時期を反映する遺物は出土していない。

カマド (図版 5) 住居跡北壁に突出型のカマドが確認された。袖から連続して奥壁まで粘土を含む土を貼って構築する。そのため、突出部の掘り込みは、当初最大幅



住 6

第 11 図 1・2・4・5・6 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1 は 1/3、他は 1/4)



第12図 4号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

4号竪穴住居跡 (図版6、第12図)

第1面の調査区東壁沿いの北側で確認された。西側の壁に突出型のカマドを附設する。カマドの突出部の端が流路跡に切られ、住居跡西側で暗渠排水溝によって南北に縦断した攪乱を受ける。3・

3号竪穴住居跡

(図版5、第10図)

第1面の調査区東壁沿いの中央よりやや北側で確認された。北側の4号竪穴住居跡を切り、南側の2号竪穴住居跡、西側の流路によって切られる。北側の壁の中央に突出型のカマドを附設する。主軸は南北方向で3.3m、東西方向で3.4mを測り、平面形は正方形に近い。住居跡の壁はおよそ7cm程度の高さで残っていた。支柱穴は4基とも確認されたが、残りのよいものでも床面からの深さが10cm程度で判然としない。床下の掘り下げ時に南壁付近のカマドと対面に当たる位置で新たにピットを確認した。図示できる遺物は出土していない。

カマド (図版5) 住居跡北壁の中央に突出型のカマドが確認された。突出部の掘り込みは最大幅53cm、奥行20cm程度を測り、袖は内向きに45cm程度の長さで確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は65cm程度である。燃焼部の深さは、奥壁に接する部分が10cm程度で、先端部に向かって徐々に深くなり、最深部で20cm程度となる。燃焼部の埋土は、上層の茶褐色系のものと下層の炭化物を含む淡褐色のものに分かれる。

5・6号の各竪穴住居跡に切られるため壁の遺存範囲に限られるが、主軸は南北方向で3.3 m、東西方向で3.2を測り、平面形は正方形に近い。住居跡の壁はおよそ20cm程度残っており、支柱穴は4基とも確認された。時期を反映する土器を含め、図示できる出土遺物はわずかで、投弾が出土した。カマド（図版6） 住居跡西壁中央に突出型のカマドが確認された。突出部の端が流路跡に攪乱を受ける。突出部の掘り込みは最大幅73cm、流路跡に切られるまでの奥行は55cm程度を測る。袖は内向きに35cm程度の長さで確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は90cm程度である。突出部は焼成面より20cm程度深くなり、一旦掘削した後に焼成面まで整地したと考えられる。深さは、掘削した最深部で50cm程度となり、焼成面までは30cm程度である。燃焼部の埋土は、上層の茶褐色系のものと下層の焼土を含む赤褐色系のものに分かれ、更に下位で灰赤褐色の整地とみられる層となる。

出土土器（図版32、第11図3・13）

3は弥生土器の丹塗りの高杯で、口縁部から裾下端近くまで遺存する。器表の摩滅が著しく、丹は杯部内面にわずかに残るのみである。脚部内面には、シボリの痕跡が見られる。6号竪穴住居跡出土遺物として図示した13の筒形器台の一部も含まれる。

5号竪穴住居跡（図版6、第13図）

第1面の調査区東壁沿いの北側で確認された。西側の4号竪穴住居跡、北側の6号竪穴住居跡を切る。半分以上の範囲が東側の調査区外に及んでおり、検出した範囲ではカマドを確認できなかった。主軸は南北方向で3.0 mを測る。住居跡の壁はおよそ10cm程度残っており、支柱穴は、床面の掘り下げ時に南側で1基のみ確認された。出土土器は弥生土器のみで、磨製石剣も出土したが、時期を示すものではない。

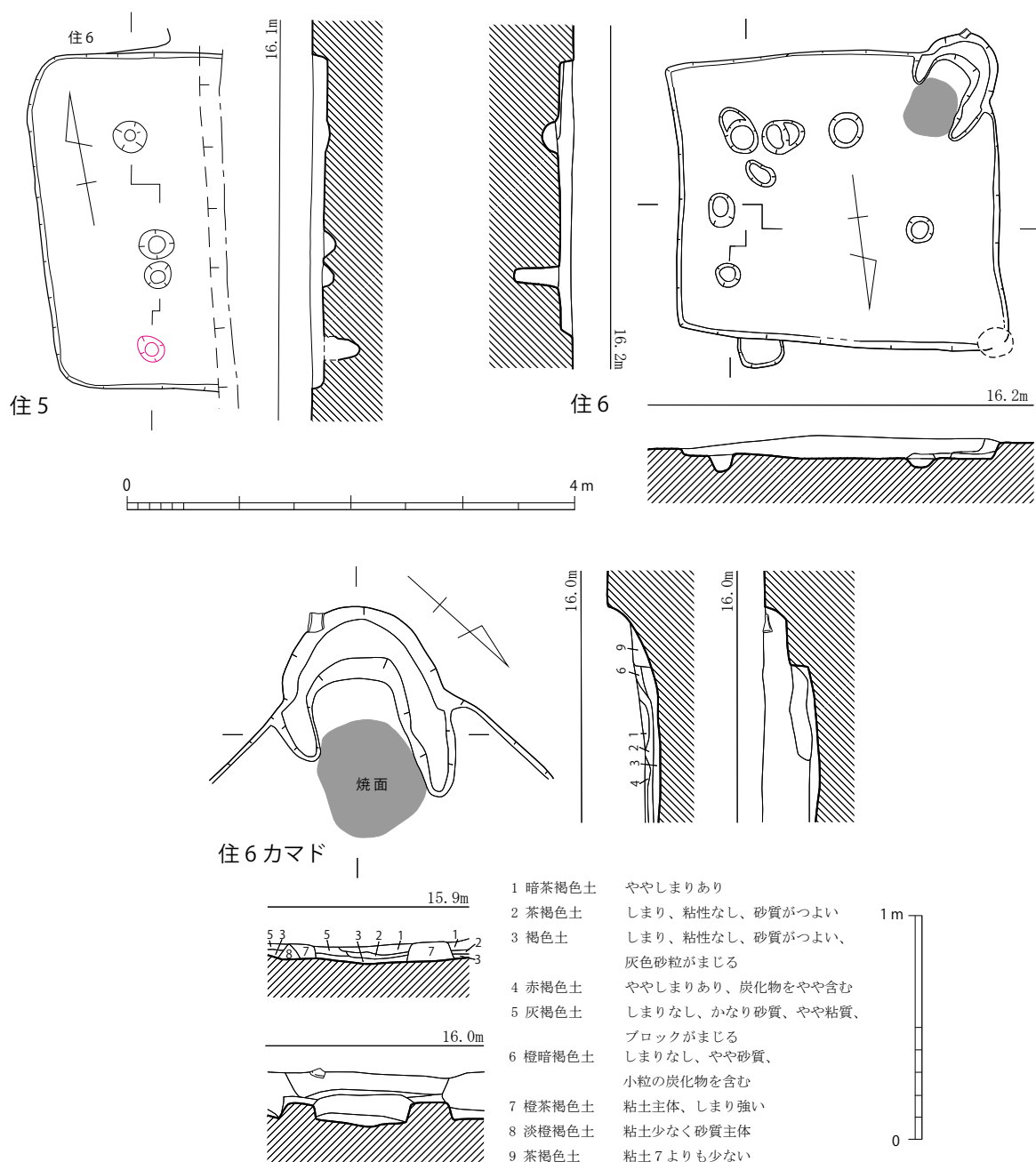
出土土器（図版32、第11図4・5・13）

出土土器は全て弥生土器である。4は丹塗りの高杯で、杯部と脚部で接合していないが、淡橙褐色の胎土から同一個体と考えられる。杯部では特に摩滅が著しく器表の剥落が目立ち、丹はほとんど残っていない。5は中位がすぼまる器台で、完形に復元される。6号竪穴住居跡出土遺物として図示した13の筒形器台の一部も含まれる。

6号竪穴住居跡（図版7、第13図）

第1面の調査区東壁沿いの北側で確認された。南西隅に突出型のカマドを附設する。南側の4号竪穴住居跡を切り、5号竪穴住居跡に切られる。主軸は南北方向で2.7 m程度、東西方向で2.85 m程度を測り、平面形は正方形に近い。住居跡の壁はおよそ20cm程度残っており、支柱穴は1基のみ掘方の深いものが確認できたが、他の柱穴は浅く判然としない。出土遺物の弥生土器は明らかに混入品で、時期を反映する遺物は出土していない。

カマド（図版7） 住居南西隅に突出型のカマドが確認された。袖から奥壁までを連続して粘土を含む土を貼って構築する。そのため、突出部の掘り込みは、当初最大幅70cm程度、奥行40cm程度であるが、粘土を貼った後は最大幅45cm、奥行16cm程度で、袖は内向きに45cm程度確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は60cm程度である。住居跡の検出面から20cm程度掘り下げた高さから検出され、そこから更に奥壁に接する部分の深さが8cm程度で、先端部の最深部で10cm

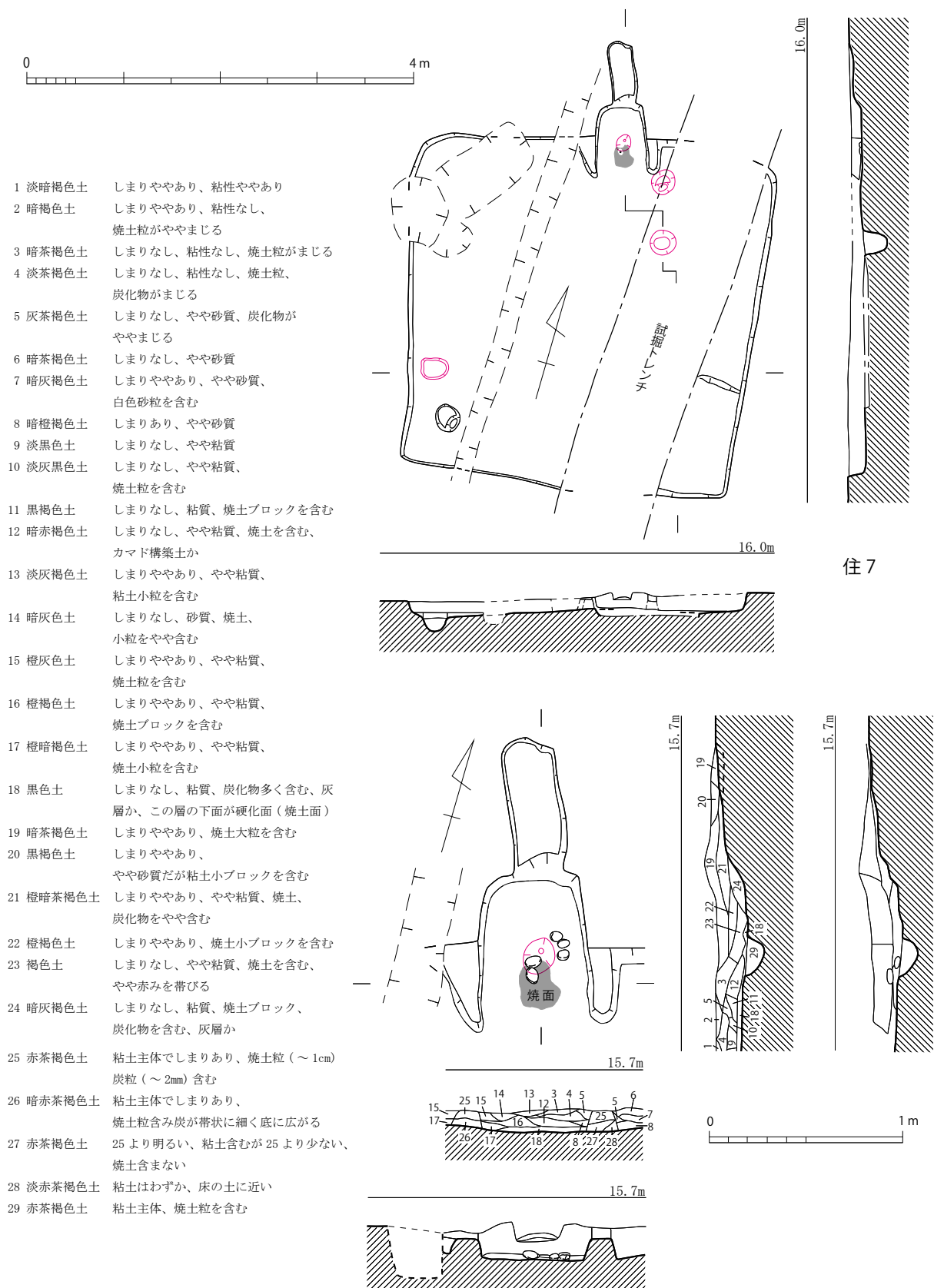


第 13 図 5 号竪穴住居跡及び 6 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

程度となる。燃焼部の埋土は、茶褐色系のものが主体で、炭化物を含む層が上層に堆積する。今回の報告で唯一の住居跡の隅に設けられたカマドである。

出土土器 (図版 32、第 11 図 6～13)

出土土器は全て弥生土器である。6 は丹塗りの甕の底部で、胎土は精製されているが、器表の摩滅が著しい。7～10 は高杯で、7～9 はいずれも鋤先状の口縁である杯部で器表の摩滅が目立つ。10 は脚部で板状の工具によるものか、細長い面状の調整単位が残る。11 は器台である。12 はほぼ完形の蓋で、外面には縦位のハケ目、内面は裾部付近に横位のハケ目が残る。13 は丹塗りの筒形器台で、鏝部より上位が遺存する。外面の縦位の暗文は、2・3 条が集中した単位が間隔を空けながら全周にわたって施されている。外面の丹は良好に残る。



7号竪穴住居跡（図版8、第14図）

第1面の調査区中央の北側で確認された。北側の壁に突出型のカマドを附設する。9号竪穴住居跡の西側に位置し、南北に縦断する試掘調査時のトレンチや暗渠排水溝をはじめ多くの攪乱を受ける。主軸は南北方向で3.9 m程度、東西方向で4.0 m程度を測り、平面形は正方形に近い。住居跡の壁は20cm程度残っていた。攪乱が多いこともあり、確認した主柱穴は2基で、床下の掘り下げ時や試掘トレンチの底から確認された。また、カマドの右袖前にも床下掘り下げ時にピットが確認され、袖石を据えたピットの可能性があるが、左袖付近では確認できなかった。土師器・須恵器が出土した。

カマド（図版8） 住居跡北壁に突出型のカマドが確認され、煙道部も残る。突出部の掘り込みは最大幅55cm程度、奥行40cm程度を測り、袖は内向きに40～45cmほどが確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は80～85cm程度である。深さは、奥壁に接する部分で20cm程度となる。煙道部は28cm程度、長さ65cm程度で、燃焼部からの接続部分では10cm程度の深さであるが、先端へと徐々に浅くなる。燃焼部の埋土は、上層で茶褐色系の住居跡埋土と同様のものが主体で、下層で焼土や灰を含む層が見られる。燃焼部床面の中央には深さ10cm程度の掘り込みピットがあり、またその周辺には複数の円礫が出土しており、それらで支脚を固定したと考えられる。

出土土器（第16図1・2）

1は土師器杯蓋である。口縁部はやや外へ屈曲し、口唇部へと薄く仕上げられている。外面の天井部との境の明瞭な稜が残る。2は須恵器杯蓋で、口縁部付近は丸みをもってやや厚くなり、天井部付近は回転ケズリの後にナデで仕上げられ、外面は全体に明瞭な稜が少なく丸みが強い。

8号竪穴住居跡（図版8、第15図）

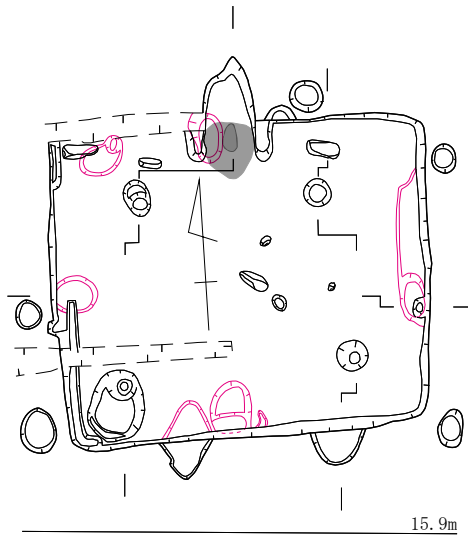
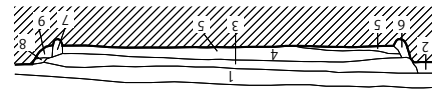
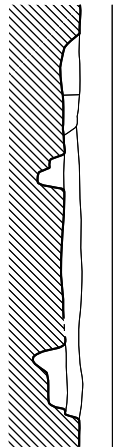
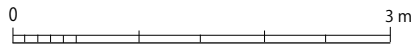
第1面の調査区中央のやや西側で確認された。北側の壁に突出型のカマドを附設する。東西方向に通る暗渠排水溝により2ヶ所で攪乱を受ける。主軸は南北方向で3.4 m程度、東西方向で3.9 m程度を測り、平面形はやや東西に長い長方形である。住居跡の壁は30cm程度残っており、第1面で検出した住居跡の中で最も深い床面である。主柱穴は4基ともに確認できた。西壁付近で周壁溝が確認でき、また東壁際では、床下掘り込みが確認された。複数の細長い礫が出土しており、支脚や袖石等のカマドを構成した部材とみられる。土師器・須恵器、土錘が出土した。

カマド（図版9） 住居跡北壁に突出型のカマドが確認された。左袖の付根付近が、暗渠排水溝により完全に失われるが、突出部の掘り込みは最大幅55cm程度、奥行65cm程度を測り、袖は内向きに45cm程度確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は110cm程度である。深さは、奥壁に接する部分で18cm程度となる。燃焼部の埋土は、上層で暗褐色の住居跡埋土と同様で、下層で焼土、灰、炭を含む層が見られる。

出土土器（図版32・33、第16図3～11）

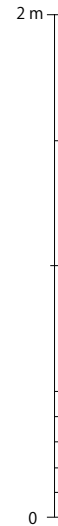
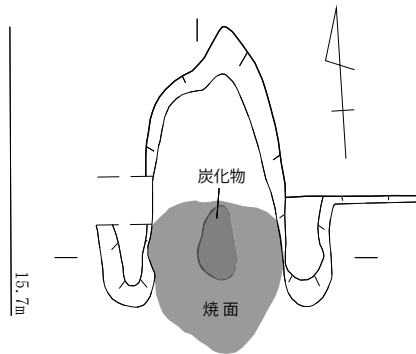
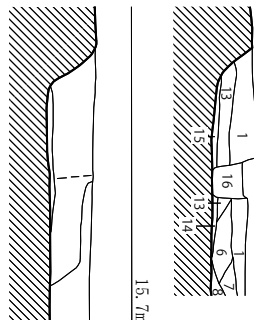
3～10は土師器である。3は椀で橙茶褐色の胎土で、外面下半にケズリが残る。4は杯蓋で口縁はやや外へ屈曲し、天井部との境の稜は丸みが強いが、強く屈曲する。5は小型の壺とみられ、胎土は精良である。口縁部はわずかに外反しながら開き、口唇部は薄く仕上げられる。胴部はやや丸みをもって膨らむ。6は甕で口縁部から肩部が残り、やや精良な胎土である。7は甕で、強く締まる頸部から、口縁部は外半しながら開く。外面にハケ目、内面に粗いケズリが残るとともに頸部の

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | しまり非常によい、明茶土
ブロック多く含む、包含層 |
| 2 暗茶褐色土 | 3よりやや明るい、しまりよい |
| 3 暗茶褐色土 | 2よりやや暗い、しまりよい |
| 4 暗茶褐色土 | 3よりやや明るい、しまりよい
炭粒・焼土粒を僅かに含む |
| 5 暗灰茶褐色土 | やや粘性あり |
| 6 茶褐色土 | しまりよい、
地山に近いがやや暗い |
| 7 暗灰褐色土 | しまりよい |
| 8 暗茶褐色土 | 3よりやや暗い |
| 9 茶褐色土 | しまりよい、包含層 |



15.9m

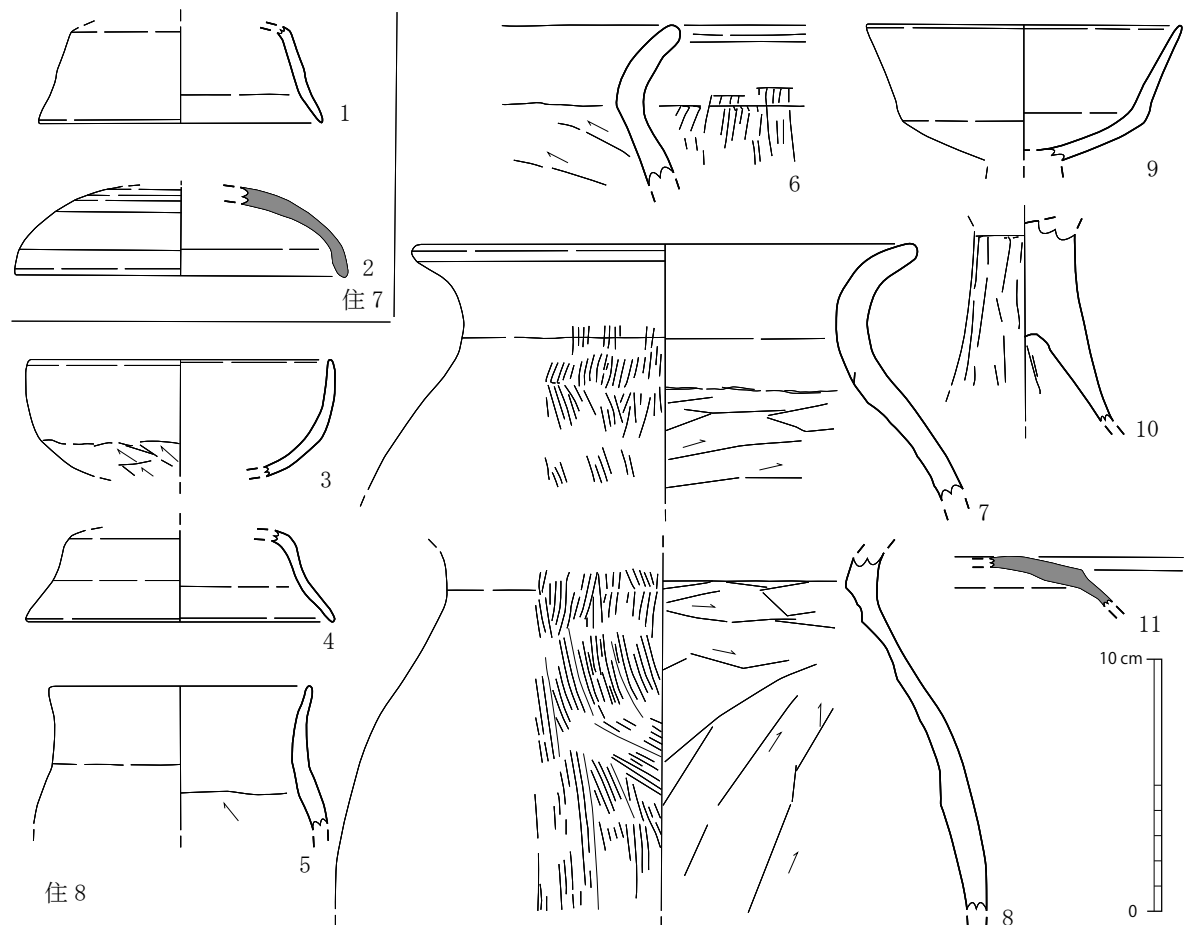
住 8



- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | しまりなし、粘性なし、やや砂質、住居埋土 |
| 2 橙褐色土 | しまりややあり、粘性なし、住居埋土 |
| 3 紫褐色土 | しまりややあり、粘性なし |
| 4 明褐色土 | しまりなし、粘性ややあり、焼土まじる |
| 5 暗灰褐色土 | しまりなし、粘性なし、炭がまじる |
| 6 暗褐色土 | しまりなし、粘性なし、焼土まじる、
支脚抜き取り痕か？ |
| 7 暗灰黒褐色土 | しまりなし、粘性なし、焼土がややまじる |
| 8 淡褐色土 | しまりなし、粘性なし、焼土、炭まじる |
| 9 茶褐色土 | しまりややあり、粘性なし、焼土多くまじる |
| 10 暗茶褐色土 | しまりややあり、粘性なし、焼土、炭まじる |
| 11 明茶褐色土 | しまりややあり、粘性ややあり、炭がまじる |
| 12 黒茶褐色土 | しまりややあり、粘性なし、炭主体 |
| 13 灰茶褐色土 | しまりややなし、粘性あり、焼土粒やや含む |
| 14 暗灰褐色土 | しまりなし、粘性あり、灰、炭、
焼土が含まれる |

- | | |
|----------|-----------------------|
| 15 灰茶褐色土 | 13に近いが灰がやや多く明るい |
| 16 灰褐色土 | にごり強い、しまりなし、粘性あり、暗渠埋土 |
| 17 暗茶褐色土 | 粘土主体、しまりあり |
| 18 暗茶褐色土 | 粘土主体、しまりあり、17よりやや明るい |
| 19 暗灰褐色土 | やや粘性あり、焼土粒、炭粒を多く含む |
| 20 黒灰褐色土 | 炭、灰を含む |

第 15 図 8 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第 16 図 7・8 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

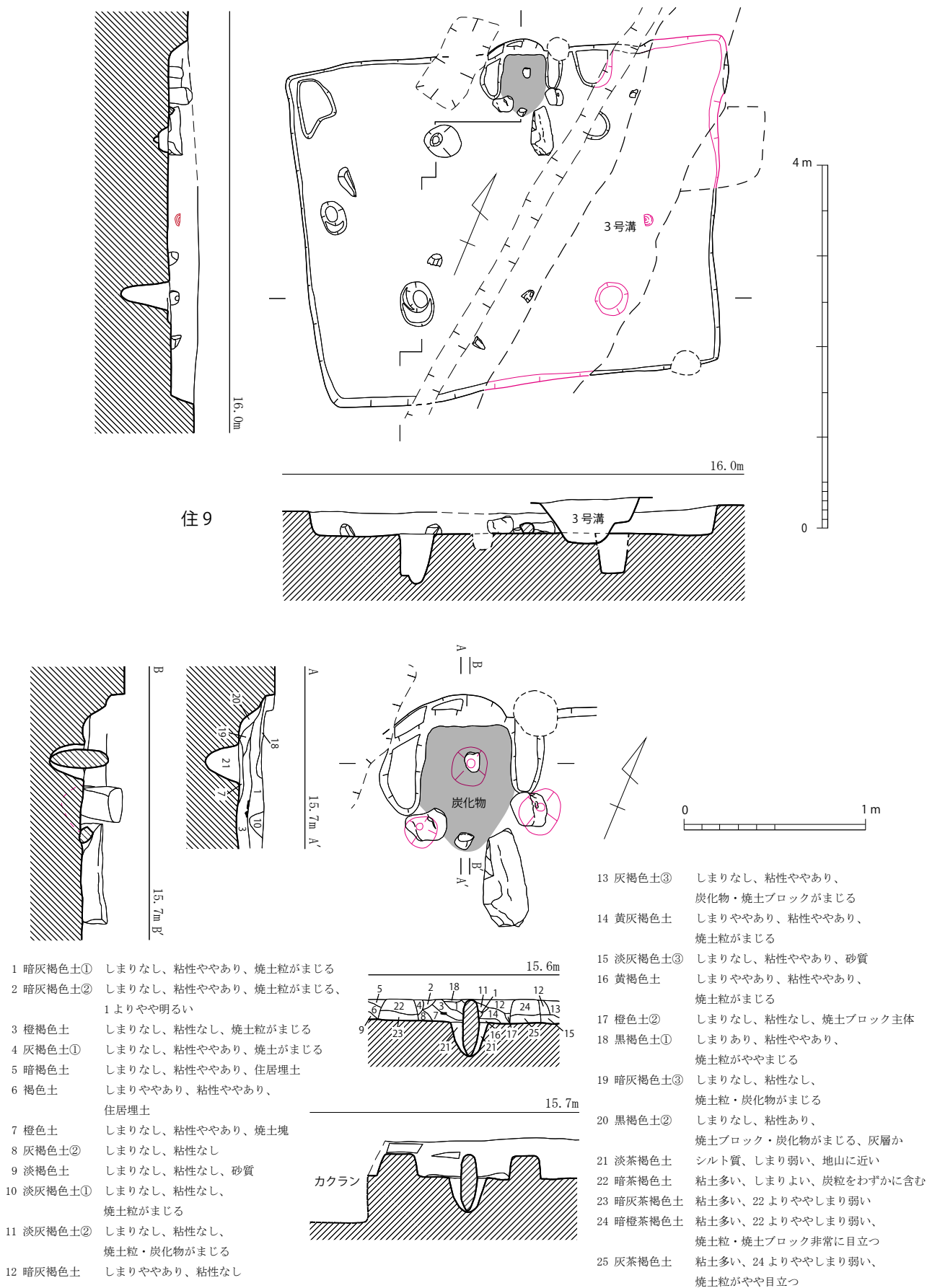
接合痕が明瞭に残る。8 は甕で屈曲する頸部から下位が残る。外面にハケ目、内面に粗いケズリが明瞭に残る。明茶褐色の特徴的な胎土である。9 は高杯の杯部で、口縁部は特に外面で明瞭な稜を伴って屈曲し立ち上がる。口唇部は薄く仕上げられ、胎土は精良である。10 は高杯の脚部で、上位は中実である。外面は調整のため縦位の長い面をなす。

11 は須恵器杯蓋で、天井部の回転ケズリの後にナデを施す部分の境は強い稜が生じる。

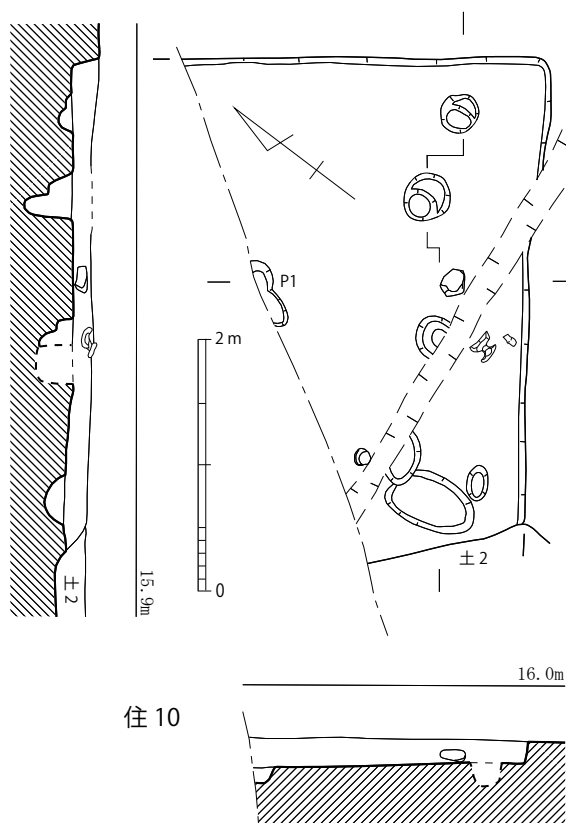
9 号竪穴住居跡（図版 9、第 17 図）

第 1 面の調査区中央のやや西側で確認された。北側の壁に突出型のカマドを附設する。7 号竪穴住居跡の西側に位置し、3 号溝や暗渠排水溝により南北に縦断する攪乱を受ける。主軸は南北方向で 3.8 m 程度、東西方向で 4.5 m 程度を測り、平面形はやや東西に長い長方形である。住居跡の壁は 30cm 程度残っていた。支柱穴は 4 基とも確認できたが、北側の 2 基は、南側の 2 基よりも非常に浅い。なお、南東側の支柱穴は下層への掘削時に検出したもので、位置や深さから支柱穴として対応すると判断した。カマドの前面及び西側で検出した石材は、カマドを構築する部材と考えられる。土師器・須恵器、石製紡錘車が出土した。

カマド（図版 9） 住居跡北壁に突出型のカマドが確認された。左袖と接続する付近の住居跡北壁が大きく攪乱を受け、右袖の接続部もピットにより攪乱を受ける。突出部は 15cm 程度とわずかで、奥壁の上端のみが突出して、下端は住居跡の壁の下端とほぼ連続する位置に当たり、掘り込み幅は



第 17 図 9 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第 18 図 10 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

内面に明瞭なケズリが残る。4 は甕で底部付近は屈曲して、レンズ状になるとみられる。外面にハケ目、内面にケズリが残る。器表の摩滅が激しいが、外面に煤とみられる痕跡がわずかに残る。5 は鉢で、口縁部が外反して開き、外面下位にはケズリ後にナデを施したとみられる。やや精良な胎土である。6・7 は甌の把手である。

8～13 は須恵器である。8・9 は杯蓋で、8 は天井部のみが残り、外面は回転ケズリ後にナデの仕上げが施される。9 は天井部の回転ケズリの境が明瞭な稜となる。10・11 は杯身で、ともにかえりの口縁部が連続して欠けており、人為的に打ち欠いたと考えられる。10 ではかえり自体を大きく打ち欠いているのに対し、11 は端部付近のみを打ち欠いた部分がほとんどである。10 は暗灰褐色を呈し非常に硬緻なのに対し、11 の外面は淡茶褐色である。また、外底部は 10 ではヘラ切り後に粗いナデで仕上げて全体に粗雑な作りであるのに対し、11 では回転ケズリが明瞭に残り、特徴を異にする。なお、10 はほぼ完形である。12 は壺の口縁部小片で、肥厚した端部外面はやや凹み、口唇部は面をなす。13 は皿の可能性もあるが、蓋の器形になると考える。天井部の外面はヘラ切り後回転ナデを施し、内面は不定方向のナデが残る。全体にやや粗雑な作りである。

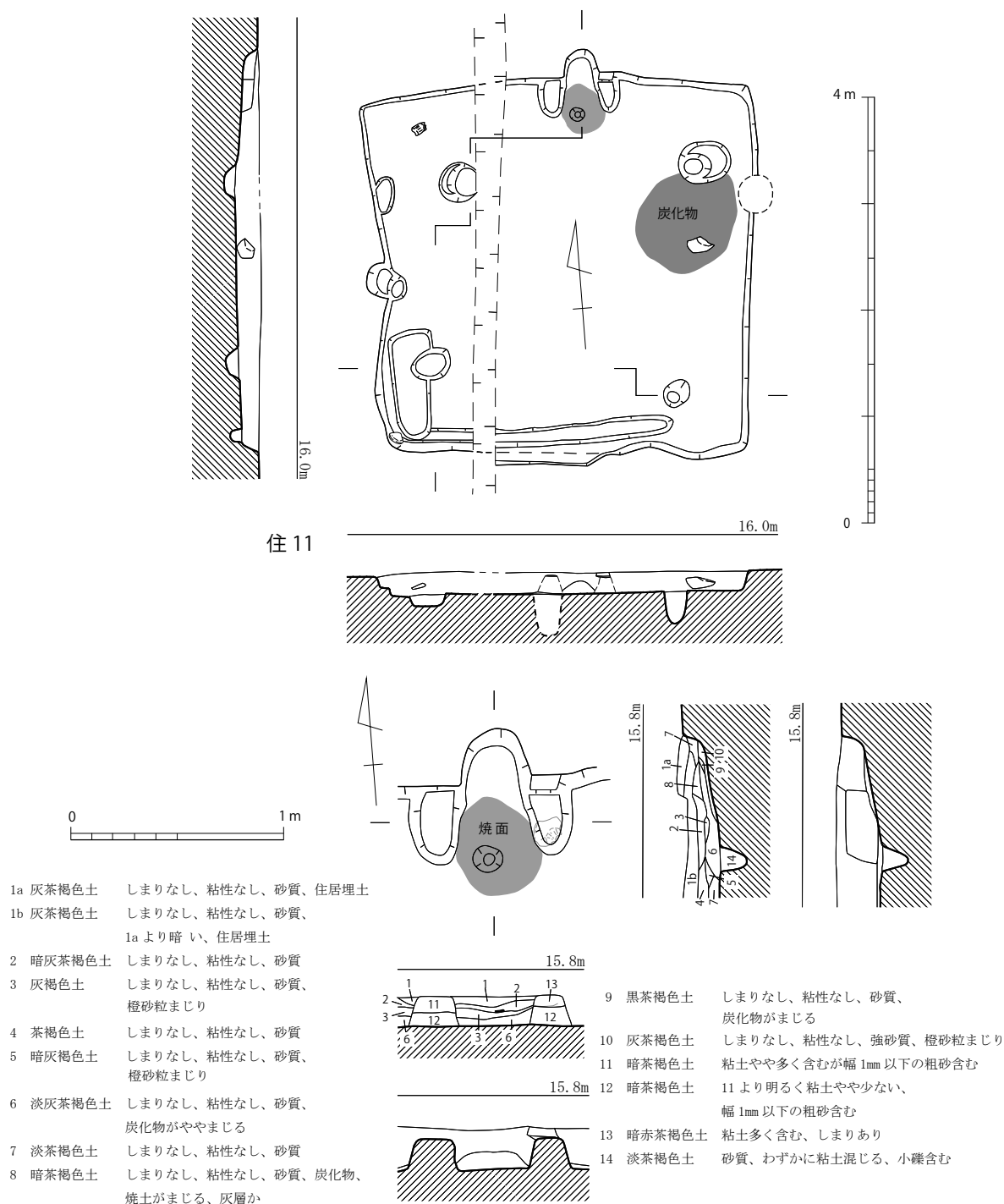
10 号竪穴住居跡 (図版 10、第 18 図)

第 1 面の調査区西壁沿いの北端近くで確認され、11 号竪穴住居跡の西に位置する。西側が調査区外へ及ぶとともに、2 号土坑をはじめとした別遺構に切られるため、全容は不明で、暗渠排水溝によって南北に縦断した攪乱を受ける。検出した範囲でカマドは確認されず、住居跡の壁は 20cm 程度残っていた。土師器が出土し、主柱穴と思われるピットが 2 基検出された。

最大で 60cm 程度である。石製支脚、両袖石が原位に残っており、支脚は奥壁下端から 20cm 程度の位置にあり、袖石は、左袖石の前面までは 65cm 程度、右袖石の前面まで 60cm 程度突出した位置に当たる。したがって燃焼部の奥行は 75～80cm 程度で、袖石間の 50cm 程度が焚口の寸法となる。また、前面で出土した石が長さ 50cm 程度と焚口と同様の大きさなので、天井石であった可能性が高いと考えられる。深さは 20cm 程度である。石製支脚、両袖石ともに径 20cm 程度の掘り込みピットで固定されており、その深さは袖石よりも支脚の方がやや深い。燃焼部の埋土は、上層で暗灰褐色系住居跡埋土と同様のものが主体で、下層で焼土を多く含む橙褐色の層が見られる。

出土土器 (図版 33、第 20 図 1～13)

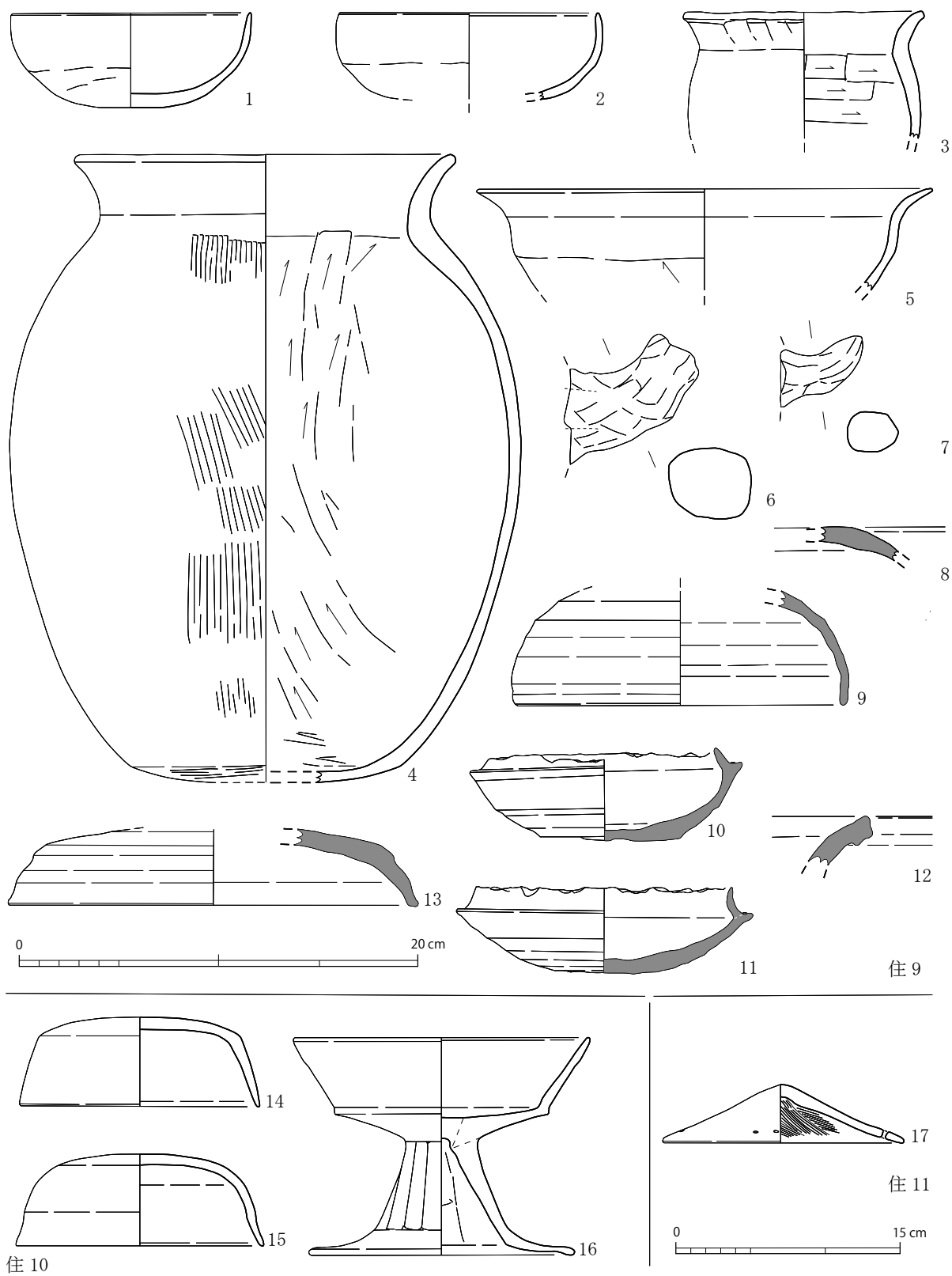
1～7 は土師器である。1・2 は碗で、ともに口唇部は薄く仕上げられる。1 は外面下半でケズリ後にナデで仕上げられており、2 の器表は摩滅が激しい。3 は小型の甕で短い口縁がやや外半して開く。



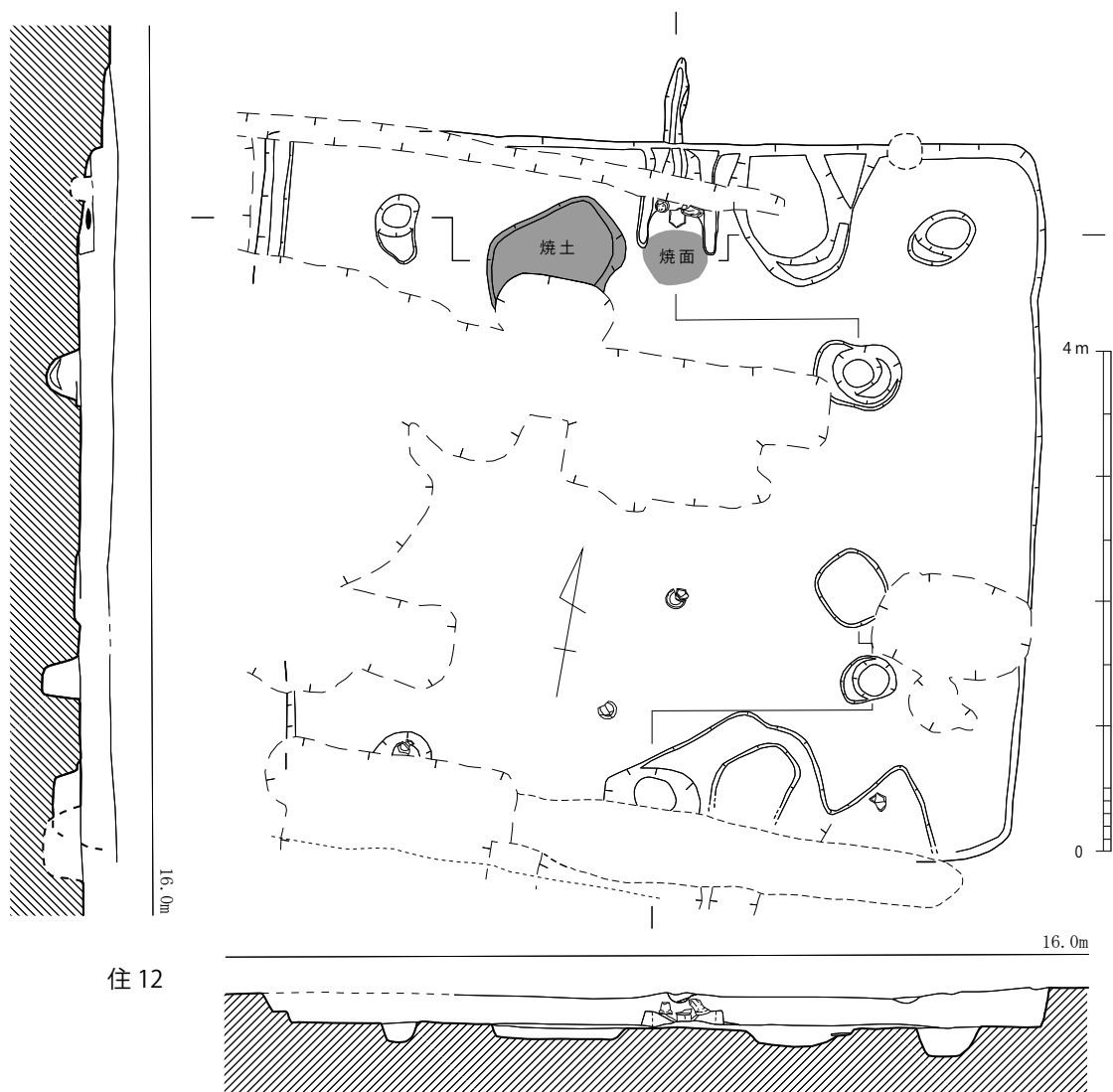
第19図 11号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

出土土器 (図版33、第20図14～16)

14～16は全て土師器である。14は土師器杯蓋で、天井部にはケズリの後にナデを施しており、その境には明瞭な稜がある。そこから口縁部は直線的に伸び、口唇部は薄く仕上げられる。胎土は精良である。15は土師器杯蓋で、天井部には回転ケズリ後にナデを施している。天井部の境は明瞭ではなく、口縁部は外面でやや厚さを減じて外反気味にわずかに開く。胎土は精良である。16は完形に復元される高杯で、杯部の外面には明瞭な稜と段があり、そこから口縁部は直線的に立ち上がる。脚部の柱部外面には強いナデによる縦方向の面が生じ、内面委は回転されたケズリが施される。胎土は精良である。



第 20 図 9 ～ 11 号竪穴住居跡出土土器実測図 (17 は 1/4、他は 1/3)

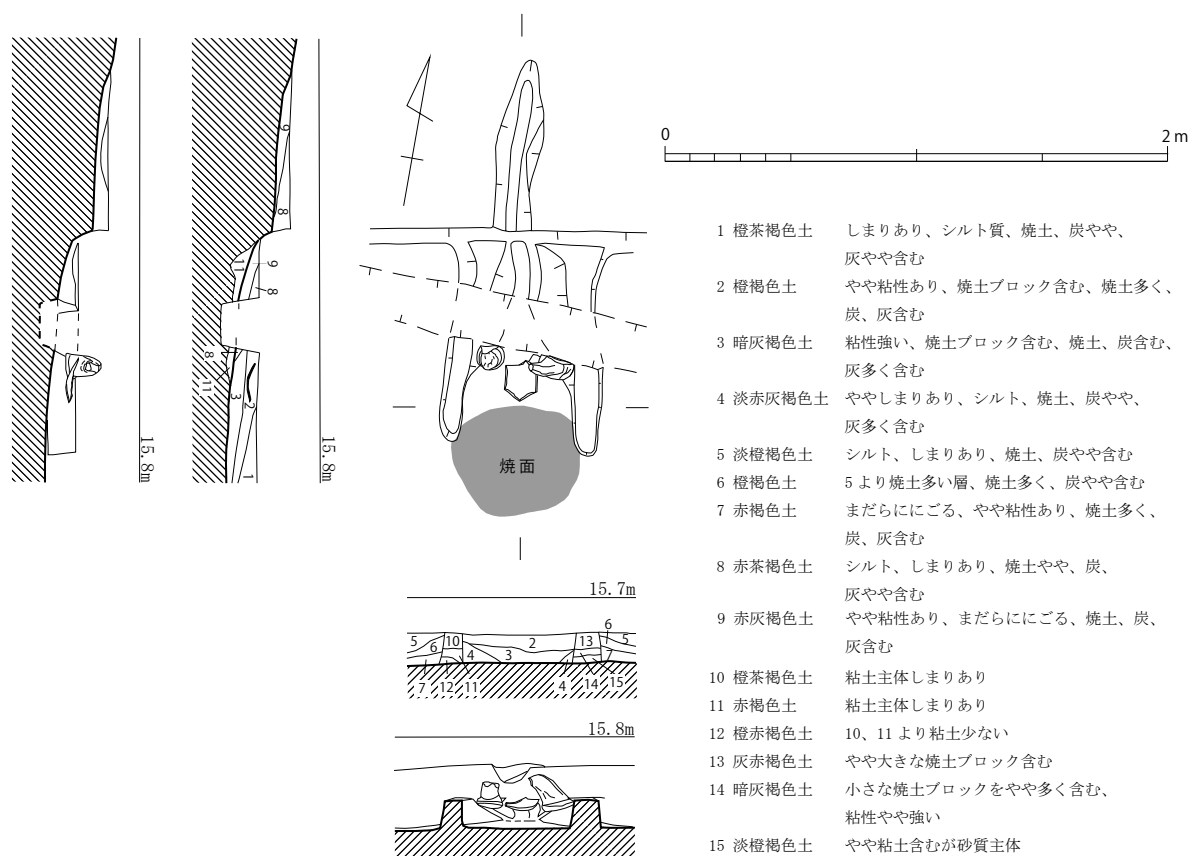


第 21 図 12 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

11 号竪穴住居跡 (図版 10、第 19 図)

第 1 面の調査区の北端付近で確認された。北側の壁に突出型のカマドを附設する。10 号竪穴住居跡の東側に位置し、暗渠排水溝により南北に縦断する攪乱を受けているが、全体に良好に遺存する。主軸は南北方向で 3.5 m 程度、東西方向で 3.5 m 程度を測り、平面形はほぼ正方形である。住居跡の壁は 30cm 程度残っていた。主柱穴は 4 基とも確認できたが、深い南東側もの以外は、10cm 前後と浅い。南壁に沿って周壁溝が確認され、北東側の主柱穴付近で、炭粒が集中する範囲が見られた。南壁の中央付近はやや掘り過ぎたと考えられる。出土遺物の弥生土器は明らかに混入品で、時期を反映する遺物は出土しておらず、他に砥石が出土した。

カマド (図版 10) 住居跡北壁に突出型のカマドが確認された。突出部の掘り込みは最大幅 33cm、奥行 25cm 程度を測り、袖は内向きに 38cm 程度確認され、袖部を合わせた燃焼部の奥行は 63cm 程度である。深さは奥壁に接する部分が 10cm ほどで、先端部に向かって徐々に深くなり、最深部で 20cm 程度となる。両袖の先端部間のやや左寄りに支脚を固定したと考えられる掘り込みピットが確認された。また右袖内部からやや大きな土器片が出土した。燃焼部の埋土は、全体に灰茶褐色系のものが主体で、下層では炭化物や焼土が含まれる。



第 22 図 12 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (第 20 図 17)

17 は弥生土器蓋である。完形で、対向する位置の口縁部近くに二対の小孔がある。小壺と対応する蓋と考えられ、外面は丹塗りであったが全体的に剥落した可能性がある。

12 号竪穴住居跡 (図版 11、第 21 図)

第 1 面の調査区の南西隅で確認された。北側の壁にカマドを附設する。東西に通る暗渠排水溝をはじめ広い範囲で攪乱を受け、壁の遺存する部分が限られ、西側の隅も残っていない。主軸は南北方向で 5.75 m 程度、東西方向で 6.3 m 程度を測り、平面形は東西に長い長方形で、第 1 面の住居跡の中でやや突出して大型である。住居跡の壁は 30cm 程度残っていた。主柱穴は、少なくとも 3 基残るが、全体で 4 基よりも多い可能性がある。カマドの西側に隣接する深さ 10cm 程度のピットは、埋土に多くの焼土粒を含んでいた。なお、南壁の東側で明瞭に床の土色が異なるため掘削したが、不整形で床下掘り込みである可能性がある。また、カマドの右側に隣接して深さ 10cm 程度の床下掘り込みが確認された。土師器・須恵器が出土した。

カマド (図版 11、第 22 図) 住居跡北壁にカマドが確認され、燃焼部は住居跡の壁内部に納まる一方で、煙道部は更に北側へ延びる。東西に通る暗渠排水溝により大きく攪乱を受け、燃焼部から煙道部の接続部が残っていないが、燃焼部の奥から粘土で構築された煙道部が徐々に住居跡の壁側へ高くなり、外ではあまり傾斜せずに延びる。袖は程度住居跡壁から内向きに 85cm 程度確認され、袖間は 45cm という燃焼部である。煙道部は住居壁から外向きに 70cm 程度まで確認された。燃焼

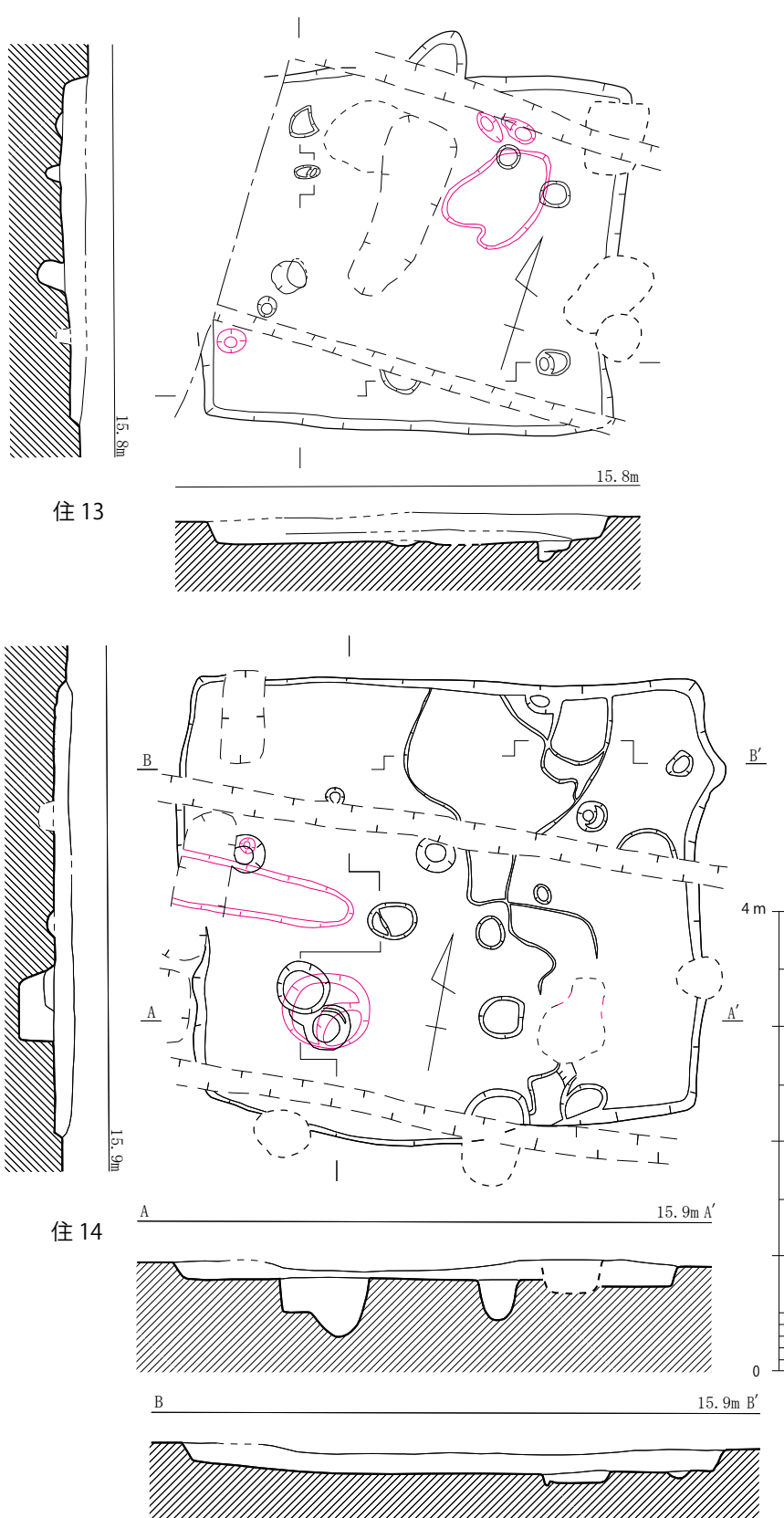
部の埋土は、全体に焼土を含む橙褐色・赤褐色系のものが多い。燃烧部の位置から土師器の胴部片とともに、土製の支脚が2点立った状態で出土したが、床面からは浮いているため、使用時の原位置で残っておらず、廃絶時に関わるものと考えられる。

出土土器

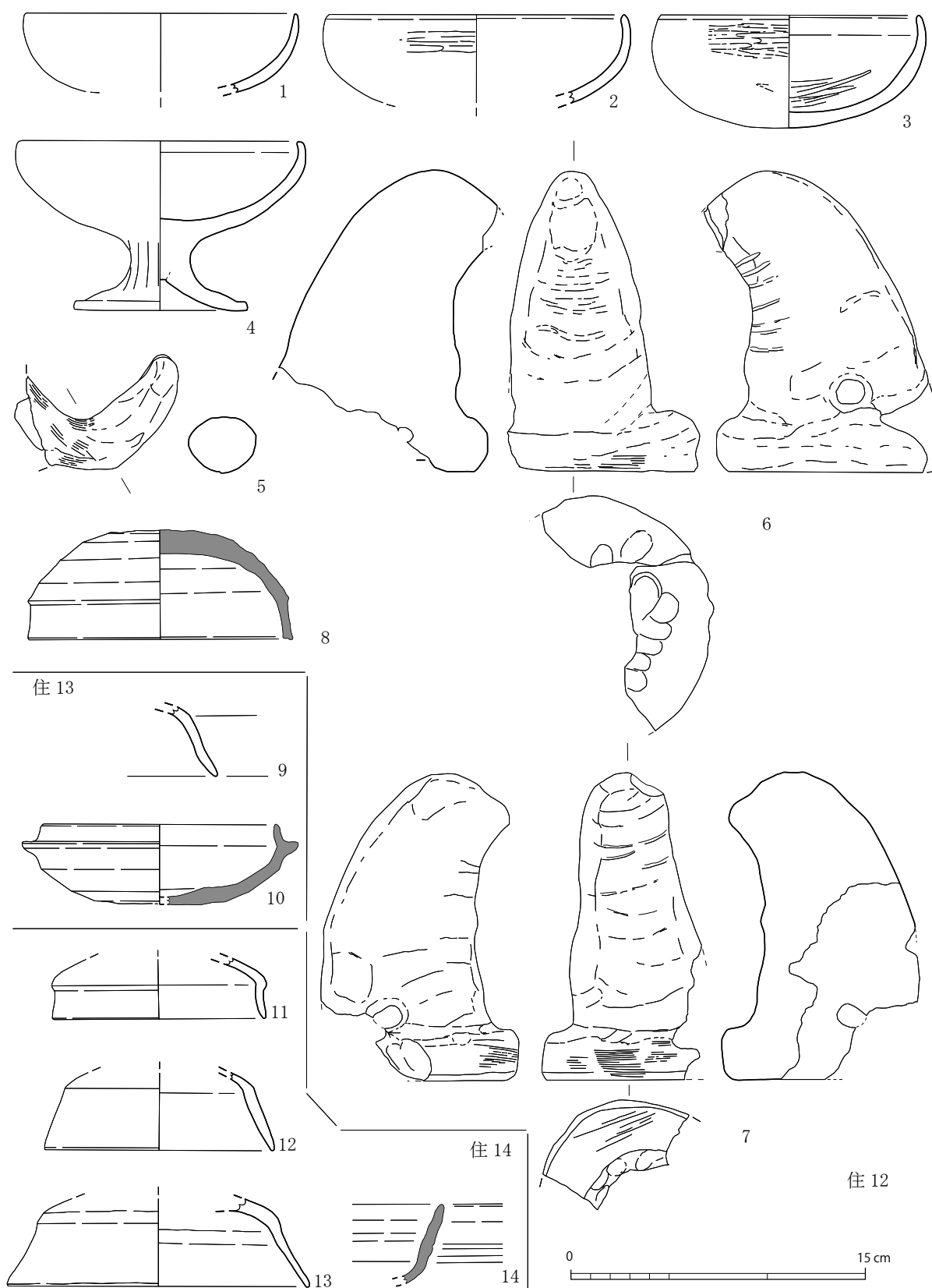
(図版 33・34、第 24 図 1～8)

1～7は土師器で、8は須恵器である。1～3は碗である。1の器表の摩滅は激しいが、2・3の外面の中位にはミガキが施される。2・3はともに口縁端部がわずかに内傾する。1の胎土は淡橙褐色で赤茶褐色の含有物が目立つのに対し、2・3の胎土はやや精良である。4は中実の柱部である脚部が付く鉢である。5は甑の把手部で、胎土はやや精良である。6・7はともに支脚で、上方へ牛角状に傾きながら立ち上がり、つつすぼまる形状である。下端は段を生じてやや大きくなっており、底は遺存部が少ないが、中央部がせり上がるとみられる。下方の段の部分から底の中央部へ孔が通り、この孔は反対側と対になると考えられるが、ともに下端部は欠損が大きく全容ははっきりしない。

8は杯蓋で、天井部の境がやや突出して段を生じ、口唇部は面をなす。



第 23 図 13・14 号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 24 図 12 ～ 14 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

13号竪穴住居跡（図版 11、第 23 図）

第 1 面の調査区西壁沿いの中央よりやや南側で確認され、14 号竪穴住居跡の北側、15 号竪穴住居跡の南側に位置する。主軸は南北方向で 3.1 m 程度、東西方向で 3.5 m 程度を測り、平面形は東西にやや長い長方形である。西側の一部が調査区外へ及ぶとともに、暗渠排水溝によって南北に縦断した攪乱を 2 ヶ所で受ける。この攪乱を受けた北壁付近のピット埋土には焼土が含まれており、カマドの突出部であった可能性がある。住居跡の壁は 20cm 程度残っていた。主柱穴は全体に判然としない。一部に床下掘り込みが確認された。出土した土師器・須恵器はいずれも上層埋土からのものである。土師器・須恵器が出土した。

出土土器（第 24 図 9・10）

9 は土師器杯蓋の小片で、口縁部はやや外側に開く。10 は須恵器杯身である。外底部に回転ケズリが施される。

14号竪穴住居跡（図版 12、第 23 図）

第 1 面の調査区西壁沿いの中央よりやや南側で確認され、13 号竪穴住居跡の南側に位置する。暗渠排水溝によって東西に横断した攪乱を 2 ヶ所で受ける。主軸は南北方向で 4.1 m 程度、東西方向で 4.5 m 程度を測り、平面形は東西にわずかに長い長方形で、やや大型であるものの竪穴住居跡とした。ただ、東側の床面が一樣ではなく、不整に変化があるとともに、カマドの痕跡を確認できず、他の竪穴住居跡とは異なる様相である。また、主柱穴についても、南側では深いものが検出されているが、北側では判然としない。住居跡の壁は 20cm 程度残っている。土師器・須恵器、鉄製刀子が出土した。

出土土器（第 24 図 11～14）

11～13 は土師器杯蓋で、14 は須恵器無蓋高杯である。11～13 はいずれも一部のみ破片で器表の摩滅が著しく、胎土は橙褐色を呈す。11 は天井部の境が突出して明瞭である。杯身の可能性もあるが、口縁部が内にはほとんど傾かない点から蓋とする。12 は天井部の境に明瞭な稜がある。13 の天井部は厚く境に段が生じ、口縁部は急に薄くなり、やや大きく開く。

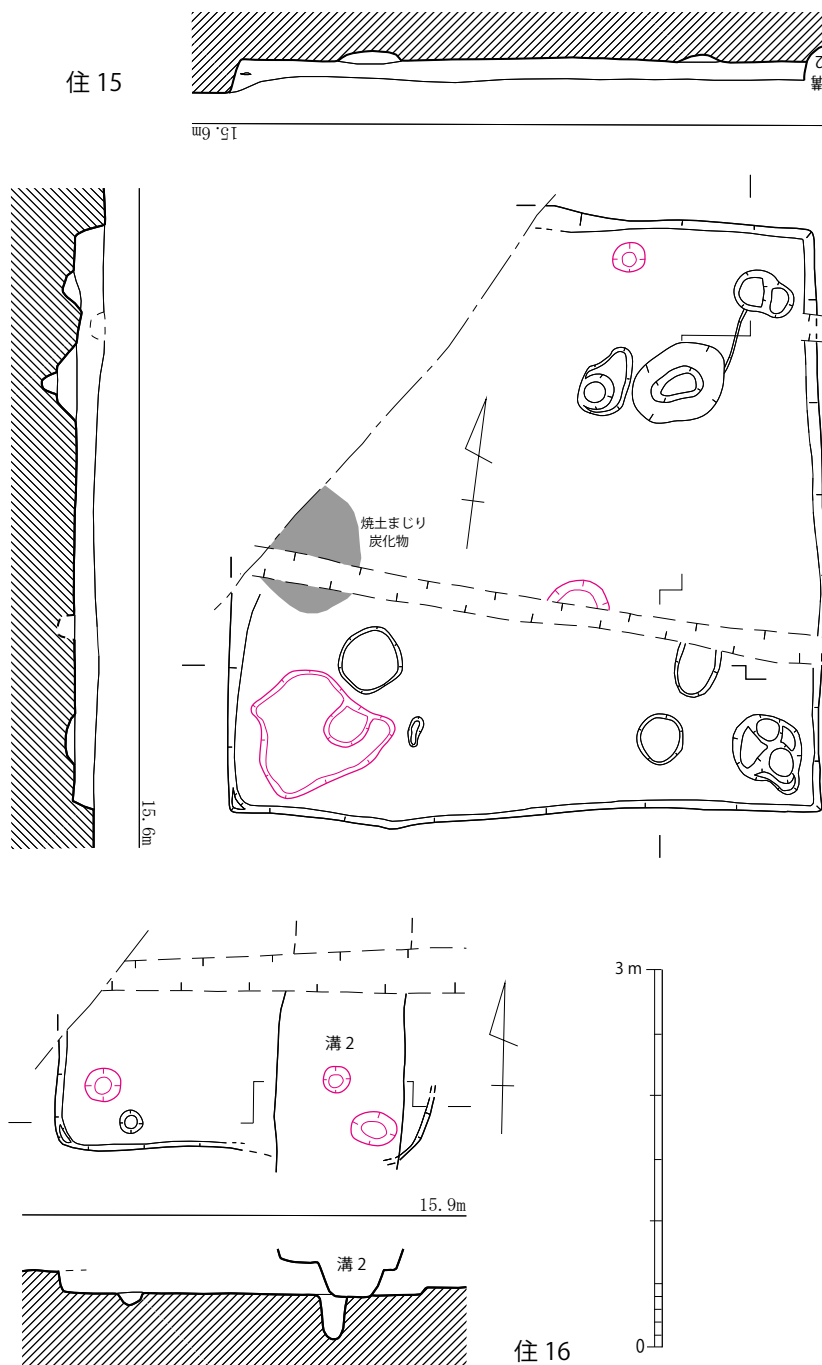
14 は杯部口縁の小片で外面に 2 条の沈線が廻る。

15号竪穴住居跡（図版 12、第 25 図）

一旦第 1 面の調査を終了した後に、バックホーによる第 2 面までの掘り下げ中に、西壁沿いの中央付近で確認した。西側の一部が調査区外へ及び、13 号竪穴住居跡の北側、16 号竪穴住居跡の南側に位置する。暗渠排水溝によって東西に横断した攪乱を受ける。やや大型で、主軸は南北・東西方向ともに 4.7 m 程度を測り、平面形はほぼ正方形である。検出した範囲でカマドの明瞭な痕跡は確認できなかったが、住居跡の西壁が調査区外へ及ぶ際で、焼土混じりの炭化物が広がる範囲があるため、調査区外の西壁中央部にカマドが所在する可能性がある。20cm 程度残っており、主柱穴と思われるピットは、ほとんど 10cm 程度の深さで判然としない。土師器が出土した。

出土土器（図版 34、第 26 図 1～10）

出土土器は全て土師器である。1・2 は杯蓋である。1 は天井部の境が明瞭ではなく、口縁部はやや外反気味に開く。2 は天井部の境が明瞭ではなく、やや短い口縁部が直線的に開く。天井内面に



第25図 15・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る第2面までの掘り下げ中に、西壁沿いの中央付近で確認した。西側の一部が調査区外へ及び、15号竪穴住居跡の北側に位置する。暗渠排水溝によって東西に横断した攪乱を受ける。バックホーで掘り下げながらの検出のため、遺存状態は良好ではなく、南側の限られた範囲でしか把握することができず、壁も15cm程度しか残っていない。主軸は東西方向で2.8m程度を測る。検出した範囲でカマドの痕跡は確認できなかった。図示できる遺物は出土していない。

17号竪穴住居跡 (図版13、第27図)

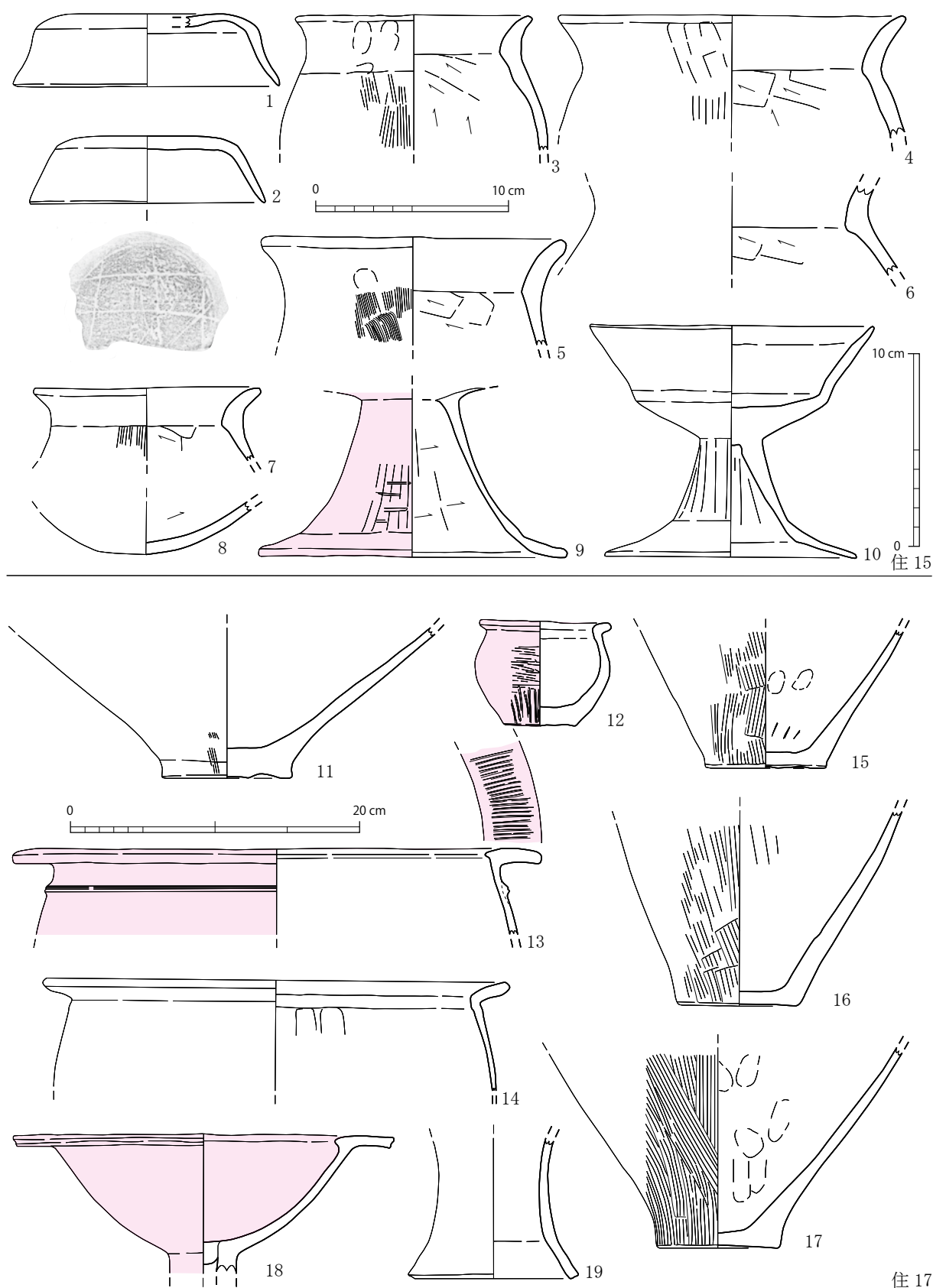
第2面で唯一検出した竪穴住居跡で、調査区中央部よりやや東側で確認され、17号土坑に切られ、10・11・16号土坑の東側、23号土坑の南側、5号溝の北側に位置する。西側の一定範囲の床面が、

細い沈線による格子状のヘラ記号が残る。3～8はいずれも甕である。胴部の内面には全てケズリが残り、底部のみが残存する8以外は頸部にケズリの有無の境が明瞭な稜となって残る。4の口縁部内面の端部よりやや内側に帯状に炭化物が付着しており、使用の痕跡の可能性がある。9・10は高杯である。9はほぼ脚部のみが残存し、外面に丹塗りが残る。柱部の外面には調整により縦に細長い面が生じており、横位のミガキも残り、内面には横位のケズリが残る。10は完形に復元される。杯では明瞭な稜のある屈曲部から、口縁部がわずかに外反気味に伸びる。脚部では柱部の外面には調整により縦に細長い面が生じる。胎土は非常に精良である。

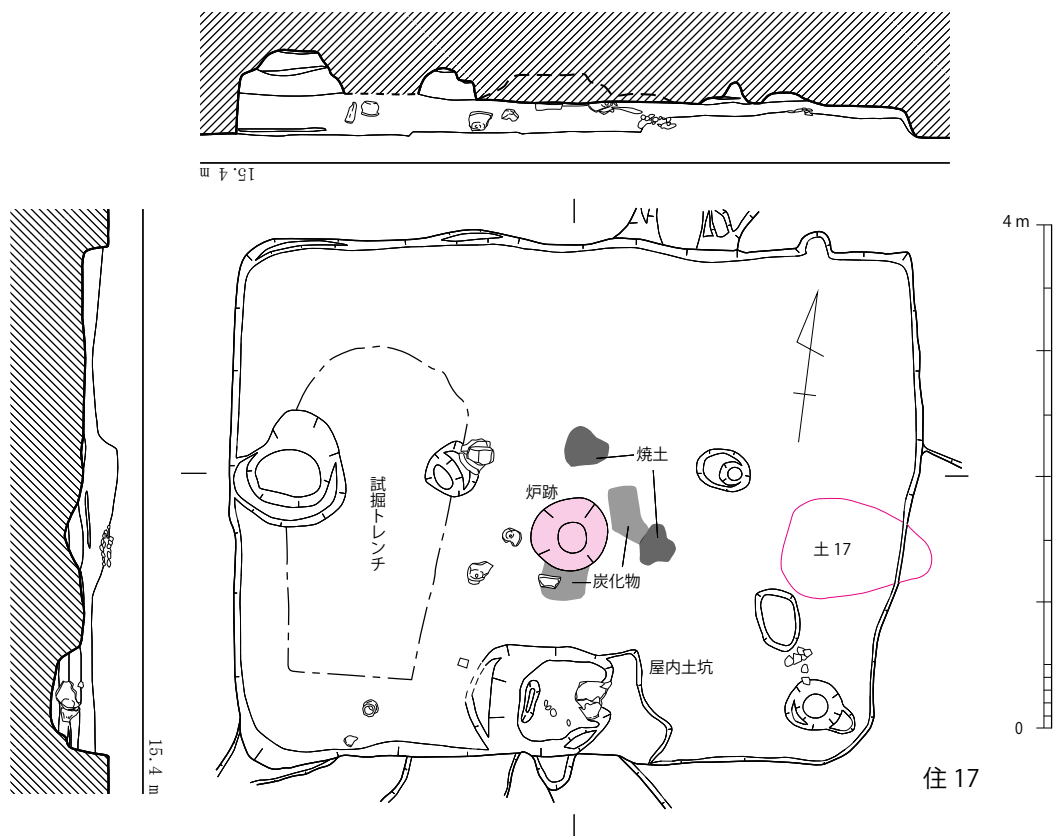
16号竪穴住居跡

(図版12、第25図)

一旦第1面の調査を終了した後に、バックホーによ



第 26 図 15・17 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1～10 は 1/3、他は 1/4)



第 27 図 17 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

試掘トレンチにより攪乱を受け、東側では堆積する包含層と住居跡埋土の峻別が容易にできずに掘り下げているため、壁があまり遺存していないが、西側では壁は 30cm 程度残る。主軸は南北方向で 4.1 m 程度、東西方向で 5.5 m 程度を測り、平面形は東西に長い長方形である。主柱穴は、中央よりわずかに北寄りの長軸に沿って 2 基確認された。検出面から床面から 5 cm 程度上までの上層埋土は、暗茶褐色粘質土で、以下の下層埋土は上層よりやや明るく、焼土・炭・灰を含むようになる。また、床面の中央付近のピットの埋土は焼土を含むとともに、周囲に焼土や炭化物が集中する範囲があり、炉跡と考えられる。南壁及び東壁の中央付近の直下に屋内土坑が設けられる。南側のものは床面から 25cm 程度の深さで、内部から甕や投弾が出土し、東側のものは床面から 40cm 程度の深さである。弥生土器、石包丁、打製石斧、砥石、投弾、打製石斧、石包丁破片等の多様な遺物が出土した。

出土土器 (図版 34、第 26 図 11 ~ 19)

出土土器は全て弥生土器である。11 は大型の壺の底部付近である。外底部の外端よりやや内側が窪み、中央部が突出する。体部は大きく開きながら立ち上がる。12 は小型の短頸壺で、ほぼ完形で外面丹塗りである。外面の下位で縦位、中位で横位の非常に細かなミガキが施される。13 ~ 17 は甕である。13 は口縁部付近で外面丹塗りである。外面の口縁直下に M 字状突帯が廻る。逆 L 字形口縁の内側への突出はわずかで、上面には細い暗文が密に残る。14 は跳上口縁で口縁の屈曲部の内面には明瞭な稜が廻る。15 ~ 17 はいずれも底部付近のみの部分で、外面にハケ目が残る、内面はナデで仕上げられる。18 は高杯の杯部で、逆 L 字形の口縁である。内外面ともに丹塗りであるが、器表の摩滅が著しく、ほとんど残存していない。19 は器台で中位がくびれる。

b. 土坑

1号土坑（図版14、第28図）

第1面の調査区東壁沿いの中央よりやや北側で確認され、1号竪穴住居跡を切る。主軸は南北方向で1.7m、東西方向で0.7mを測る細長い平面形である。床面まで10cm程度の深さで、一部が更に10cm程度深くなる。図示できる出土遺物はない。

2号土坑（図版14、第30図）

第1面の調査区西壁沿いの北側で確認され、10号竪穴住居跡を切る。西側が調査区外へ及び、別遺構に切られるとともに、東西方向の暗渠排水溝に攪乱を受ける。その範囲は、一定程度の割合を占めるとみられ、全容は不明である。最深部は60cm程度の深さで、北側では深さ40cm程度の深さでやや広いテラス状の底である。土師器・須恵器が出土した。

出土土器（図版35、第29図1～8）

1～4は土師器、5～8は須恵器である。1・2は碗で、ともにやや口径が小さい器形で口縁は上方へ伸びて、端部はわずかに外に開く。胎土はやや精良で、淡橙褐色を呈し、赤茶褐色の含有物が見られる。3は高杯の杯部で、口縁部は屈曲部から外反して開きながら立ち上がる。4は高杯の脚部で柱部の外面は複数の縦長の面をなす調整痕があり、内面は横位のケズリが残る。3・4はともに精良な胎土であるが、色調の相違から同一個体ではないと考えられる。

5は杯蓋で、外天井には回転ケズリが残り、口縁部との境が明瞭でない器形である。6・7はともに杯身で、かえり・受部が残る小片である。8は甕の口頸部で、頸部は強く締め、口縁部は大きく開く。口縁端部は欠失する。2状の沈線と、板状工具の端部を連続押圧した文様帯が廻る。

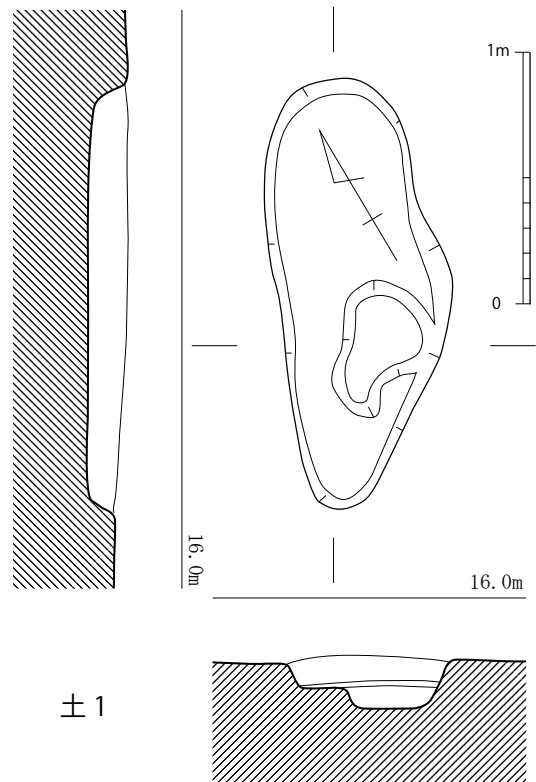
3号土坑（図版14、第30図）

第1面の調査区北側中央付近で確認され、4号土坑に切られ、南端部をわずかに1号溝にも切られる。検出段階で4号土坑との区分ができず、全体的に30cm程度掘り下げた段階で、4号土坑を別遺構として確認することができ、それ以降で分けて掘削した。不整な平面形で、南北方向で2.0m程度、東西方向で3.8m以上の規模となる。内部には多数のテラス状の部分があり、段階的に深くなり、65cm程度の深さで東西1.2m程度、南北幅20cm程度の狭く細長い底部となり、一部でピット状に更に15cm程度深くなる。

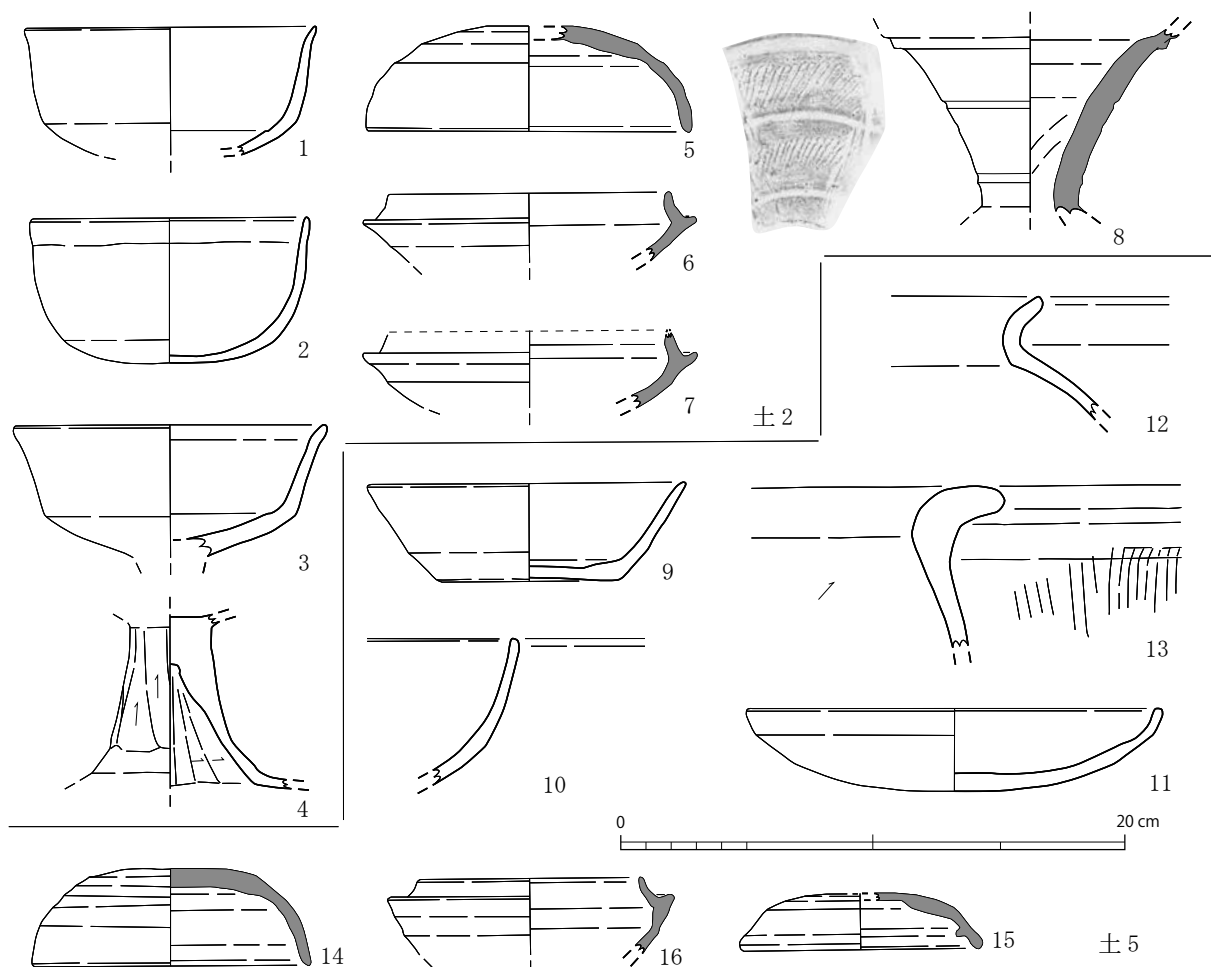
4号土坑を区分して掘削する前に出土した土器を「3・4号土坑出土土器」（第31図6～16）として示しており、区分して掘削して以降に出土したのは土師器のみである。

出土土器（第30図1～5）

出土土器は全て土師器である。1は杯蓋の小片で、天井部の境は明瞭ではない。橙褐色の胎土に



第28図 1号土坑実測図（1/30）



第 29 図 2・5 号土坑出土土器実測図 (1/3)

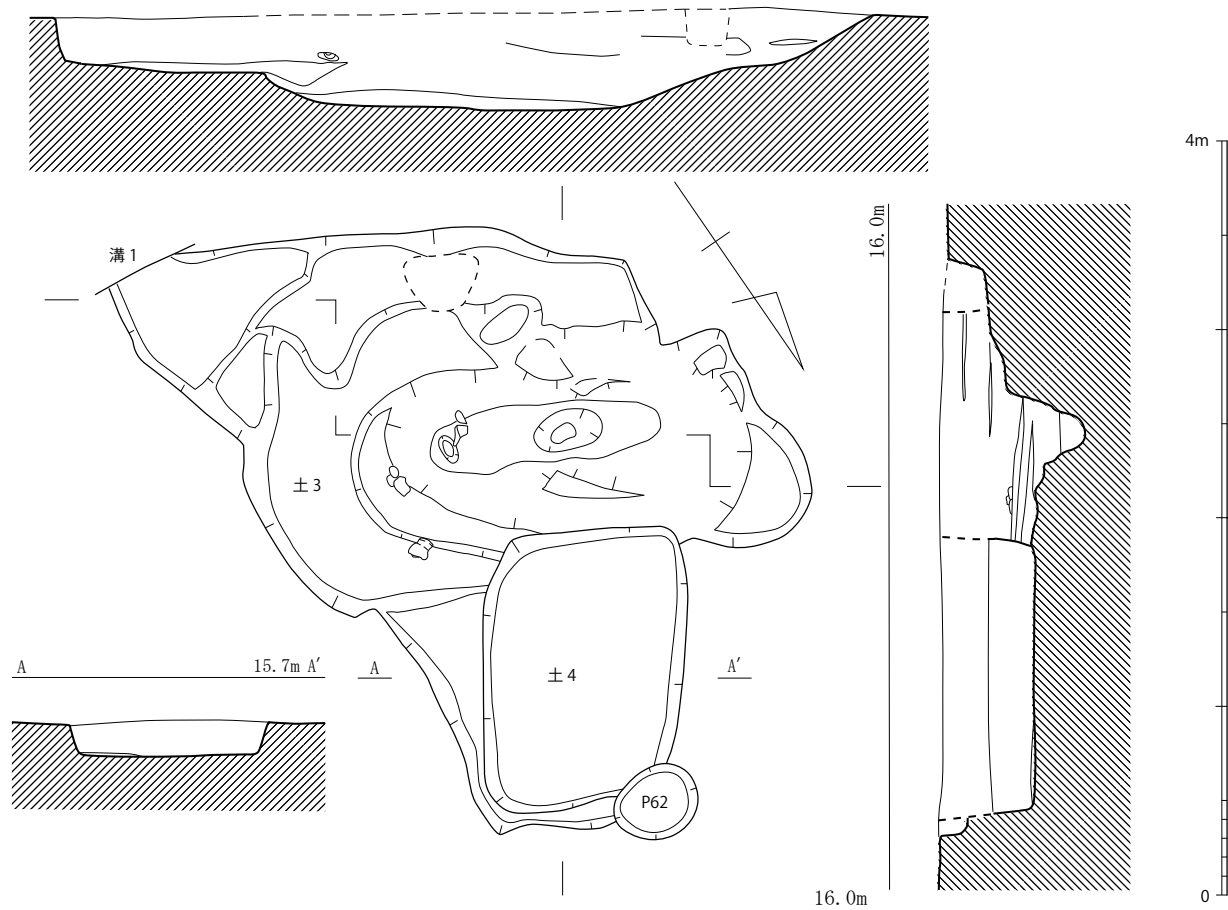
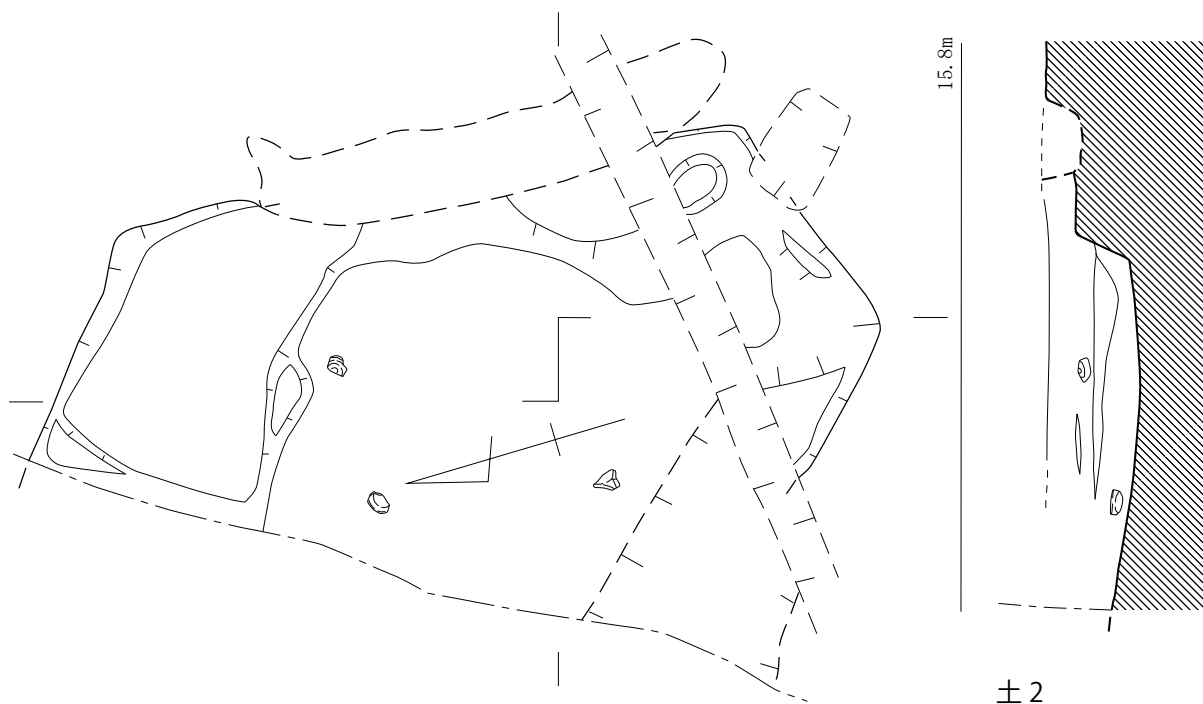
は赤茶褐色の含有物が含まれる。2は壺で、口縁部がわずかに開きながら直線的に上方へ伸び、器壁は全体に厚い。口唇部はわずかに波状となっており、焼成後に打ち欠かれた可能性もある。内面の頸部の締まる部分よりある程度下位でケズリが残る。3・4はともに甕で胴部内面に明瞭にケズリが残る。5は鉢で、体部上方でわずかに締まって、口縁部が開きながら伸びる。

3・4号土坑出土土器

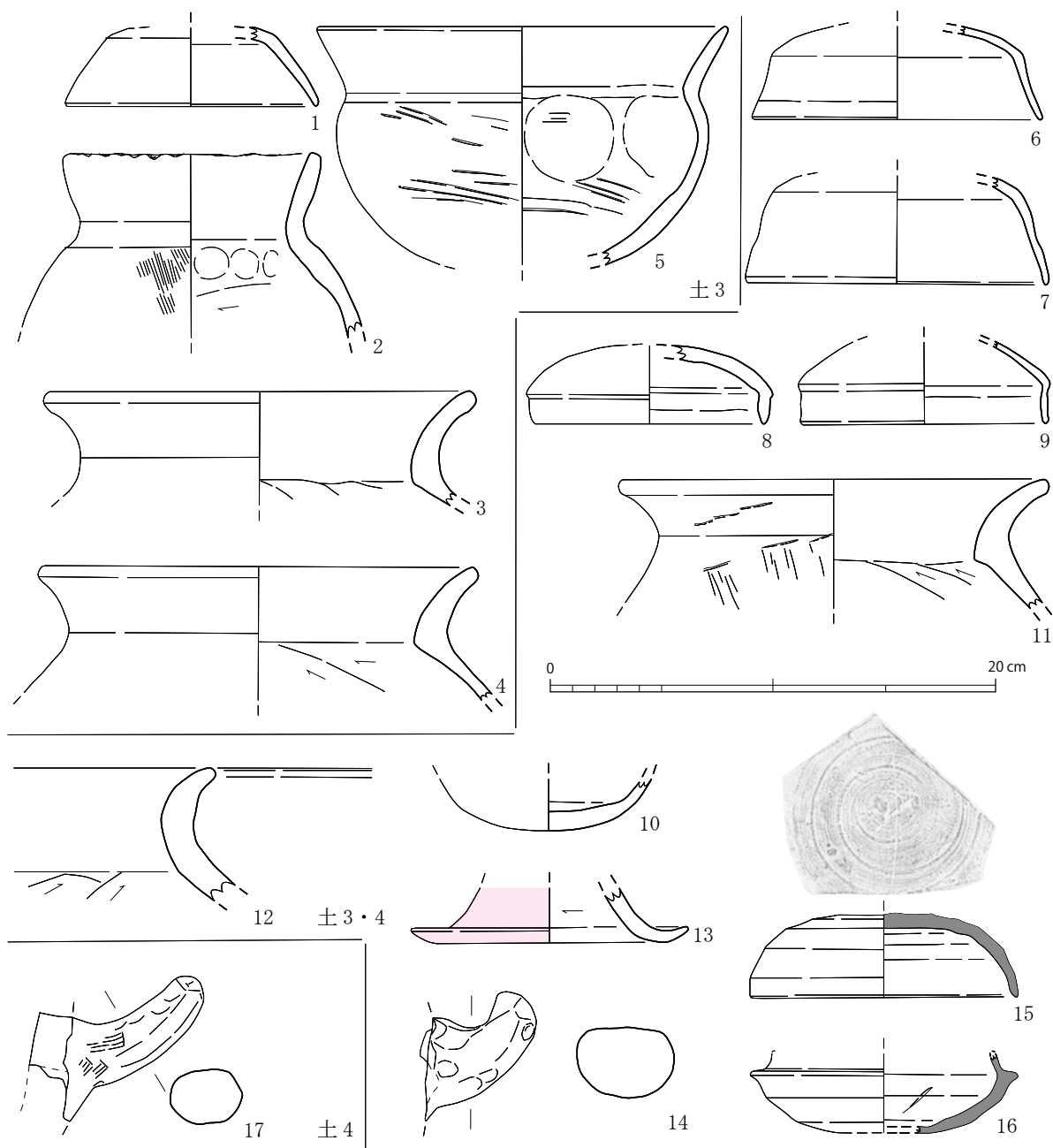
出土土器 (図版 35、第 30 図 6～16)

6～14は土師器、15・16は須恵器で、これらとともに石製紡錘車出土した。6～9は杯蓋である。6・7は天井部の境に突出はなく、6ではその部分の稜がある程度明瞭なのに対し、7では不明瞭で、6では口縁端部の開きがやや大きい。8・9は天井部の境にわずかな突出がある。8では器壁が非常に薄く、精緻なつくりであるのに対し、9では器壁が非常に厚く、粗雑なつくりである。10は椀の底部である。11・12は甕で、胴部内面にケズリが残る。ともに器表は摩滅が激しい。13は高杯脚部で、裾端部がわずかに上方へ跳ね上がる。わずかに残る柱部の内面にはケズリが残る。剥落が著しいが、外面丹塗りとみられる。14は甕の把手で、やや短い形状である。体部との接合部で剥落している。

15は杯蓋で、回転ケズリの残る外天井は、中央付近で平坦であり、1条の細い沈線のヘラ記号がある。16は杯身で、底部から体部の広い範囲で回転ケズリが残り、かえり・受部が残る。内面に短い沈線があるが、ヘラ記号として付されたものかは判然としない。



第30図 2～4号土坑実測図 (1/40)



第31図 3・4号土坑出土土器実測図 (1/3)

4号土坑 (図版14、第30図)

第1面の調査区北側中央付近で確認され、3号土坑を切る。検出段階で3号土坑との区別ができず、全体的に30cm程度掘り下げた段階で、4号土坑を別遺構として確認することができ、それ以降で分けて掘削した。主軸は南北方向で1.55m程度、東西方向で1.1m程度の規模で、平面形は隅丸長方形である。3号土坑と区分して掘削した面からの深さは20cm程度であるが、調査区検出面からの深さは50cm程度である。4号土坑を区分して掘削する前に出土した土器を「3・4号土坑出土土器」(第30図6～16)として示しており、区分して掘削して以降にこの土坑に伴うものとして出土したのは、土師器1点のみである。

出土土器 (第30図17)

17は土師器甕の把手で、やや細長く体部との接合部で剥落している。

5号土坑（図版 15、第 32 図）

第 1 面の調査区南端近くの中央付近で確認された。北端は流路跡に切られて途切れるが、北端の最大幅で 2.9 m、残存部で全長 7.4 m と非常に長大な遺構ではあるが、溝とは異なり平面形が不整かつ場所によって幅の差が大きく、底面は起伏が多い。深さは 25cm 程度の部分が多いが、更に深くなる部分もある。埋土はシルト質の淡茶褐色のものが主体である。南北方向及び東西方向に通る暗渠排水溝により複数箇所で攪乱を受ける。土師器・須恵器、鉄鏃が出土した。

出土土器（図版 35、第 29 図 9～16）

9～13 は土師器、14～16 は須恵器である。9 は杯身で、外底部と体部下端は、回転ケズリ後にナデで仕上げられる。復元口径 12.8cm、底径 7.0cm、器高 3.9cm である。10 は碗の小片である。11 は碗で、口縁が大きく開き、端部付近で上方へ曲がる器形である。橙褐色の胎土には赤茶褐色の含有物が含まれる。12 は壺と考えられ、短頸で口縁が外反して開く。13 は甕で、胴部の外面にハケ目、内面にケズリが残る。

14 は杯蓋で、外天井には回転ケズリが残り、口縁部との境が明瞭でない形状である。外面のみ非常に摩滅が激しい。15 は杯蓋で、口径が小さく突出のわずかなかえりを伴う。16 は杯身で、かえり・受部が残る小片である。

6号土坑（図版 15、第 32 図）

第 1 面の調査区北東端付近で確認された。径 1.2～1.3 m 程度の円形の平面形で、深さは 45cm 程度である。底面は氾濫原とみられる礫層に達する。図示できる遺物は出土していない。

7号土坑（図版 16、第 33 図）

第 2 面の調査区北東端付近で確認され、8号土坑の東側、23号土坑の北側に位置する。主軸は南北方向で 1.85 m 程度、東西方向で 2.15 m 程度を測り、不整な隅丸方形に近い平面形である。壁は 40cm 程度残り、南西隅では更に底から 15cm 程度ピット状に深くなる。埋土はシルト暗茶褐色土が主体で、弥生土器が出土した。

出土土器（図版 35、第 34 図 1）

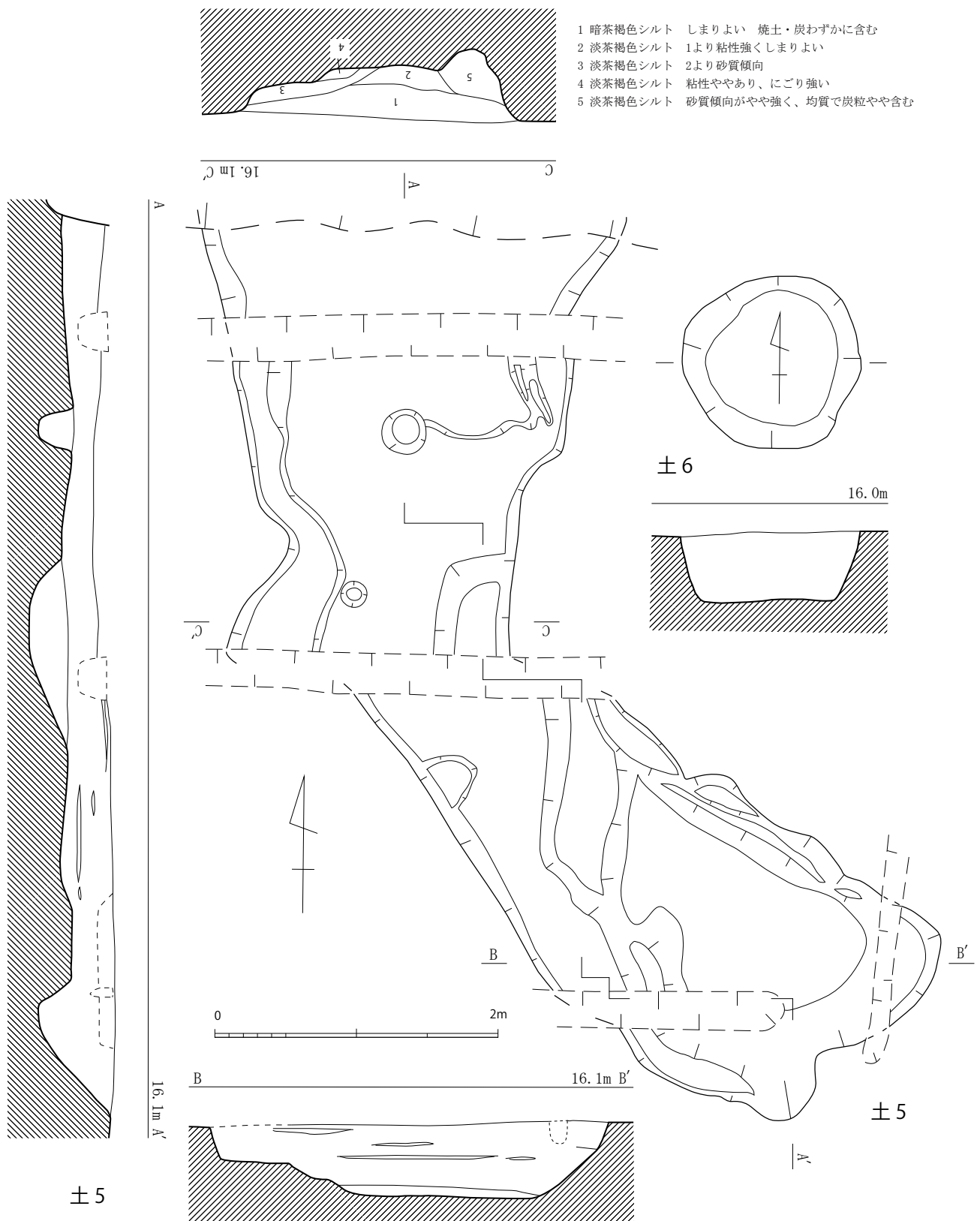
1 は中位がすばまる弥生土器器台で、外面にハケ目が残る。

8号土坑（図版 16、第 33 図）

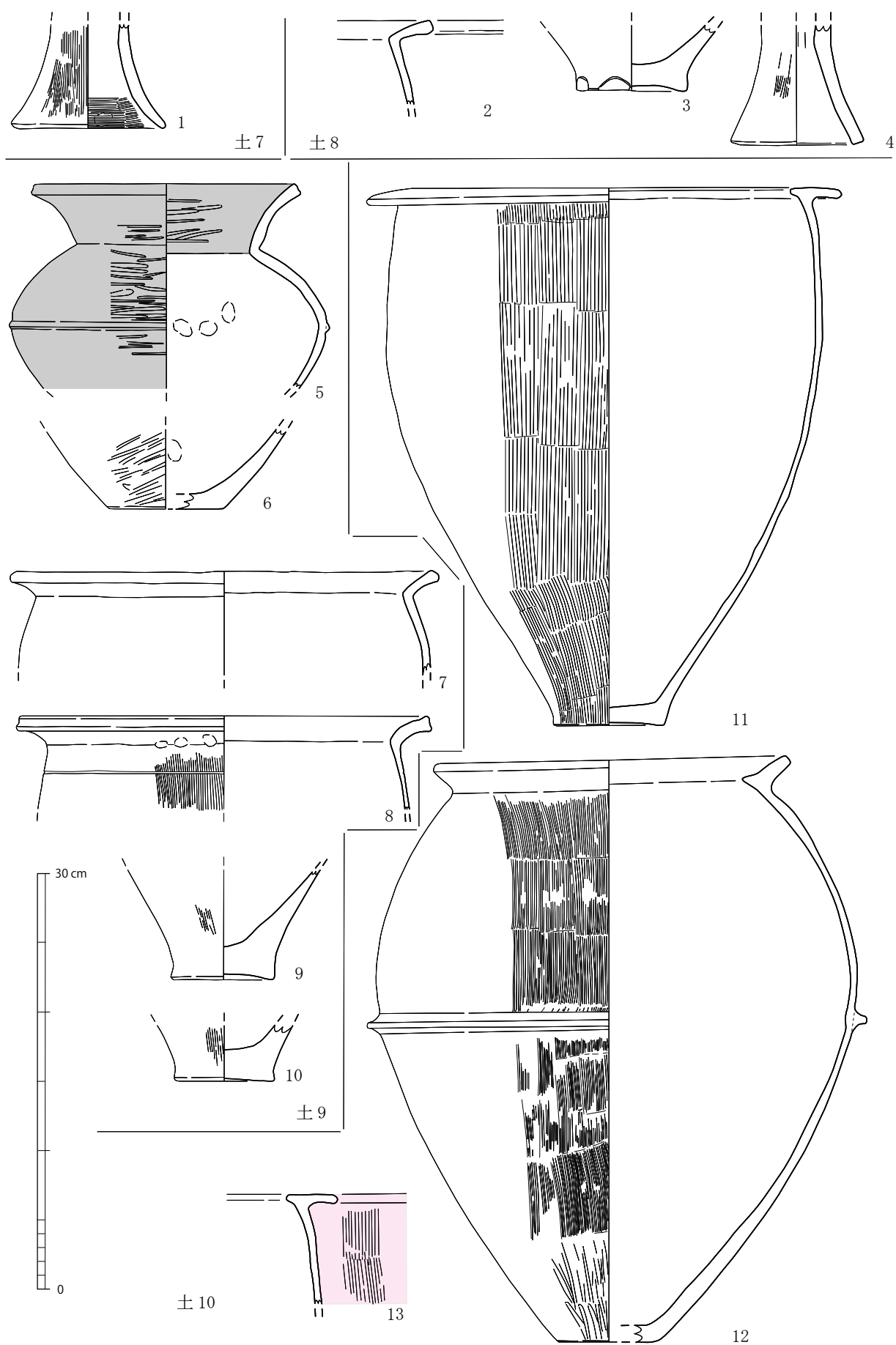
第 2 面の調査区中央部の北側、9号土坑の北側に位置する。主軸は南北方向で 1.15 m 程度、東西方向で 0.8 m 程度を測り、南北にやや長い不整な楕円形に近い平面形である。深さ 10cm 程度でテラス状の範囲があり、西側の底面が深さ 40cm 程度、東側の底面は更に深くなって深さ 50cm 程度で狭い。灰褐色の粘質土が主に西側厚く堆積し、東側の低い部分に更に暗褐色・茶褐色系の堆積土で埋没している。半裁の際に先に掘削した北半側では、壁を掘り過ぎていた。弥生土器が出土した。

出土土器（図版 35、第 34 図 2～4）

出土土器は全て弥生土器である。2 は跳上口縁の甕で、口縁端部は狭い面をなす。3 は甕の底部で、外底部は被熱により橙褐色を呈す。外端部が複数箇所で剥落するのは被熱によるものか、人為的に欠いた可能性もある。4 は中位がすばむ器台である。



第 32 図 5・6号土坑実測図 (1/40)



第 34 図 7～10 号土坑出土土器実測図 (1/4)

9号土坑（図版 16、第 33 図）

第 2 面の調査区中央部の北側で確認され、8 号土坑の南側に位置する。主軸は南北方向で 1.1 m 程度、東西方向で 2.0 m 程度を測り、東西に長い楕円形に近い平面形である。深さ 10cm 程度で南から東にかけてテラス状の範囲があり、出土遺物は主にその深さからまとまって出土した。底面まで壁は 40cm 程度残る。埋土はテラス部分の深さまで茶褐色系の埋土が堆積し、それ以下の埋土は暗灰褐色となる。弥生土器が出土した。

出土土器（図版 35、第 34 図 5～10）

出土土器は全て弥生土器である。5～7 は壺である。5 は頸部で強く締まり、口縁部が大きく開く広口壺で、口縁部内外面と体部外面には黒塗りされるとともに、横位のミガキが残る。胴部の最も張り出す位置に 1 条の断面三角形の低い突帯が廻る。6 は底部で、外面にミガキが残る。7 は短頸壺で内外面ともに目立った調整が残らず、ナデにより仕上げとみられる。口縁端部は丸みがある。8～10 は甕である。8 は跳上口縁で、やや厚くなる端部に太い沈線状の窪みが廻る。口縁部外面には指頭圧痕が並び、胴部外面には縦位のハケ目が密に廻るとともに、屈曲部よりやや下位で 1 条の沈線が廻る。外面には煤が付着する。9・10 は底部で、調整はともに外面にかすかにハケ目が残るのみである。

10号土坑（図版 17、第 33 図）

第 2 面の調査区中央部付近で確認され、11 号土坑の北側、12 号土坑の東側、17 号竪穴住居跡の西側に位置する。主軸は南北方向で 1.6 m 程度、東西方向で 1.9 m 程度を測り、不整な張り出し部分があるものの、隅丸方形に近い平面形である。半裁時に北側を掘り過ぎて深さ 60cm 程度まで掘削しているが、実際の深さは 50cm 程度である。主な埋土は、上層から暗茶褐色、暗褐色、暗灰褐色のそれぞれ粘質土が堆積する。中位の深さから礫や弥生土器が出土し、特に甕が投げ込まれて破碎したような状態であった。他に投弾が出土した。

出土土器（第 34 図 11～13）

出土土器は全て弥生土器甕である。11 は完形に復元され、逆 L 字形の口縁である。外面には密に縦位のハケ目が残る。12 はほぼ完形に復元され、短い口縁部がやや立ち上がり、内側にわずかに突出するとともに、胴部の張る器形である。胴部の最大径に当たる位置に断面三角形の突帯が廻り、体部外面には細かなハケ目が残るとともに、底部付近ではある程度粘土の乾燥した状態で板状工具により調整したとみられる擦痕が残る。13 は逆 L 字形の口縁で、胴部外面には密にハケ目残り、丹塗りされる。

11号土坑（図版 17、第 33 図）

第 2 面の調査区中央部付近で確認され、10 号土坑の南側、16 号土坑の北側、17 号竪穴住居跡の西側に位置する。各辺 1.5 m 程度の不整な隅丸方形に突出部が付帯したような平面形である。壁は 10cm 程度残って一旦底面となるが、東側では更に深くなる範囲があり、西側には浅い位置でテラス状の狭い部分がある。埋土は上層で淡茶褐色土、下層で淡黄茶褐色土が広がり、更に深い部分ではグライ化して青灰色となる。図示できる出土遺物はない。

12号土坑（図版 17、第 33 図）

第 2 面の調査区中央部付近で確認され、10 号土坑の西側、19 号土坑の東側に位置する。主軸は南北方向で 1.55 m 程度、東西方向で 1.1 m 程度を測り、南北に長い不整な隅丸方形に近い平面形である。壁は 20cm 程度の高さで残る。埋土は上層の暗褐色土、下層の暗茶褐色土からなる。図示できる出土遺物はない。

13号土坑（図版 18、第 35 図）

第 2 面の調査区北西側で確認され、北側の 14 号土坑を切り、15 号土坑の東側、19・20 号土坑の北側に位置する。主軸は南北方向で 1.1 m 程度、東西方向で 1.55 m 程度を測り、東西に長い不整な隅丸方形のような平面形である。深さ 45cm 程度の壁が残り、西側では浅いテラス状の範囲とそこから緩やかな傾斜で落ちる壁がある。このテラス部と底面の北半側は、半裁時に掘り過ぎている。そのため、特に西側のテラス部分の北半は本来の形状から大きく変容しており、半裁のラインから段を生じて下がっている。埋土は、上層から暗茶褐色、黄茶褐色、暗茶褐色の粘質土の層がそれぞれ一定の厚みをもって堆積し、最下層では炭化物を多量に含む黒灰褐色の薄い層がある。出土した弥生土器の中で、北側の壁際から高杯が出土した。

出土土器（図版 36、第 36 図 1～3）

出土土器は全て弥生土器甕である。1・2 は甕で、1 は逆 L 字形口縁、2 は跳上口縁とともに外面に縦位のハケ目が残る。3 は丹塗りの高杯である。器表の摩滅が著しいが、一部の外面にミガキが残る。脚部の柱部内面にはシボリの痕跡がある。

14号土坑（図版 18、第 35 図）

第 2 面の調査区北西側で確認され、15 号土坑の東側に位置する。主軸は東西方向で 1.6 m 程度を測り、南側の 13 号土坑に切られるため、南北方向では 90cm 程度遺存するものの、全体の大きさは不明であるが、隅丸方形に近い平面形とみられる。深さ 10cm 程度で底面となり、中央部に更に 10cm 程度の深さのピットがある。

出土土器（第 36 図 4）

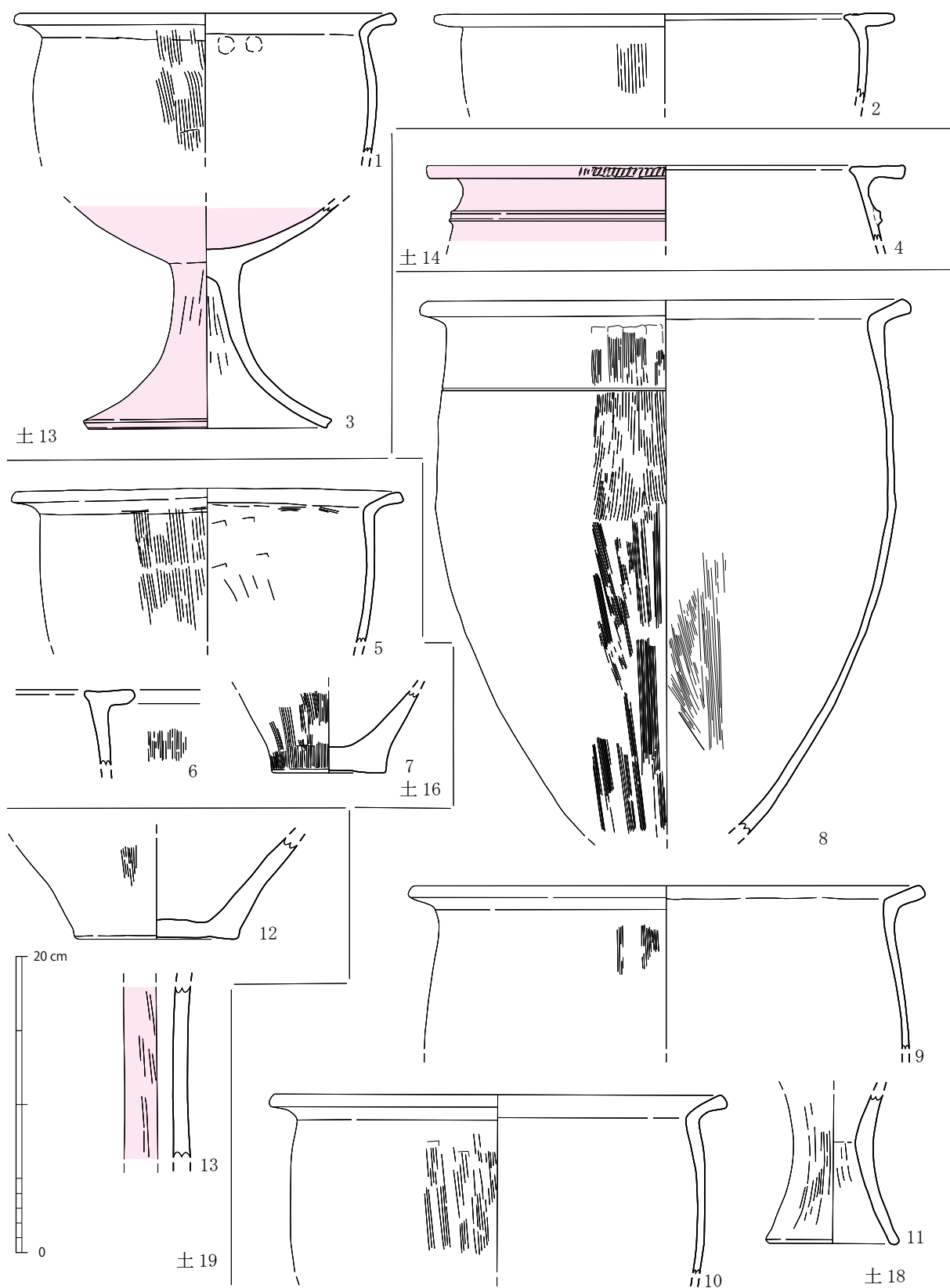
4 は丹塗りの弥生土器甕である。口縁部は逆 L 字形で、面をなす端部には密な刻みが廻る。外面の口縁下には M 字状の突帯が廻る。

15号土坑（図版 18、第 35 図）

第 2 面の北西側の調査区壁付近で確認され、13・14 号土坑の西側に位置する。主軸は長軸で 3.5 m 程度、短軸で 2.1 m 程度を測り、不整な隅丸方形に近い部分の南西部から、不整な張り出し部が付帯して 1.6 m 程度延びる平面形である。東西両側にテラス状の範囲があり、底面まで最大で 30cm 程度の深さである。埋土は、上層で暗茶褐色粘質土で、下層では灰茶褐色粘質土である。図示できる出土遺物はない。

16号土坑（図版 19、第 35 図）

第 2 面の調査区中央部付近で確認され、11 号土坑の南側、17 号竪穴住居跡の西側に位置する。



第 36 图 13 · 14 · 16 · 18 · 19 号土坑出土土器实测图 (1/4)

主軸は南北方向で 2.0 m 程度、東西方向で 1.6 m 程度を測り、不整円形に近い平面形である。深さは 85cm 程度あり、壁は急な傾斜となる部分が多いが、南側はやや緩やかで、この部分は半裁した際に西側を掘り過ぎている。埋土は、上層から暗茶褐色シルト、青茶～黄茶褐色シルト、暗青茶褐色粘質土と主体となる層の大きな単位がある。弥生土器が出土した。

出土土器（第 36 図 5～7）

出土土器は全て弥生土器甕である。5・6 は甕の口縁部である。5 は跳上口縁で、端部は丸みをもって仕上げられる。器表の遺存状態が良好で、外面には縦位のハケ目が明瞭かつ密に残る。6 は逆 L 字形の口縁で、外方への伸びも内方への突出も短い。外面には細かいハケ目が残る。7 は底部のみが残り、外面にハケ目が残る。

17 号土坑（図版 19、第 35 図）

第 2 面の調査区中央部より東側付近で確認され、17 号竪穴住居跡に切られる形で、ほとんどの範囲が住居跡の下層で検出され、東端のみが住居跡と同じ検出面で確認できた。住居跡との切り合いについては、住居跡の掘り下げ時に繰り返された検出で確認できなかった平面形が、住居跡の床面で検出できたことにより判断した。主軸は南北方向で 0.8 m 程度、東西方向で 1.3 m 程度を測り、楕円形に近い平面形である。テラス状の部分が東西両側にあり、中央付近が深さ 45cm 程度と最も深い。床面中央にあった濁った範囲を掘削してピット状になったが、結果として遺構の本来の掘方ではないと判断した。埋土は上層、中層ともに淡茶褐色の粘質土であるが、中層は炭化物が目立ち、下層は基本的に中層と同様とみられるが、グライ化して淡青灰褐色となる。小形の遺構ながら、第 2 面の唯一の竪穴住居跡との切り合いがあることから、土坑として報告したが、残念ながら時期が判別できる出土遺物はなく、中位から礫のみが出土した。

18 号土坑（図版 19、第 37 図）

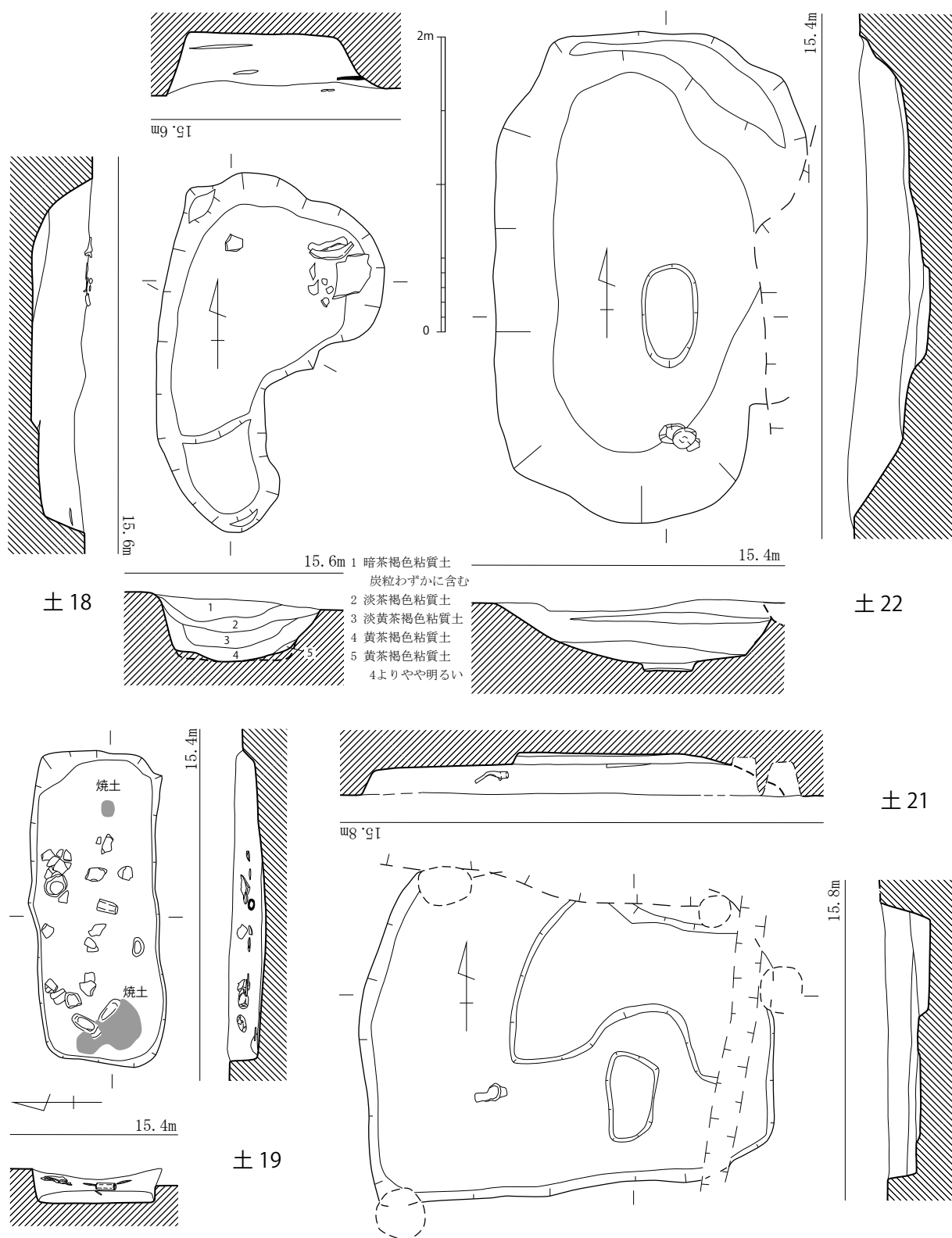
第 2 面の調査区南東隅付近で確認され、21 号土坑の東側に位置する。主軸は南北方向で 2.45 m 程度、東西方向で 1.5 m 程度を測り、不整な平面形で、南側は幅が狭く、テラス状の部分を伴う底である。壁は緩やかな傾斜の部分が多く、最深部で深さは 60cm 程度である。埋土は、上層で炭粒を含む暗茶褐色、淡茶褐色の粘質土で、下層は黄茶褐色系の粘質土である。弥生土器が出土した。

出土土器（図版 36、第 36 図 8～11）

出土土器は全て弥生土器甕である。8～10 はいずれも跳上口縁の甕で、器表の摩滅が激しいが外面に縦位のハケ目が残る。8 の口縁下外面には 1 条の細い沈線が廻る。11 は器台で、最もくびれる中位の内面には稜がある。外面にわずかにハケ目が残る。

19 号土坑（図版 20、第 37 図）

第 2 面の調査区中央部の西側付近で確認された。当初の検出段階で、20 号土坑に切られると判断したが、掘削の進行とともに 20 号土坑を切るとの結論になった。12 号土坑の西側、13 号土坑の南側に位置する。主軸は南北方向で 2.1 m 程度、東西方向で 0.85 m 程度を測り、南北に長い隅丸長方形の平面形である。深さは 25cm 程度ある。埋土は上層の暗茶褐色の粘質土が、厚く堆積し、下層に炭や焼土粒が集中する薄い灰茶褐色の層があり、東端近くの底面には焼土塊が集中する部分



第 37 図 18・19・21・22 号土坑実測図 (1/40)

がある。弥生土器や礫が出土した。

出土土器（第 36 図 12・13）

12 は大型の弥生土器壺の底部で、器表の摩滅・剥落が著しい。13 は丹塗りの高杯脚部で、器表の摩滅が激しいが、わずかに縦位のミガキが残る。

20 号土坑（図版 20、第 38 図）

第 2 面の中央部の西側付近で確認された。当初の検出段階で、19 号土坑を切ると判断したが、掘削の進行とともに 19 号土坑に切られるとの結論になった。13 号土坑にも切られ、12 号土坑の西側、13・15 号土坑の南側に位置する。主軸は南北軸で 3.5 m 程度、東西軸で 6.0 m 程度を測る非常に大きな遺構で、切り合いや攪乱の影響があるが、東西に長い隅丸長方形の平面形とみられる。竪穴住居跡の可能性も考慮されるが、床面が東側で徐々に深くなる点や、西半の南北に分かれて焼土塊はあるものの明瞭な炉跡や支柱穴が確認できなかったことから土坑とした。弥生土器や砥石、石包丁、投弾、鉄鏃が出土した。

出土土器（図版 36、第 40 図 1～5）

出土土器は、全て弥生土器である。1 は壺の底部で、外面に縦位のミガキが残るが、内面の剥落が著しい。2・3 は甕である。2 は跳上口縁で、外面には細かいハケ目残り、口縁下には 2 条の細い沈線が廻る。胎土には角閃石が目立つ。3 は外方への伸びが短い逆 L 字形の口縁である。4・5 は鉢である。4 の口縁部の突出は、内外面ともに短い。外面には横位のミガキが残る。5 は短い跳上口縁で、口縁下に 1 条の突帯が廻り、外面には細かいハケ目が残る。

21 号土坑（図版 20、第 37 図）

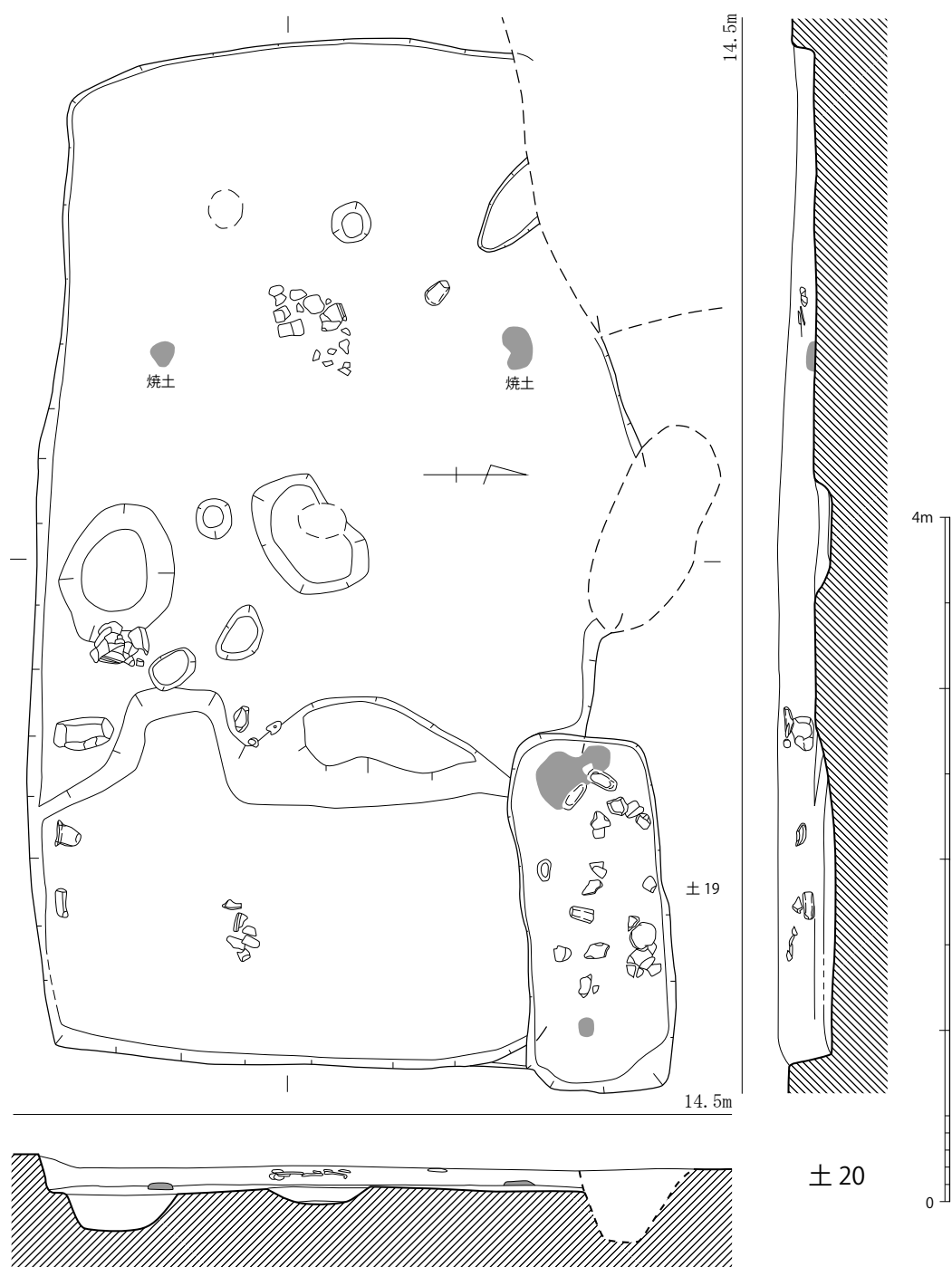
第 2 面の調査区南東隅付近で確認され、18 号土坑の西側に位置する。東端付近では暗渠排水溝によって南北に縦断した攪乱を受け、北端部を流路跡により切られるため、南北方向の大きさは不明であるが、隅丸長方形に近い平面形になるとみられる。東西方向の主軸は 2.7 m 程度を測る。15～20cm 程度の深さの部分が多く、更にそこから 5cm 程度深くなる部分がある。弥生土器が出土した。

出土土器（図版 36、第 40 図 6）

6 は弥生土器甕で、外面にハケ目残り、胎土には角閃石が目立つ。

22 号土坑（図版 21、第 37 図）

第 2 面の調査区東端の中央部付近で確認され、5 号溝を切り、東側を谷状地形に堆積した灰褐色砂質土に切られる。主軸は南北方向で 3.35 m 程度、東西方向で 2.1 m 程度を測り、切られる部分を勘案して小判形の平面形になるとみられる。北端部では浅い位置でテラス状の部分があり、壁は緩やかに落ちる部分が多く、底面まで 50cm 程度の深さで、その中央部では更にわずかに下がる。埋土は濁りが強く、上層で黄褐～灰褐色粘質土の層があり、最下層で黒灰褐色の粘質土である。図示できる遺物は出土していない。



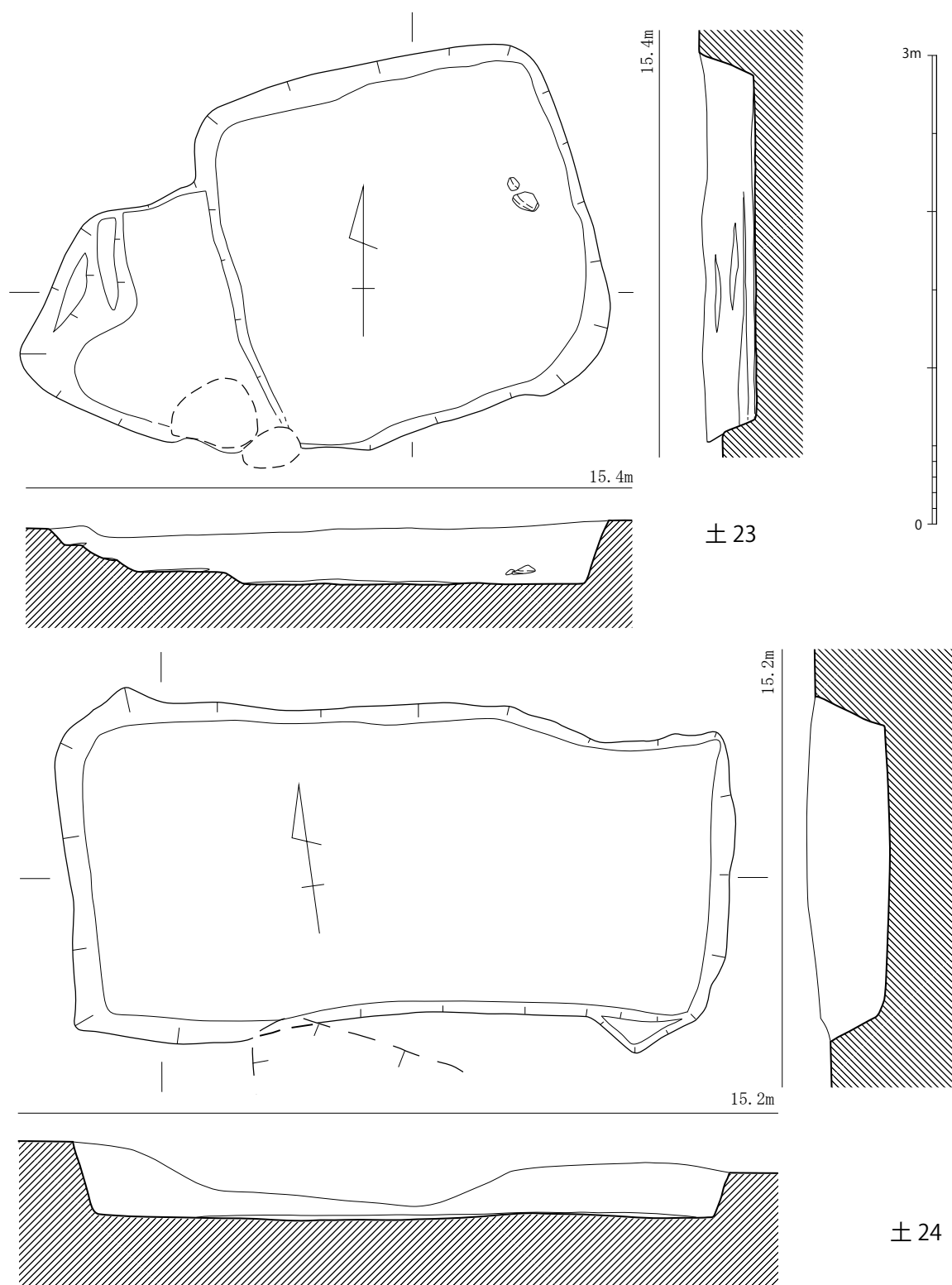
第 38 図 20 号土坑実測図 (1/40)

23 号土坑 (図版 21、第 39 図)

第 2 面の調査区北東端付近で確認され、8 号土坑の東側、7 号土坑の南側、17 号竪穴住居跡の北側に位置する。主軸は南北方向で 2.4 m 程度、東西方向で 3.8 m 程度を測り、東側の隅丸方形一辺 2.4 m 程度の隅丸方形で、西側に内部がテラス状の三角形の張り出し部を伴う平面形である。深さは 40cm 程度である。弥生土器が出土した。

出土土器 (第 40 図 7・8)

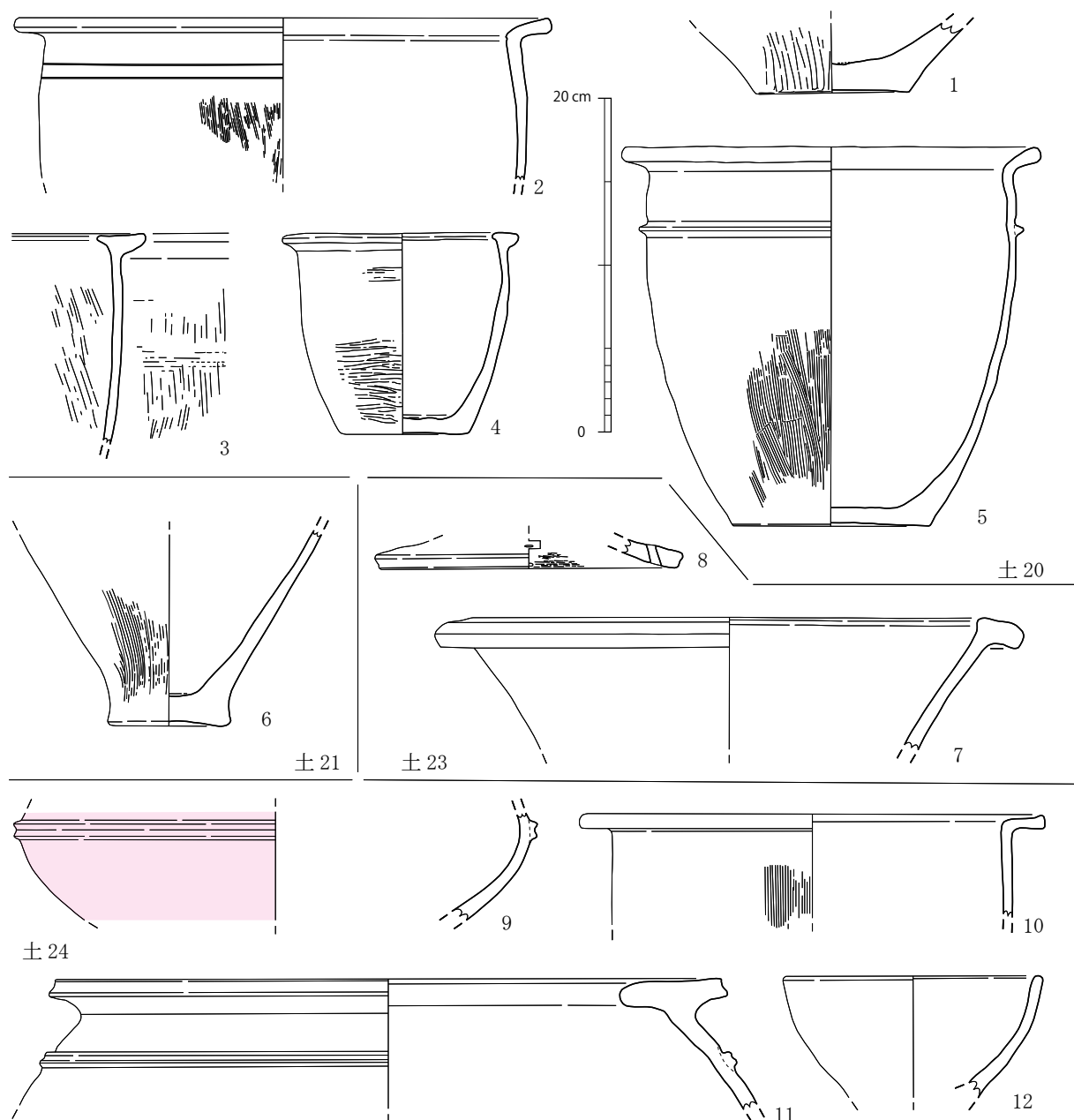
7 は弥生土器広口壺の口縁で、厚さを増して外方へ伸び、端部は面をなす。8 は弥生土器の蓋の裾部で、焼成前に施された小孔があり、端部は面をなす。



第 39 図 23・24 号土坑実測図 (1/40)

24 号土坑 (図版 21、第 39 図)

第 2 面の調査区北側中央付近で確認され、8 号土坑の北側に位置する。検出時に複数の浅い遺構の切り合いとして掘削したところ、その下位で一体の遺構として検出した。主軸は南北方向で 2.0 m、東西方向で 4.3 m を測り、東西に長い隅丸長方形の平面形である。上面で先に複数の遺構として掘削しているため、上端の高さには差があり、最も残りのよい部分で壁は 50cm 程度残る。また東側



第40図 20・21・23・24号土坑出土土器実測図(1/4)

の壁は、掘り過ぎにより、傾斜が急になり過ぎている。埋土については、上層に淡橙茶褐色シルト、下層にやや濁りのある淡黒茶褐色シルト、最下層に薄く淡灰褐色の粘質土が堆積する。弥生土器が出土した。

出土土器(第40図9～13)

出土土器は、全て弥生土器である。9は壺の胴下半のみが残り、最も張り出すとみられる残存部の上端の位置で断面M字状の突帯が廻る。10は跳上口縁の甕で、口縁部は張りの少ない胴部から強く屈曲して水平に近く伸び、外端部はやや厚みを増して面をなす。11は大型の甕の口縁部付近で、胴の張る器形とみられる。内外面に突出する口縁部の上面は広い面をなし、内端部は丸みをもって仕上げられるのに対し、外端部はやや窪む。口縁下の外面に断面M字状の突帯が廻る。12は小型の素口縁の鉢で、下端は底部に近い厚みを増す。

c. 溝・流路跡

1号溝（図版 22、第 41 図）

第 1 面の調査区北側に位置し、ほぼ東西の軸に沿うが、わずかに北東－南西に傾いて 12 m 程度に亘って直線的に延びる。幅は 0.7 ～ 0.8 m 前後で、底面の標高は東側に向かって低くなる傾向にあり、最深部の東端付近で深さ 30cm に満たない程度である。埋土は淡灰茶褐色シルトが主体で、東側は中層で砂質、下層で粘質になる。図示できる遺物は出土していない。

2号溝（図版 23、第 41 図）

第 1 面の調査区西側に位置し、ほぼ南北の軸に沿うが、わずかに北東－南西に傾いて直線的に延びる。20 m 程度に亘って検出し、北側は調査区外へ延び、南側は流路跡によって途切れる。幅は 0.8 ～ 1.2 m 前後で、底面の標高は 15.2 m 程度でほぼ一定する。最上層の埋土は淡灰茶褐色粘質土で、より下位の層との堀方が連続しない。このような堀方の相違は、検出範囲全体で確認できる一方で、その軸が完全に重複するため、溝としての掘り返しが想定される。掘り返し前の溝の埋土は暗灰褐～灰褐色の粘質土で、基本的に幅が狭くなる。土師器・須恵器、土錘が出土した。

出土土器（第 43 図 1 ～ 4）

1・2 は土師器、3・4 は須恵器である。1 は杯で、残存する底部の厚さは 3mm と非常に薄い。わずかな残存部位しかないが、外底部の外端で非常にシャープな段が生じてわずかに突出する。2 は高台を伴う椀で、内面のみ黒色化した黒色土器である。器表の摩滅が激しい。3・4 は杯蓋である。3 はやや径が小さく、丸い天井部となる器形である。4 の径は小さく、欠失しているが、下位に突出するかえりを伴うとみられる。天井部は回転ケズリ後に非常に丁寧にナデで仕上げられている。

3号溝（図版 24・25、第 41 図）

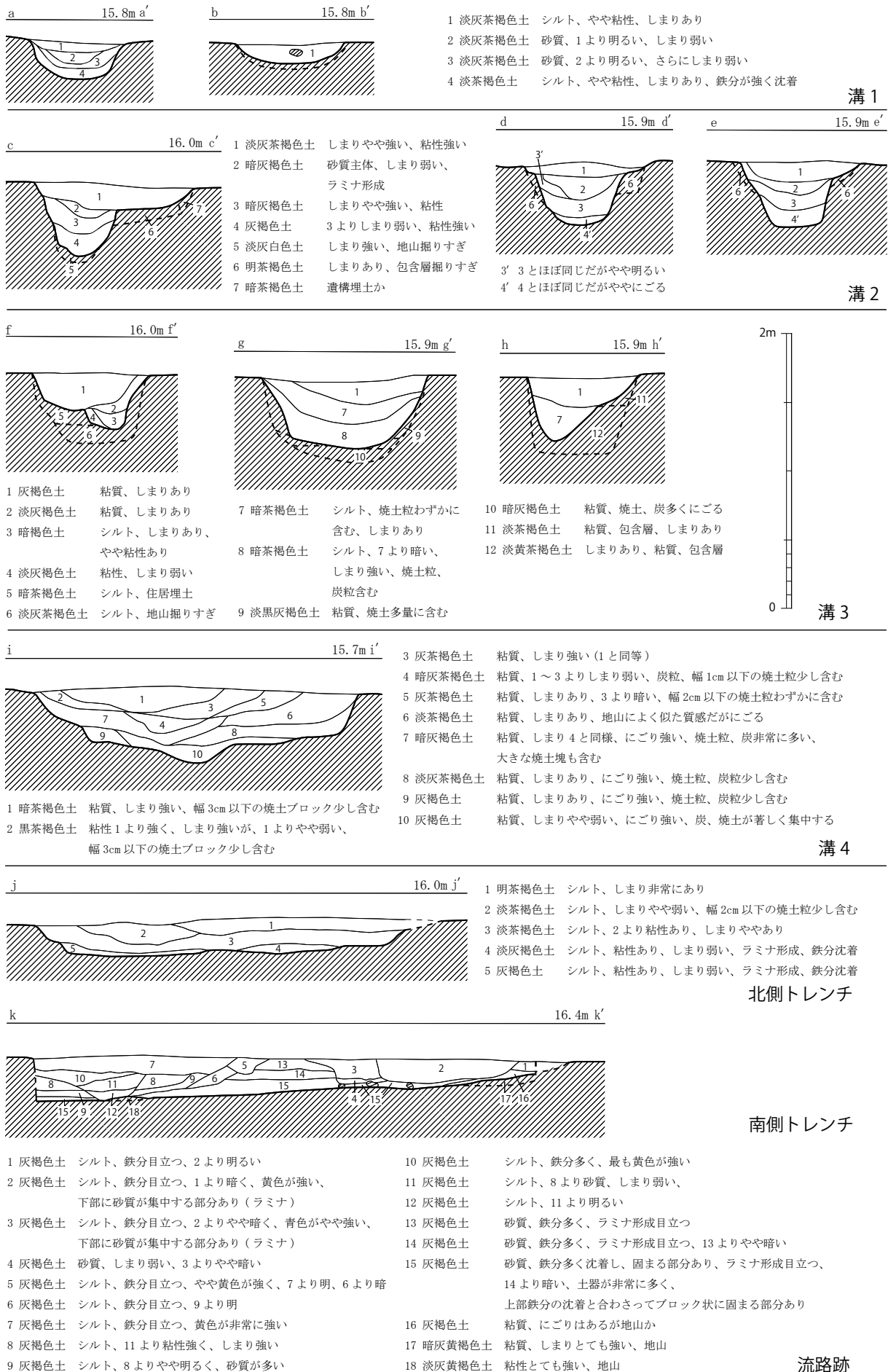
第 1 面の調査区中央部のやや東寄りに位置し、ほぼ南北の軸に沿うが、わずかに北東－南西に傾いて 12 m 程度に亘って直線的に延びる。幅は 0.8 ～ 1.2 m 前後で、中央部が最も幅広で、また底面の標高がわずかであるが最も低い。最上層の埋土は全体的に灰褐色粘質土で、下層では主に暗茶褐色シルトである。北側の堆積土層でのみ、掘り返しの可能性がある層が確認され、この部分だけ他遺構と切り合う、もしくは掘り返し後の堀方が、前の堀方を越えて掘削したと想定される。包含層や 9 号竪穴住居跡を切り込んで掘削しているため、堀方の把握が困難で、全体的に底面は掘り過ぎている。土師器・須恵器、投弾、土錘、銅銭が出土した。

出土土器（図版 37、第 43 図 5 ～ 11）

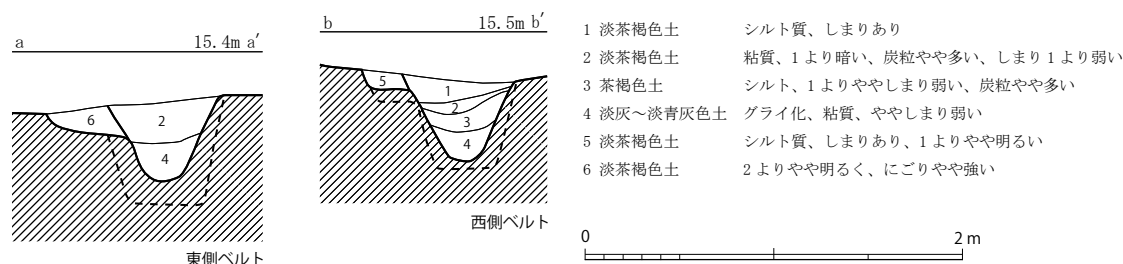
5 は土師器、6 ～ 11 は須恵器である。5 は甑の把手で、本体との接合部で剥落する。6・7 は杯蓋で、天井部のみが残り、外面に回転ケズリが残る。7 は天井部が平坦で、径が小さく、わずかに突出するかえりを伴う。8・9 は杯身である。8 は小片で、かえり、受部が残り、明黄灰褐色で還元が十分でない色調である。9 は杯身の底部で高台を伴う。10・11 は高杯である。10 は有蓋高杯の杯部で、短いかえりが直上に伸びる。11 は脚部で下端にわずかに屈曲部が残る。

4号溝（図版 25、第 41 図）

第 1 面の調査区中央部のやや東寄りに位置し、3 号溝に切られ、9 号竪穴住居跡の南側に位置する。



第 41 図 1～4号溝及び流路跡土層実測図 (1/40)



第 42 図 5 号溝土層実測図 (1/40)

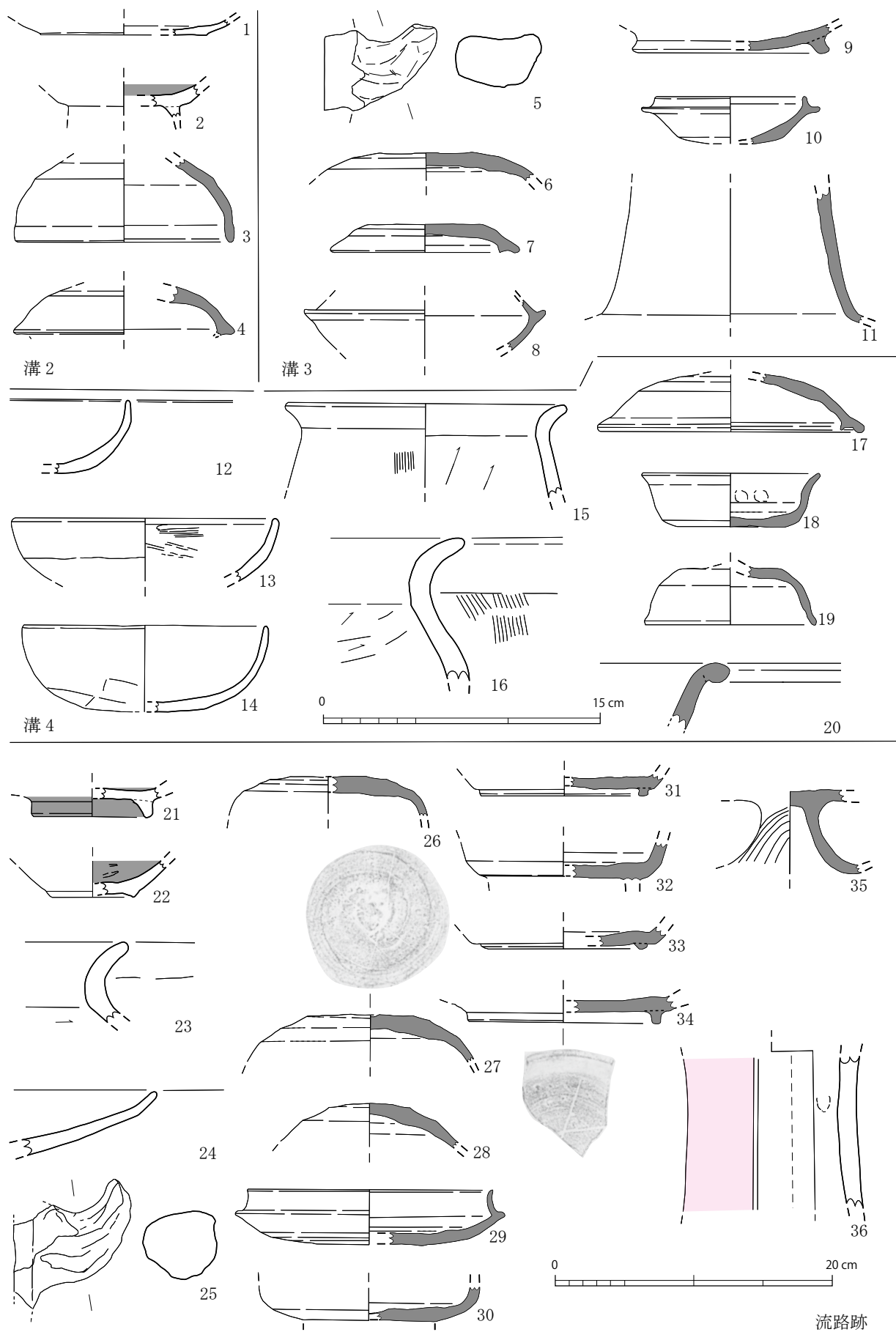
南北に通る暗渠排水溝によって西端付近に攪乱を受ける。3号溝の検出時点では、この4号溝は全く検出することができず、3号溝の堀方の壁にその断面が現れて、遺構の存在が確認できた。平面形の検出は、周囲を20cm程度掘り下げて検出が可能となった。東端を流路跡に切られるまで、東西軸で4m程度が残存し、全体の規模が不明で、南北の両上端が直線的ではないため幅の変化が大きく、また底でピットが検出された点から溝として報告する点に疑問もある。ただ、壁の傾斜が比較的緩やかで、底面が中央部深くなる傾向が明瞭であるという断面を勘案して溝として報告する。検出可能となった面からの深さは50cm程度で、底面の標高は15.0m前後である。最も幅が広がる部分で、2.6m程度を測り、埋土は全体に粘質土で焼土粒や炭粒を含む場合が多く、上層で暗茶、黒茶、灰茶褐色系が主体で、下層で灰褐色系が主体となる。最下層では特に炭・焼土が著しく集中する。土師器・須恵器が出土した。

出土土器 (第 43 図 12～20)

12～16は土師器、17～20は須恵器である。12～14は椀で、いずれも口縁部は内湾しながら立ち上がり、ほぼ直上を向いて端部に至る。15・16は甕で、15は小型のもので短い口縁部がわずかに開き、16は内面に明瞭なケズリが残る。17は短いかえりを伴う杯蓋で、残存する上端部が上方へ変化するため、つまみを有したとみられる。18は小型の杯身で口縁部は外反気味にやや開き、外底部はヘラ切り後にナデ調整される。19は高杯の蓋で、口縁端部がわずかに開き、残存する上端部が上方へ変化するため、つまみを有したとみられる。20は甕の口縁部小片で、端部は外面に肥厚し、その下端で段が生じる。

5号溝 (図版 26、第 5・42 図)

第2面の調査区中央部付近で確認され、ほぼ東西の軸に沿うが、わずかに北東－南西に傾いて12m程度に亘ってほぼ直線的に延びる。東端部を22号土坑に切られ、更に以東の灰褐色砂質土が堆積する谷状地形に繋がると考えられる。幅は0.6～1.0m前後で、土層断面から浅い溝から深い溝へと掘り返したと考えられる。枝分かれした西端付近の北側へと延びる浅い部分が、掘り返し前の溝の西端である可能性がある。底面の標高は、全体的に東側へと低くなり、土層断面を記録した東側の底の14.7mに対し、22号土坑と切り合う西側の隣接部で更に深くなって標高14.4m前後となり、22号土坑の壁で確認できた底は14.7m前後と再度高くなる。この最も深い部分は、粘質土下層の砂層に達して著しい湧水が生じ、土器や礫の出土が最も集中していた。このような状況から、井戸としての利用や廃棄の際の祭祀行為と関連する可能性がある。埋土は上層では茶褐色系シルト主体で、下層ではややグライ化して淡灰～淡青灰色の粘質土である。弥生土器、凹石が出土した。



第43図 2～4号溝及び流路跡出土土器実測図 (36は1/4、他は1/3)

出土土器（図版 37、第 44 図 1 ～ 12）

出土土器は全て弥生土器である。1 ～ 4 は壺である。1・2 は広口壺の口頸部で、ともに外反して大きく開く。口縁部は端部で肥厚し、内面に 1 では小さな段、2 では小さな突出が生じる。1 の外面には黒塗りが見られ、2 の内外面にはハケ目が残る。3 は下半のみが残存し、上端部に突帯が廻る。外面は丹塗りで、ミガキが残る。4 は小壺で、頸部から上部が欠失する。胴部のやや上位で強く張り、そこで突帯が廻り、頸部へと締まる。5 は大型の甕の底部で、外面にはかすかにハケ目が残る。6 ～ 9 は高杯である。6 の杯部は完存し、内面の丹塗りやミガキが比較的良好に残る。7 は黒塗りとみられるが、ほとんど顔料が残存していない。内面にわずかにミガキが残る。8 はほぼ完形で、脚部が短く、杯部がやや深い。外面の口縁部下に低い突帯が廻る。9 は 8 と同様の器形とみられ、短い脚部のみが残る。10 ～ 12 は鉢である。10 は底部のみが残存し、外面に横位のミガキが残る。11 は口縁部周辺のみが残り、短い口縁部である。12 はほぼ完形で、口縁部は内側にわずかに突出するとともに、直線的にやや上方に傾いて伸びる。外面には全体的にミガキが残る。13 は蓋で、外面にハケ目が残る。

流路跡（図版 27、第 5・41 図）

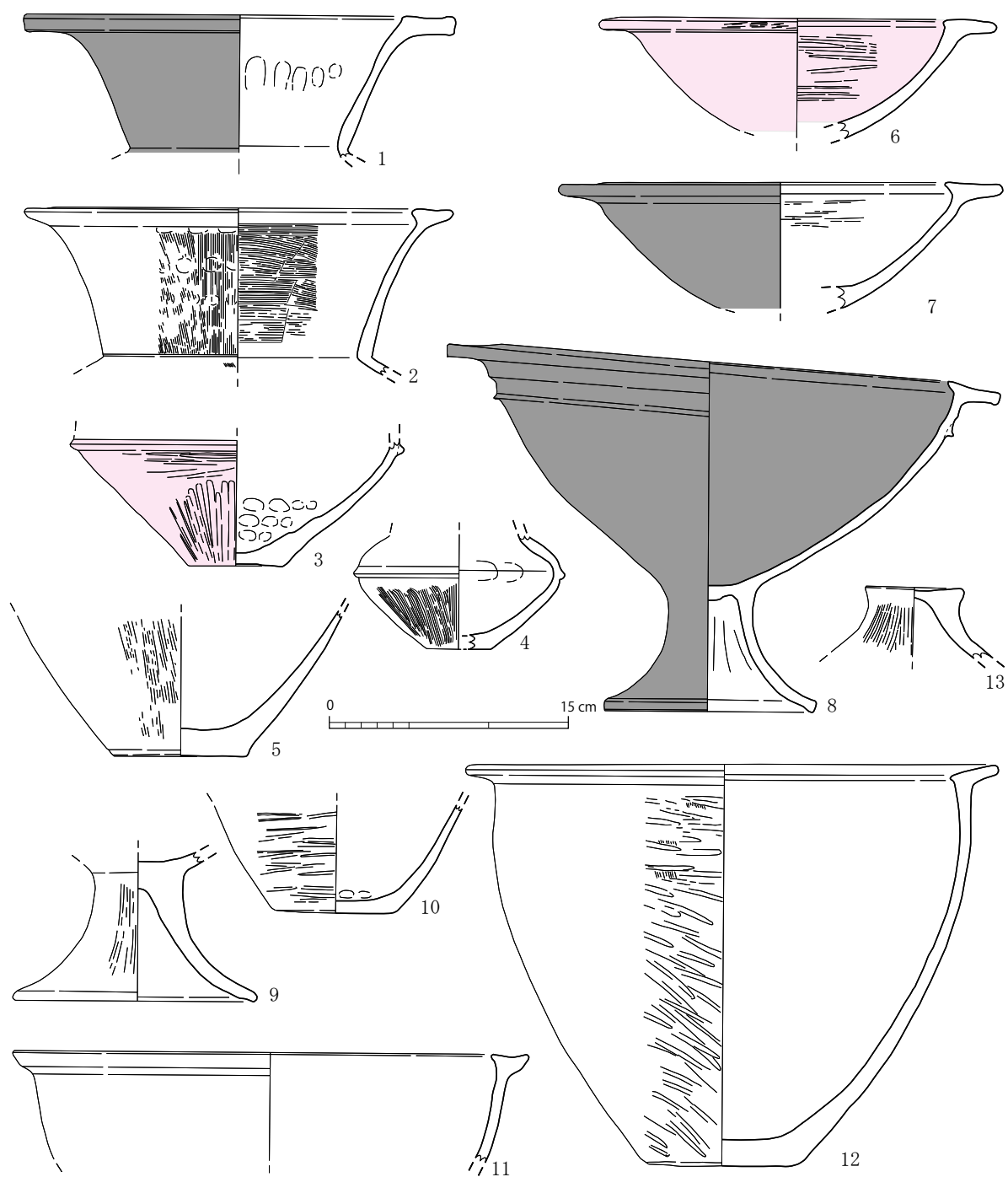
調査区第 1 面では、南側で東西に通じ、東側で南北に通って、南東部で接続、もしくは切り合っ て L 字状に調査区の広い範囲を占めている。同時に報告するが、調査区外へ及ぶ部分での判断が できないため、両方向のものが一体であるか否かは不明である。もし一体でほぼ直角に曲がるなら ば、その形状から人為的に掘削された遺構と判断されることになるが、自然的な流路跡との判断を しており、その理由は以下の点からの判断である。まず、土層断面から壁の傾斜が両方向とも非常 に緩やかである点、東西方向のものの土層（k - k'）より全体的な埋没後も何度も複雑かつ不規則 な切り合いが見られる状況から、繰り返し水流の影響を受ける低地とみられる点、南北方向では 単純な埋没の様相で、東西方向のような複雑な存続とは相違する点が挙げられる。そのため、南北・ 東西の各方向の延長部分が調査区外へ延びていると想定する。なお、検出の際には切り合いの確認 を試みたが、上層埋土が極めて類似している点と先述のように東西方向内の複数の単位と時期幅が 影響したためか、判別できなかった。

幅は南北・東西方向ともに 10 m を超える部分がある。わずかであるが、底面は南北方向よりも 東西方向の方が深く、第 2 面の調査面でも東西方向の堀方が残る範囲があった。なお、東西方向の 当初の全体的な堆積の最下層（15 層）は、土器小片や小礫が多数含まれるとともに、著しく鉄分 が沈着してそれらが集塊状に固着して締まる様相であった。土師器・須恵器・弥生土器が出土した。

出土土器（図版 37、第 43 図 21 ～ 36）

21 ～ 25 は土師器、26 ～ 35 は須恵器、36 は弥生土器である。21・22 は黒色土器の椀である。21 には 22 に比して高く、明瞭な高台が貼付けられる。内外面のみならず、断面も含めて黒色化する。 22 には非常に低い高台が貼付けられ、内面のみ黒色化する。23 は甕の口頸部小片で、内面にケズリが残る。24 は高杯の杯部で、口縁部は緩やかに屈曲してわずかに上方へ立ち上がる。25 は甌の 把手で、本体内面を残す。

26 ～ 28 は杯蓋である。27 は外天井に 3 条の沈線によるヘラ記号が残る。28 は天井部が狭く、 丸みがあり、器表の摩滅が激しい。29 ～ 31 は杯身である。29 の径はやや大きく、受部やかえりの



第44図 5号溝出土土器実測図 (1/4)

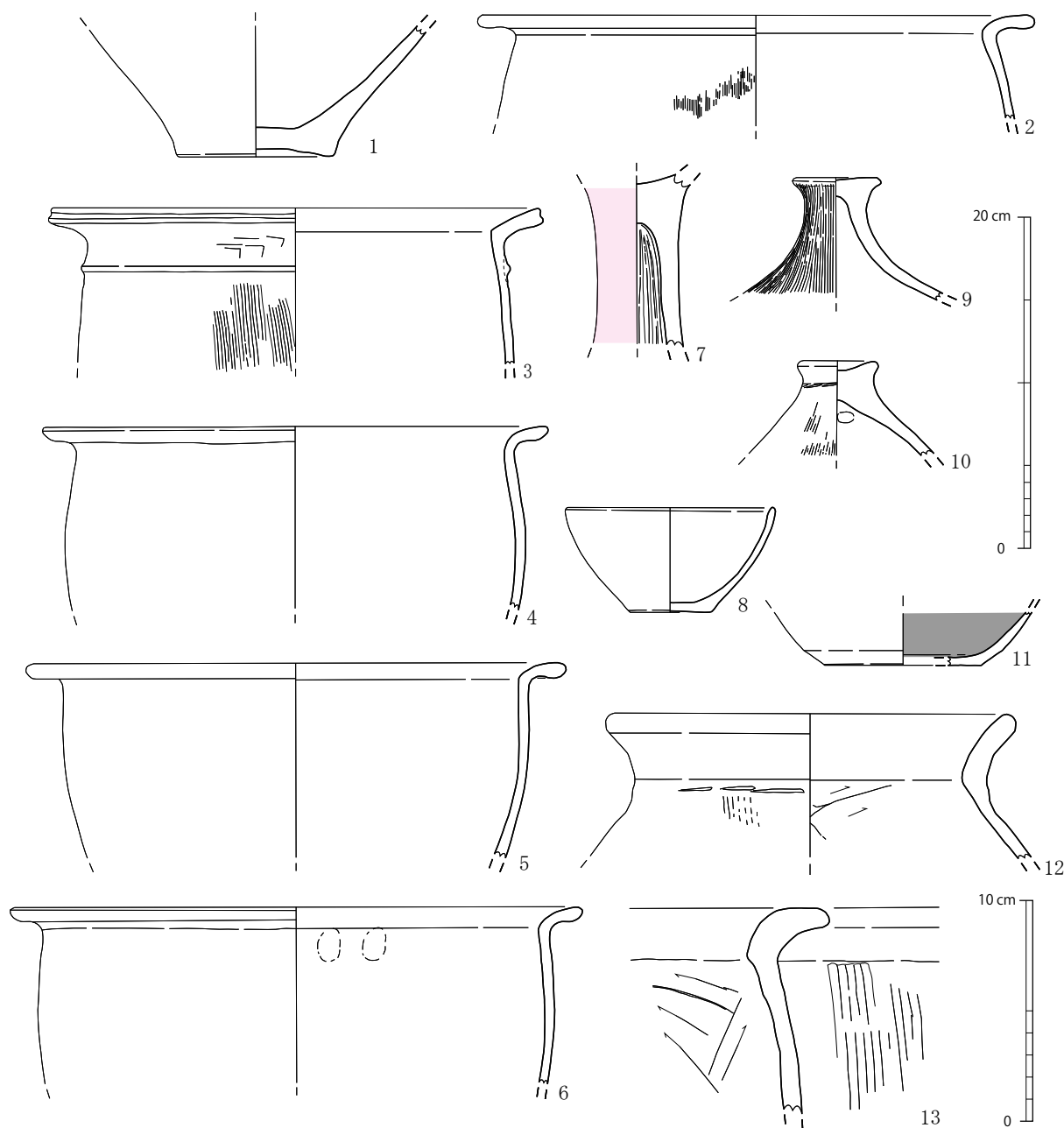
端部はやや鋭く仕上げられる。30～34は高台を伴うもので、ほぼ底部のみが残り、30・32の高台が完全に剥落する。34の外面高台内にはへラ記号が残る。35は低脚の高杯である。

36は筒形器台の脚部で、上下方向の端部は、ともに透かし孔の一部をなすため直線的である。外面にはわずかに丹塗りが残る。

d. ピット出土の土器 (図版38、第45図1～13)

1～10は弥生土器、11～13は土師器である。

1は壺の底部である。



第 45 図 ピット出土土器実測図 (11～13 は 1/3、他は 1/4)

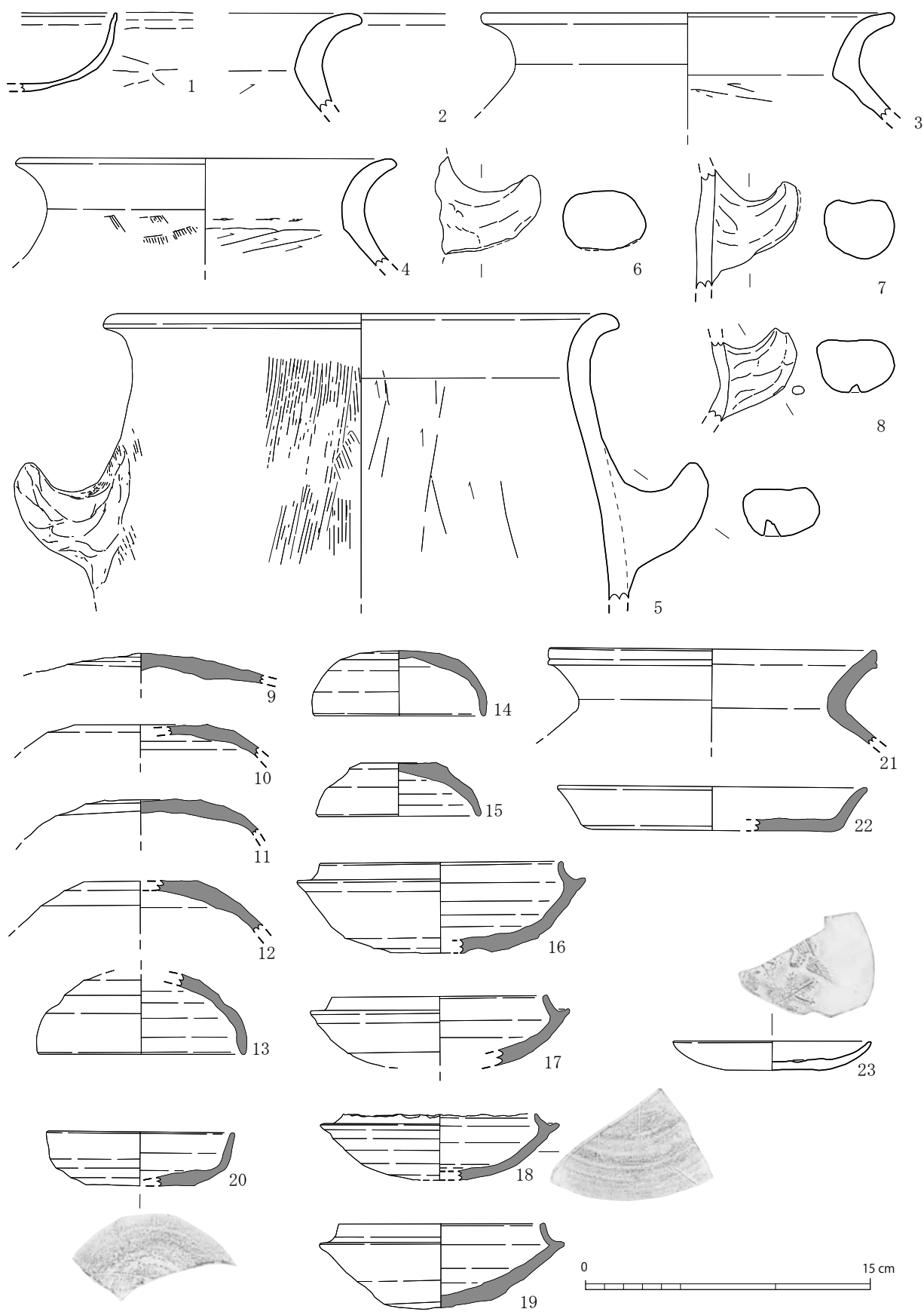
2～6は甕で、いずれも跳上口縁である。3のみ外面口縁部下に1条の突帯が廻り、口縁部は、内面に明瞭な稜を生じて屈曲して伸びる。また、3以外の口縁端部は丸みをもっておさめられるが、3では口縁端部には幅があり、沈線状の凹みが廻る。

7は高杯の脚部で、器表には丹が残り、内部にはシボリの痕跡が目立つ。

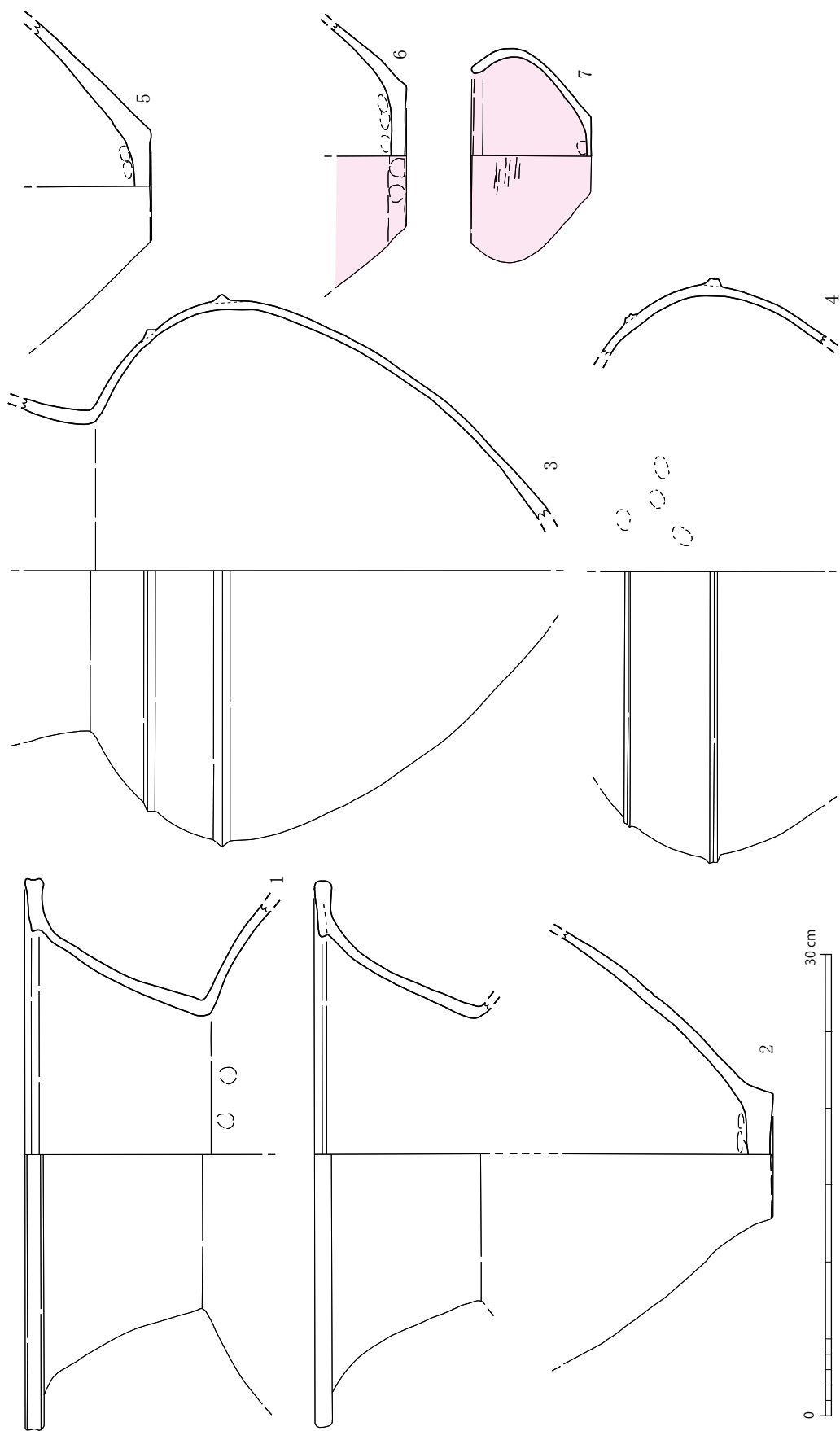
8は素口縁の鉢である。

9・10は蓋で、9の外面には細かいハケ目が残る。10は被熱の影響で表面の劣化が激しく、胎土が橙褐色となる部分がある。また頂部がやや窪む。

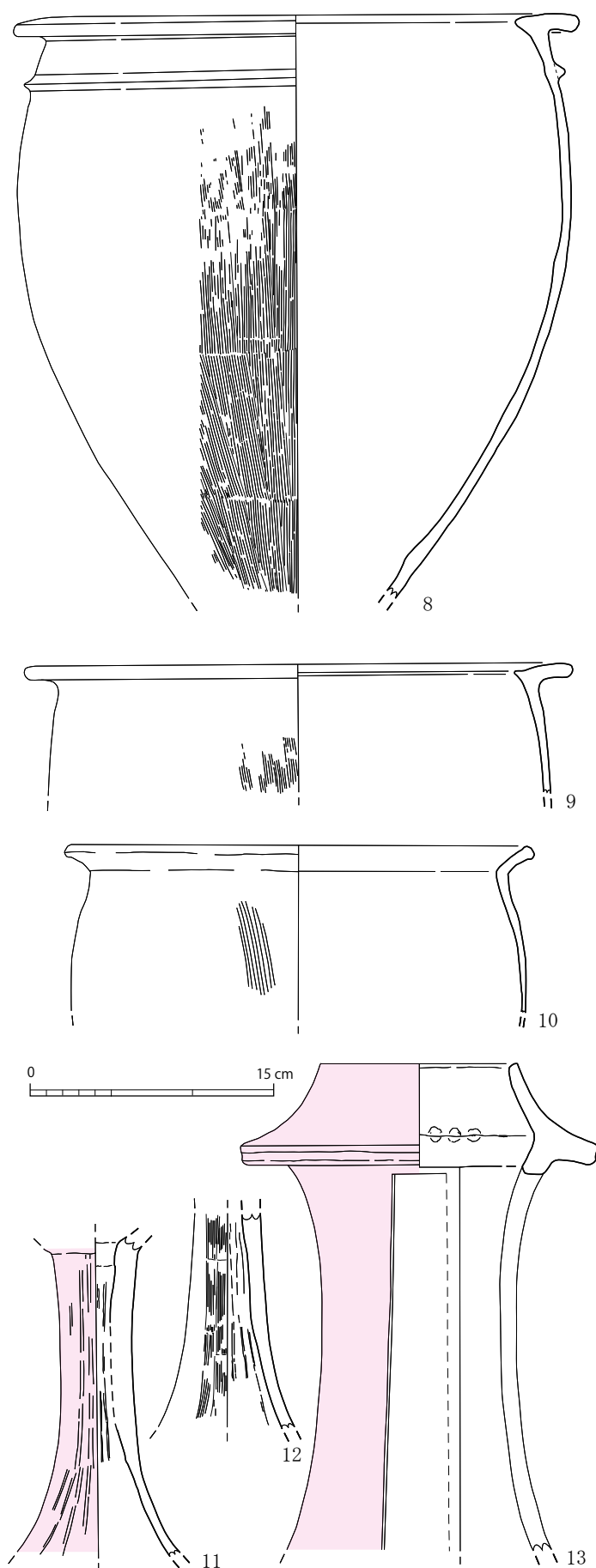
11は杯身で、焼成時の炭素のためか全体に暗い色調で、特に内面で著しく黒灰褐色である。12・13は甕で、ともに頸部以下の内面にはケズリが残る。



第 46 図 第 1 面包含層等その他の出土土器実測図 (1/3)



第47図 第2面包含層等その他の出土土器実測図① (1/4)



第48図 第2面包含層等その他の出土土器実測図②(1/4)

e. その他の第1面出土土器

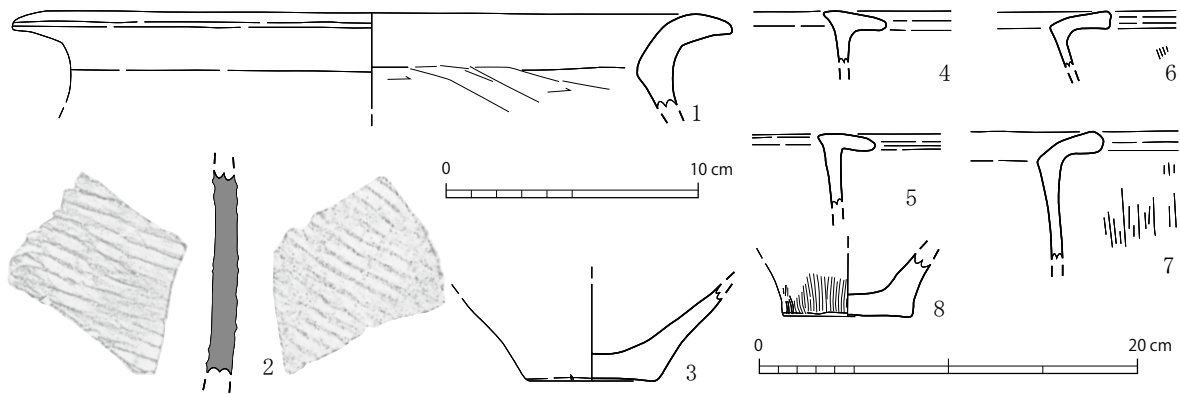
(図版38、第46図1～23)

1～23は、第1面調査時の包含層掘削時、検出時、表採による土器である。1～8は土師器、9～22は須恵器、23は陶器である。

1は椀で、口縁端部がわずかに開き、外面下半にはナデで仕上げる前のケズリの痕跡が残る。2～4は甕で、いずれも口縁部は外反しながら開き、内面の頸部より下位にはケズリが残る。5～8は甕で、5は把手から上位が復元でき、他は把手のみが残る。5の胴部には、外面にハケ目、内面にケズリが残り、口縁部は屈曲せずに緩やかに開く。6は本体との接合部で剥落するが、7・8には本体の胴部内面が残る。5・8の把手の下面には下位からの刺突痕がある。

9～15は杯蓋である。9～12は、ほとんど天井部しか残存していない。9は天井部が広いとみられる。13は口縁部が残り、天井部が狭いとみられる。14・15は小型の蓋で、14は天井部が狭く、口縁部まで丸みのある器形で、15の天井部は平坦である。16～20は杯身で、16～19は受部・かえりが残る。18のかえりは連続して欠けており、人為的に打ち欠かれたと考えられ、また外底部にわずかにヘラ記号が残る。20は高台が付される杯と併行するが、高台を伴わない杯である。外底部にわずかにヘラ記号が残る。21は甕で、口縁端部は外側に面をなし、下端がつまみ出されてわずかに突出する。22は皿で、口縁部はわずかに外反気味に開く。

23は小皿で、見込みに型押による鶴亀松の吉祥文が残る。回転ケズリの残る外底部以外は、化粧土が塗布される。釉ではないが、胴部の内面及び外面上半で調整によるものか、やや光沢を帯びている。



第49図 第1次調査北側調査区（Ⅱ区）出土土器実測図（1・2は1/3、他は1/4）

f. 第2面包含層等出土土器（図版38、第47・48図1～13）

1～13は全て弥生土器で、第2面調査時の包含層等からの出土土器である。1～7は壺、8～10は甕、11・12は高杯、13は筒形器台である。

1・2はともに頸部から口縁が外反気味に立ち上がって開く広口壺で、口縁部は内面で上方に肥厚する。口縁外端で、1ではナデによるためやや窪むが、2では丸みをもっておさめされる。2の胴部の上半が接合できていないが、出土位置や胎土の類似性から同一個体と考えられる。3は広口壺とみられるが、口縁部・底部を欠失する。最大径となる胴の最も張る部分と肩部に突帯が廻る。4は胴部の中位だけが残し、最大径となる最も張る部分と肩部にM字状の突帯が廻る。5・6は底部付近のみが残存しており、6の外面には丹が残る。7は無頸壺で、内外面ともに丹が残る。底部の器壁が非常に薄い。

8～10は甕である。8・9は逆L字形口縁、10は跳上口縁である。8は底部以外ほとんど復元でき、外面口縁部下に1条の突帯が廻る。外面には密にハケ目が残る。

11・12の高杯は、ともに脚部のみが残存する。11の外面に丹と縦位のミガキが残る。12は著しい被熱の影響か、広い範囲で器表が剥離しており、内外面とともに、剥離面も合わせて大部分で赤橙褐色となる。残存する器表にはハケに調整で幅の狭い面とハケ目が密に残る。

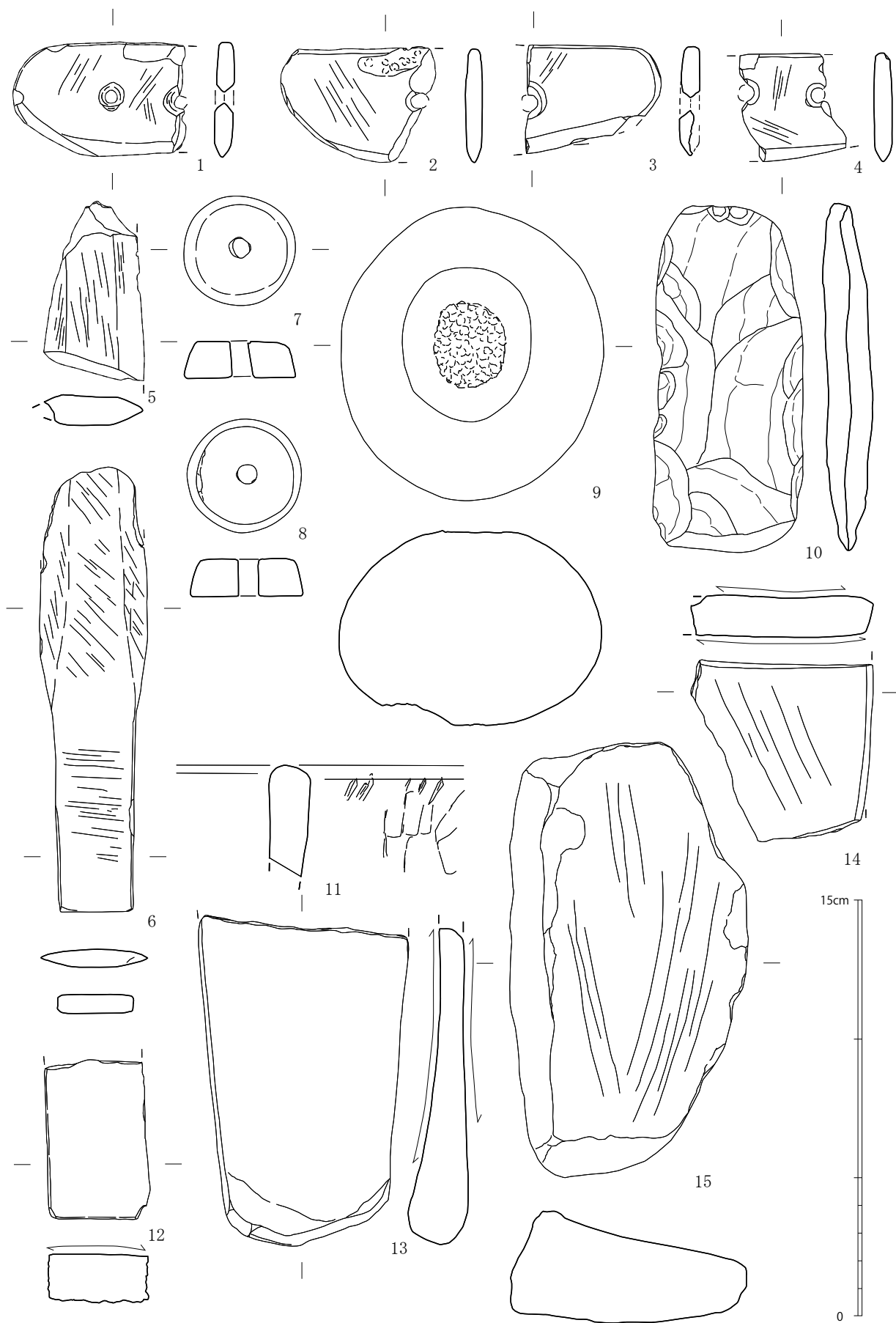
13の筒形器台は、鐙部から上位は完存し、そこから下位はわずかしが残らないが、方形の透かしが十字方向に4ヶ所にあることが確認できる。外面に丹が残る。

g. 北側調査区トレンチ出土土器（第49図1～8）

1は土師器、2は須恵器、3～8は弥生土器である。1は甕で、内面の頸部より下位でケズリが残し、その境で稜が生じる。2は大型の甕の胴部片で、内外面ともに平行文のタタキの痕跡が見られる。3は壺の底部である。4～8は甕で、4～7は口縁部、8は底部のみが残存する。4・5は逆L字形口縁、6・7は跳上口縁である。

h. 出土石製品（図版39・40、第50～52図1～22）

1～4は石包丁である。1は20号土坑出土で、残存長7.2cm、幅4.1cm、厚さ0.7cm、重さ26.4gで頁岩製。回転による穿孔が2ヶ所に残り、内1ヶ所の位置で欠損する。刃部は下部で特に鋭利さを欠き、使用による摩耗が大きいと考えられる。2は第1面のピット出土で、残存長5.6cm、幅5.1cm、厚



第 50 図 出土石製品実測図① (1/2)

さ 0.6cm、重さ 20.6g で、輝緑凝灰岩製。回転による穿孔が残るが、その部分で欠損する。表面は非常に平滑で、丁寧に仕上げられる。3 は 2 面の検出時の出土で、残存長 4.8cm、幅 3.9cm、厚さ 0.7cm、重さ 16.9g で頁岩製。回転による穿孔が残るが、その部分で欠損する。4 は 17 号竪穴住居跡の出土で、残存長 3.8cm、幅 3.9cm、厚さ 0.7cm、重さ 11.6g で粘板岩製。回転による穿孔が残るが、両孔で欠損して、その間の部分しか残存しない。残った刃部はほとんど摩耗していない。

5・6 は磨製石剣である。5 は第 1 面の包含層出土で、残存長 7.4cm、残存幅 3.6cm、厚さ 1.1cm、重さ 28.5g で、粘板岩製。中央部は平坦かつ表裏で平行し、稜が生じて両側の刃部へと厚みを減じていく断面形であるが、片側の刃部は完全に失われる。残る刃部は鋭利である。下端の欠損面は、全体に非常に平坦で、節理に沿って欠損した可能性がある。6 は 5 号竪穴住居跡の出土で、残存長 16.0cm、幅 3.8cm、厚さ 0.7cm、重さ 69.9g で粘板岩製。基部は完存しており、側面で明瞭に面取りされた方形で、そこから緩やかに幅を増す関部を経て刃部のある身部となる。身の上部は欠失しており、中央部で平坦かつ表裏で平行し、両側の刃部へと厚みを減じる断面形で、鎬がない。残る刃部は鋭利に仕上げられる。

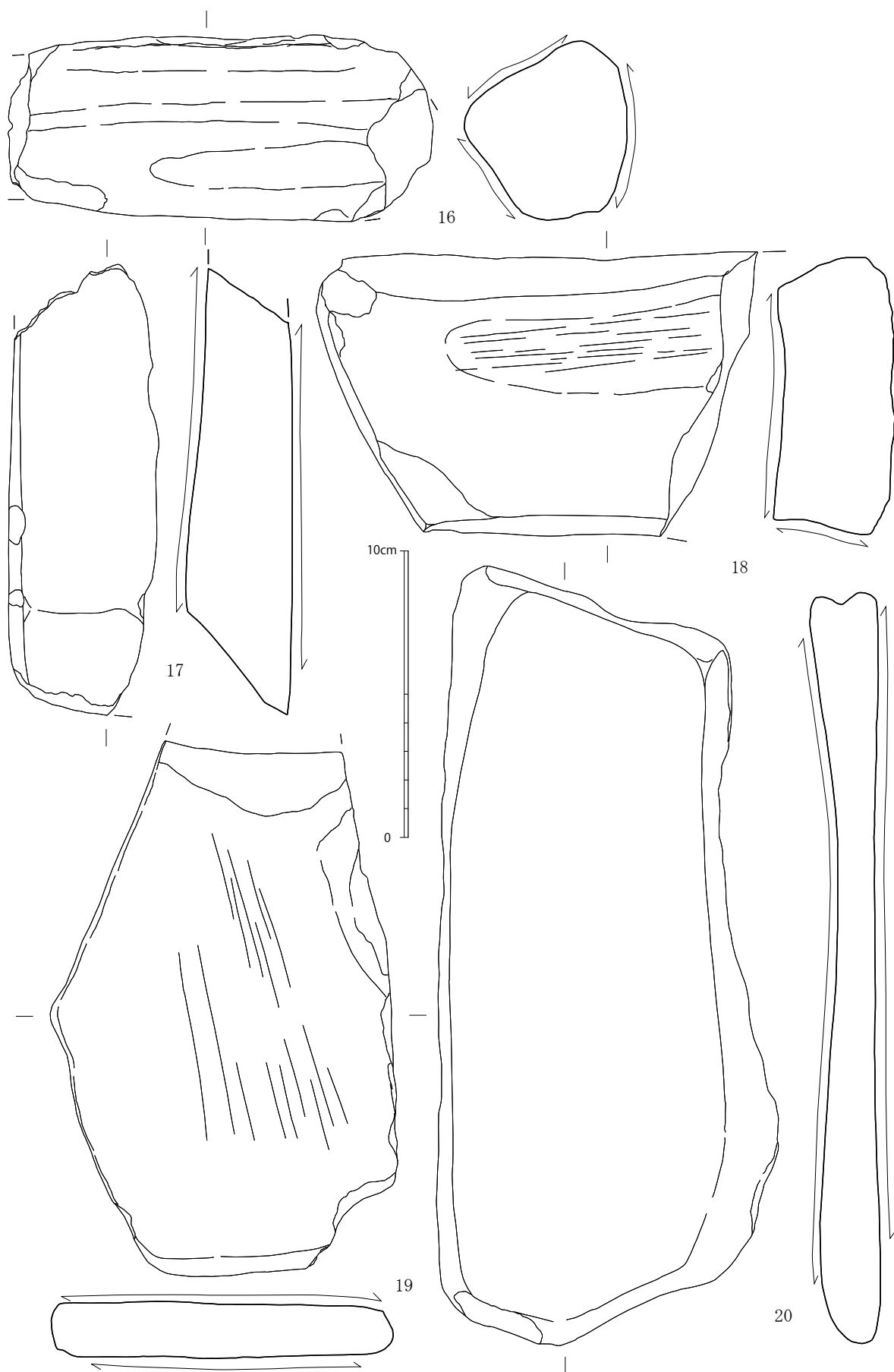
7・8 は紡錘車である。7 は 9 号竪穴住居跡出土で、径 1.9 ～ 2.0cm、高さ 1.3cm、孔径 0.7cm、重さ 36.8g で灰白色の蛇紋岩製。表面は細かな凹凸が多く、平坦かつ平滑さはさほど顕著ではない。孔は両面から穿孔されており、その位置は中央よりわずかに偏りがある。8 は 3・4 号土坑から一括して出土した土器群とともに出土しており、径 2.1cm、高さ 1.4cm、孔径 0.7cm、重さ 40.4g で暗黒灰職の蛇紋岩製。表面は平坦かつ平滑で光沢が生じる程度に仕上げられる。孔は表裏を通じてほとんどずれがなく、片側からの穿孔とみられる。

9 は 5 号溝出土の凹石で、長さ 10.6cm、幅 7.6cm、厚さ 7.0cm、重さ 997.5g で玄武岩製。両面の中央部で繰り返しの打ったことによる使用痕がある。なお、片面に大きな凹みがあるが、これは当初からのものである。

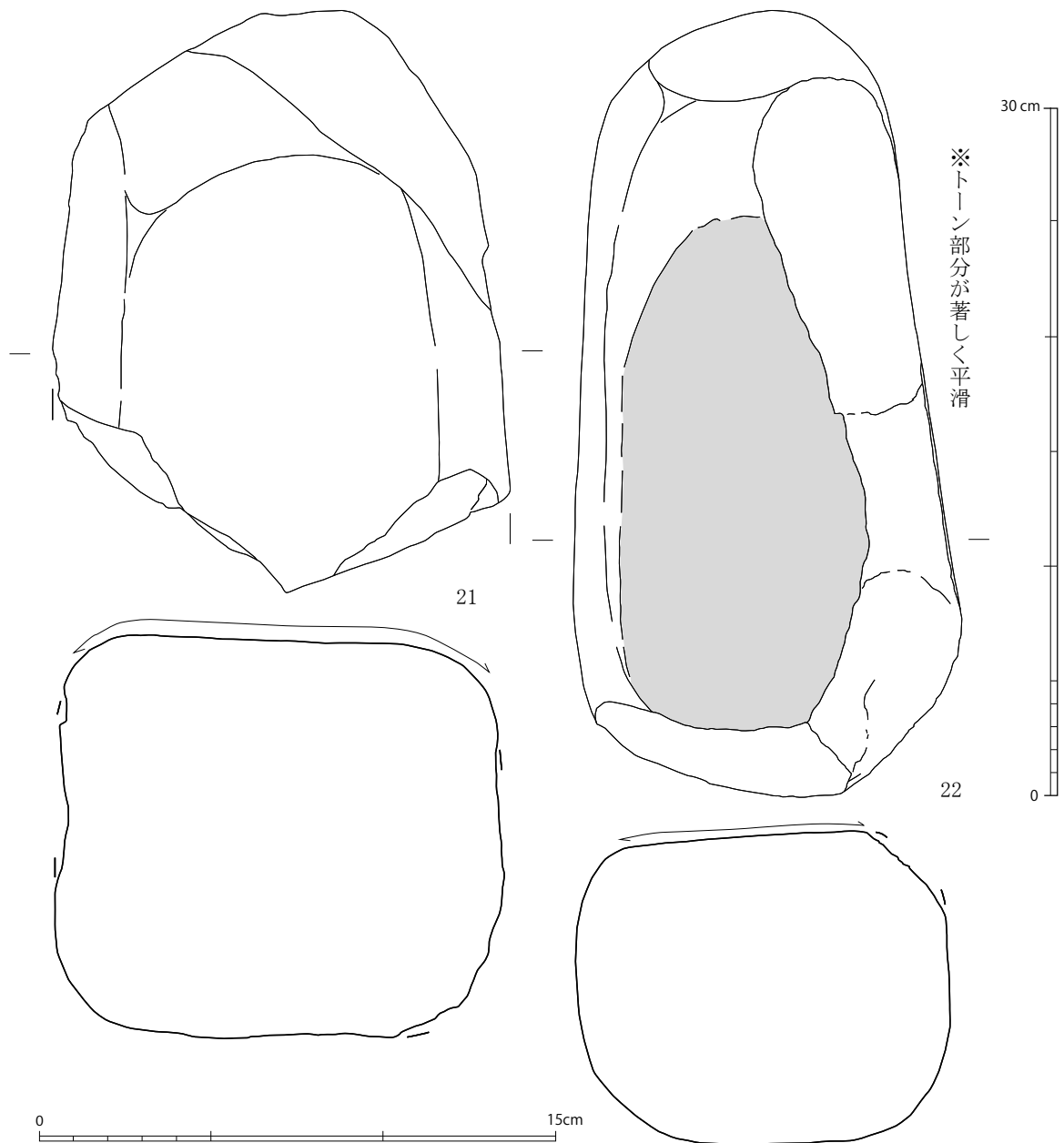
10 は 17 号竪穴住居跡出土の打製石斧で、長さ 11.5cm、幅 5.5cm、厚さ 1.8cm、重さ 190.4g で片岩性。粗割から整形の剥離がほぼ全面に残る。刃部は平滑で剥離面がなく、使用で摩耗したか、もしくは局部的に磨いたとみられる。また、全面的に摩滅気味である。

11 は北側調査区のトレンチから出土した石鍋の口縁部片で、重さ 46.8g で滑石製。表面には調整のケズリ単位が残り、端部はほぼ遺存する。破断面が平滑となる部分もあり、2 次的に再利用された可能性がある。

12 ～ 22 は砥石である。12 は第 1 面の攪乱出土で、残存長 5.8cm、幅 3.7cm、厚さ 1.8cm、厚さ 1.8cm、重さ 73.1g で砂岩製。平滑な使用面と欠損面以外の 4 面にはいずれも一定方向の粗い擦痕が残る。13 は第 2 面北東隅の包含層出土で、残存長 11.9cm、幅 7.6cm、厚さ 2.2cm、重さ 235.1g で片岩製。表裏面ともに断面で中央部が薄くなるほど使用され、側面は面取りが明瞭にされる。14 は 11 号竪穴住居跡出土で、残存長 6.6cm、残存幅 6.7cm、厚さ 1.5cm、重さ 112.1g で砂岩製。表裏面ともに使用されるが、際立った平滑面とはなっていない。残存する側面は粗く面取りされる。15 は流路跡出土で、残存長 20.7cm、幅 8.5cm、厚さ 5.0cm で砂岩製。1 面のみ使用により平滑であり、他の面は劣化が目立つ中で、面取りしたとみられる部分もある。16 は 20 号土坑出土で、残存長 14.8cm、幅 5.7cm、厚さ 6.3cm、重さ 778.1g で細粒砂岩製。縦方向に複数の面があり、面の境は明瞭な稜などではなく丸みのある断面である。複数面が使用され、特に使用が集中する範囲は、

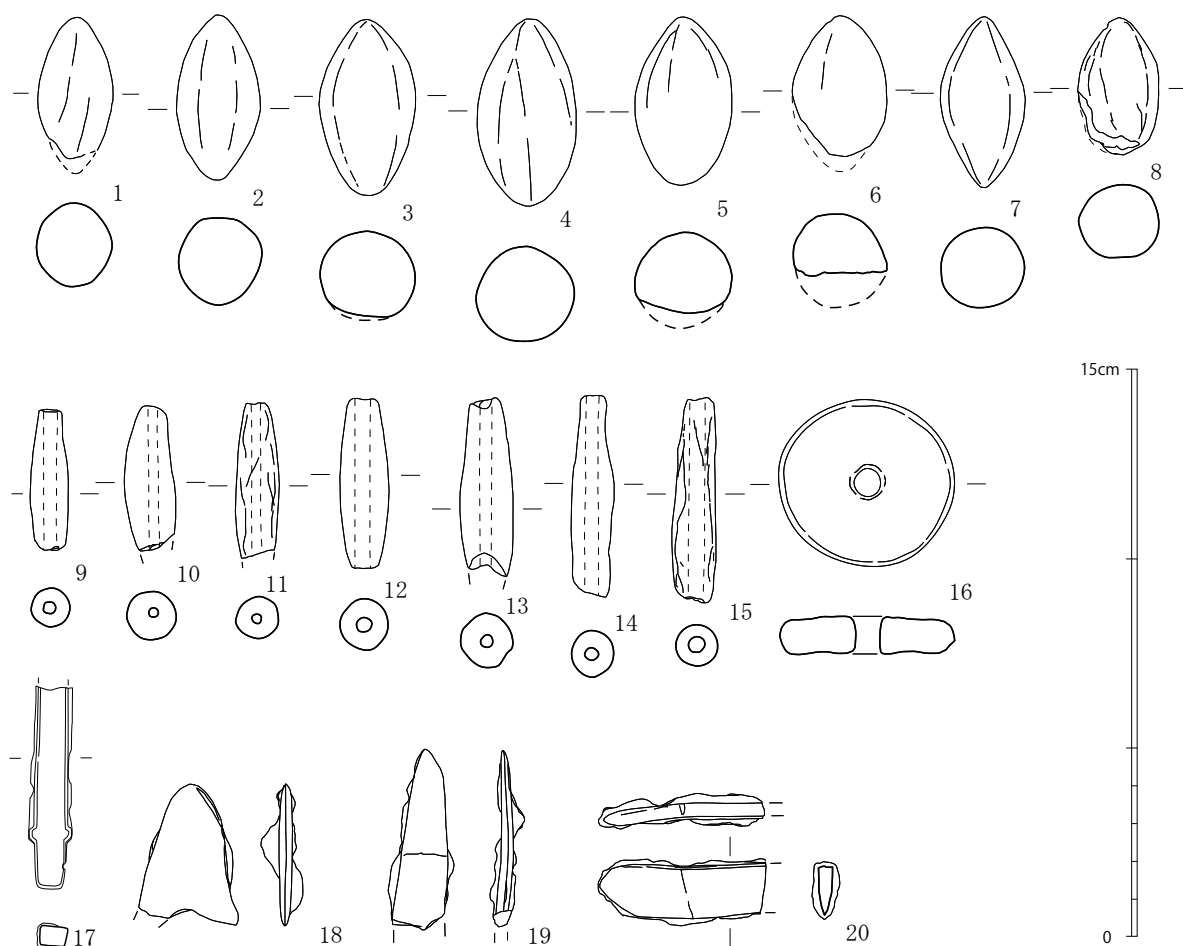


第 51 図 出土石製品実測図② (1/2)



第 52 図 出土石製品実測図③ (21 は 1/2、22 は 1/3)

該当面の中でもやや窪む。17 は第 2 面北東隅の包含層出土で、残存長 15.7cm、残存幅 5.3cm、厚さ 3.7cm、重さ 489.0g。砥面が表裏で 2 面あり、側面は面取りされる。砥面の内の 1 面は、著しい光沢を帯びる程使用される。18 は 17 号竪穴住居跡出土で、残存長 15.2cm、幅 9.7cm、厚さ 4.0cm、重さ 892.9g で粘板岩製。上面とともに側面の 1 面は、非常に平滑であるとともに使用が集中する部分が窪むため、砥面とみられる。他の側面は面取りされる。19 は 5 号溝出土で、残存長 18.6cm、幅 11.9cm、厚さ 2.0cm、重さ 655.9g で砂岩製。ある程度平滑な表裏面が砥面であるが、細かな起伏が残る程度に側面は一部面取りされる。20 は 5 号溝出土で、完形で長さ 26.2cm、幅 11.8cm、厚さ 2.5cm、重さ 1155.6g で片岩製。表裏面が砥面として使用され、片面は劣化のためかさほど平滑ではないが使用による窪みが生じる程形状が変化し、もう 1 面は平滑であるがあまり窪んでいない。側面は広い範囲で面取りされる。21 は 17 号竪穴住居跡出土で、残存長 16.9cm、幅 12.8cm、厚さ



第 53 図 出土土製品及び金属製品実測図 (1/2)

11.8cm、重さ 3.92kg で硬質の砂岩製。原形が判然としないほど大きく欠損するにもかかわらず、非常に厚みと重さがあり、下に据えて使用したと考えられる。側面は薄く剥離した欠損部があり、砥面は 1 面のみで、使用された部分は著しく平滑である。22 は 20 号土坑出土で、長さ 34.2cm、幅 16.8cm、厚さ 17.0cm、重さ 14.53kg で玄武岩製。ほぼ全体が遺存する。厚み、重さともに大きく、下に据えて使用したと考えられる。2 面で使用された範囲は、著しく平滑である。

i. 出土土製品 (図版 40、第 53 図 1 ～ 16)

1 ～ 8 は投弾である。2・4・7 は完形で、他にはある程度の欠損があり、1 は長さ 3.7cm、最大径 2.0cm、2 は長さ 4.4cm、最大径 2.5cm、3 は長さ 4.6cm、最大径 2.5cm、4 は長さ 4.9cm、最大径 2.6cm、5 は長さ 4.4cm、最大径 2.5cm、6 は長さ 3.8cm、最大径 2.5cm、7 は 4.5cm、最大径 2.2cm、8 は長さ 3.6cm、最大径 2.2cm。出土地点は、4 号竪穴住居跡 (5)、17 号竪穴住居跡 (6 ～ 8)、10 号土坑 (4)、20 号土坑 (3)、3 号溝 (1)、第 2 面の北東部包含層 (2) である。

9 ～ 15 は管状土錘である。11、13 はある程度欠損するが、他はほぼ完形で、9 は長さ 3.7cm、最大径 1.0cm、10 は長さ 3.9cm、最大径 1.3cm、11 は長さ 4.1cm、最大径 1.2cm、12 は長さ 4.5cm、最大径 1.3cm、13 は長さ 4.8cm、最大径 1.4cm、14 は長さ 5.3cm、最大径 1.1cm、15 は長さ 5.4cm、最大径 1.1cm。出土地点は、8 号竪穴住居跡 (14)、2 号溝 (13)、3 号溝 (9)、流路跡 (10・12)、

表採（11）である。

16 は第 1 面包含層の出土の紡錘車で、完形で径 4.4cm、厚さ 1.0cm、孔径 0.6cm である。

j. 出土金属製品（図版 40、第 53 図 17～20）

17～20 は鉄器である。17 は 5 号土坑出土の有頸有茎の鉄鏃で、茎部から頸部にかけて残存するが、鏃身部は欠失する。断面長方形で、基部端から 1.5cm 程度の関部で両側面に突出する棘状関である。残存長 5.4cm、幅 1.1cm、厚さ 0.7cm である。18 は 20 号土坑出土の無頸鏃で、片側の脇扶が欠失する。長さ 3.8cm、幅 3.7cm、厚さ 0.3cm である。19 は第 1 面のピット出土の鉞で、身部のみが残存する。先端から 3cm 付近の位置でわずかに屈曲する。長さ 4.7cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm である。20 は 14 号竪穴住居跡出土の刀子で、身部のみが残存する。先端から 2～2.5cm 程度の位置でわずかに屈曲する。長さ 4.4cm、幅 1.7cm、厚さ 0.7cm である。

図版 40 の 21・22 はともに 3 号溝出土の銅銭である。ともに遺存状態が非常に悪く、21 では「皇宋通宝」と確認できるが、22 では銭銘は全く確認できない。

2. 第 2 次調査

(1) 調査区概要

第 2 次調査の調査区は、新開遺跡第 1 次調査の北東側にあり、南北に延びる農道と東側へ延びる農道との合流地点に位置する。第 1 次調査と同様に、調査前は農地であった。調査区は、現地表面から 60cm ほど掘り下げた結果、弥生時代・古墳時代の住居跡を 8 軒、溝 3 条、ピットを検出した。調査は令和 3 年 10 月 11 日からバックホーによる表土剥ぎを行い、13・14・15・18 日の 4 日で遺構の掘削を終了した。その後、18・19 日で写真及び遺構図を作成し、22 日には調査区を埋め戻して終了した。なお、隣接する第 1 次調査北側調査区周辺を念のため確認したが遺構はなかった。

(2) 遺構と出土遺物

a. 竪穴住居跡

18 号竪穴住居跡（図版 28、第 55 図）

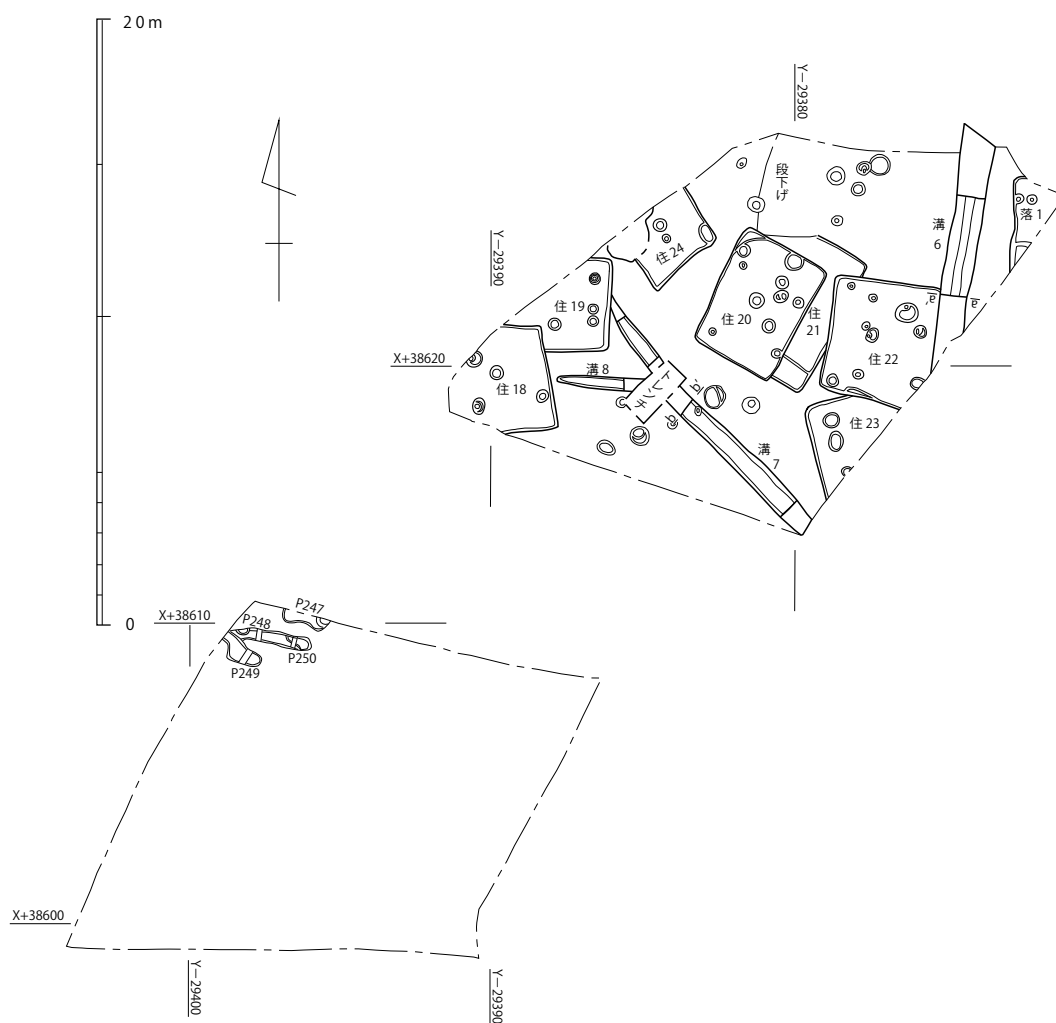
調査区南西隅で確認された。北側の 19 号竪穴住居跡を切るが、住居跡の半分は、調査区外になり検出できなかった。主軸はやや北寄りの北東－南西方向で 3.5 m を測り、西側は調査区外へ及ぶため、正確な平面形は不明であるが、主柱穴の位置関係や残存する住居壁（深さ 10cm 以下）から正方形に近い平面プランと考えられる。主柱穴は 3 基確認し、深さ 10～25cm を測る。カマドは検出できなかったが、出土した須恵器杯蓋から 8 世紀代の住居跡と思われる。

出土土器（第 58 図 1～3）

1 は弥生土器甕の口頸部片である。復元口径 29.8cm。2 と 3 は須恵器杯蓋である。2 はほぼ完形の杯蓋で、口径 21cm。3 は杯蓋のつまみ片で、つまみの中央は凹む。

19 号竪穴住居跡（図版 28、第 55 図）

調査区西側の 18 号竪穴住居跡の北側で確認された。18 号竪穴住居跡に切られるが、住居跡の西側は調査区外になり検出できなかった。主軸はやや東よりの北－南方向で 3.1 m を測り、これも西



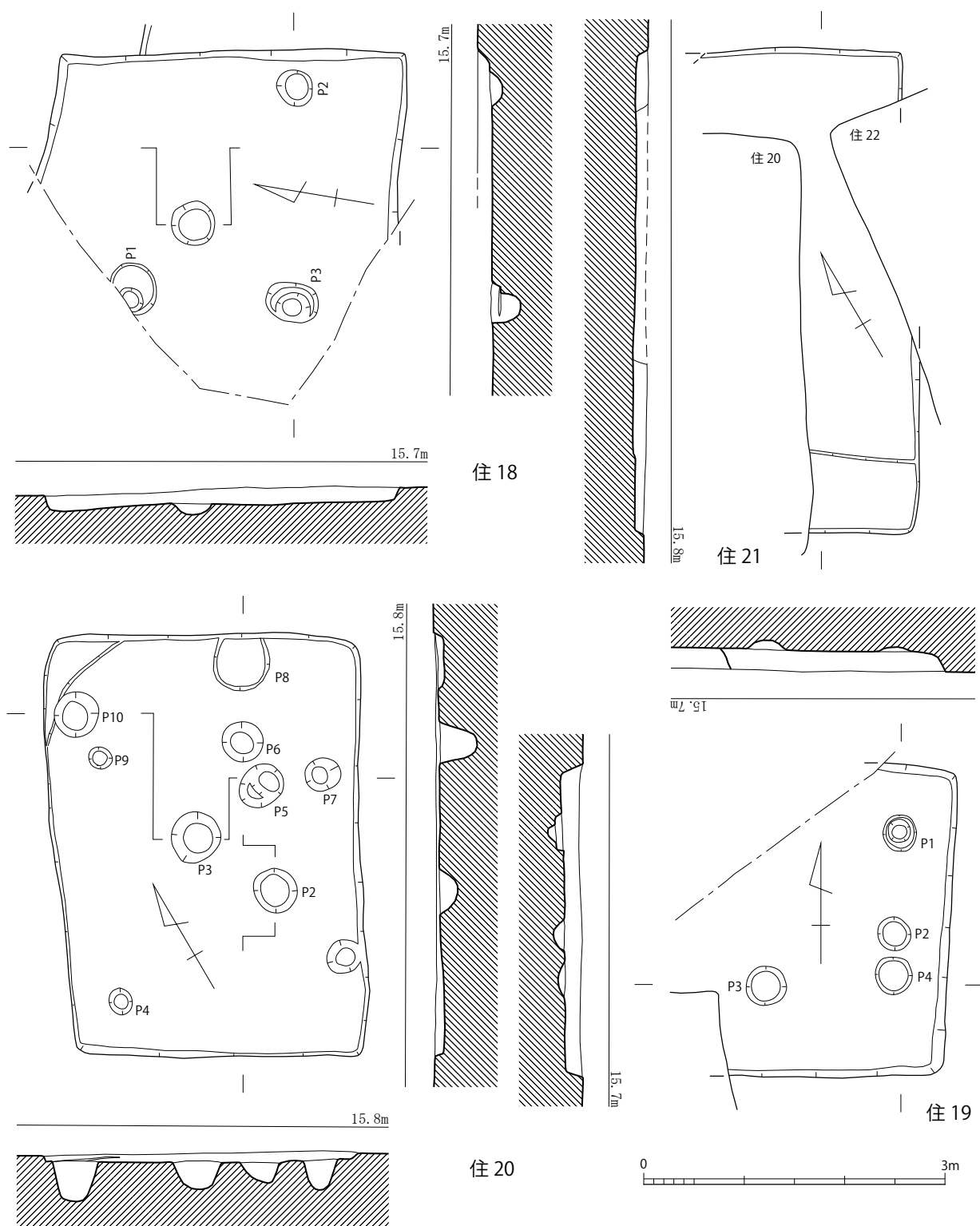
第54図 第2次調査区全体図 (1/250)

側は調査区外へ及ぶため、正確な平面形は不明であるが、主柱穴の位置関係や残存する住居壁（深さ15cm以下）から正方形に近いと考えられる。主柱穴は3基確認し、深さ10～15cmを測る。カマドは検出できなかったが、出土した須恵器片及び土師器片から7世紀中頃の住居跡と思われる。
出土土器（第58図4～8）

4は土師器の甕口頸部片で、くの字状で外側に大きく開く。5は土師器の高杯脚部片である。6と7は須恵器の杯身の口縁部片で、口縁と受部との間は狭く小さい。8は須恵器の杯又は壺などの底部片である。外面底部付近はヘラケズリを施す。

20号竪穴住居跡（図版29、第55図）

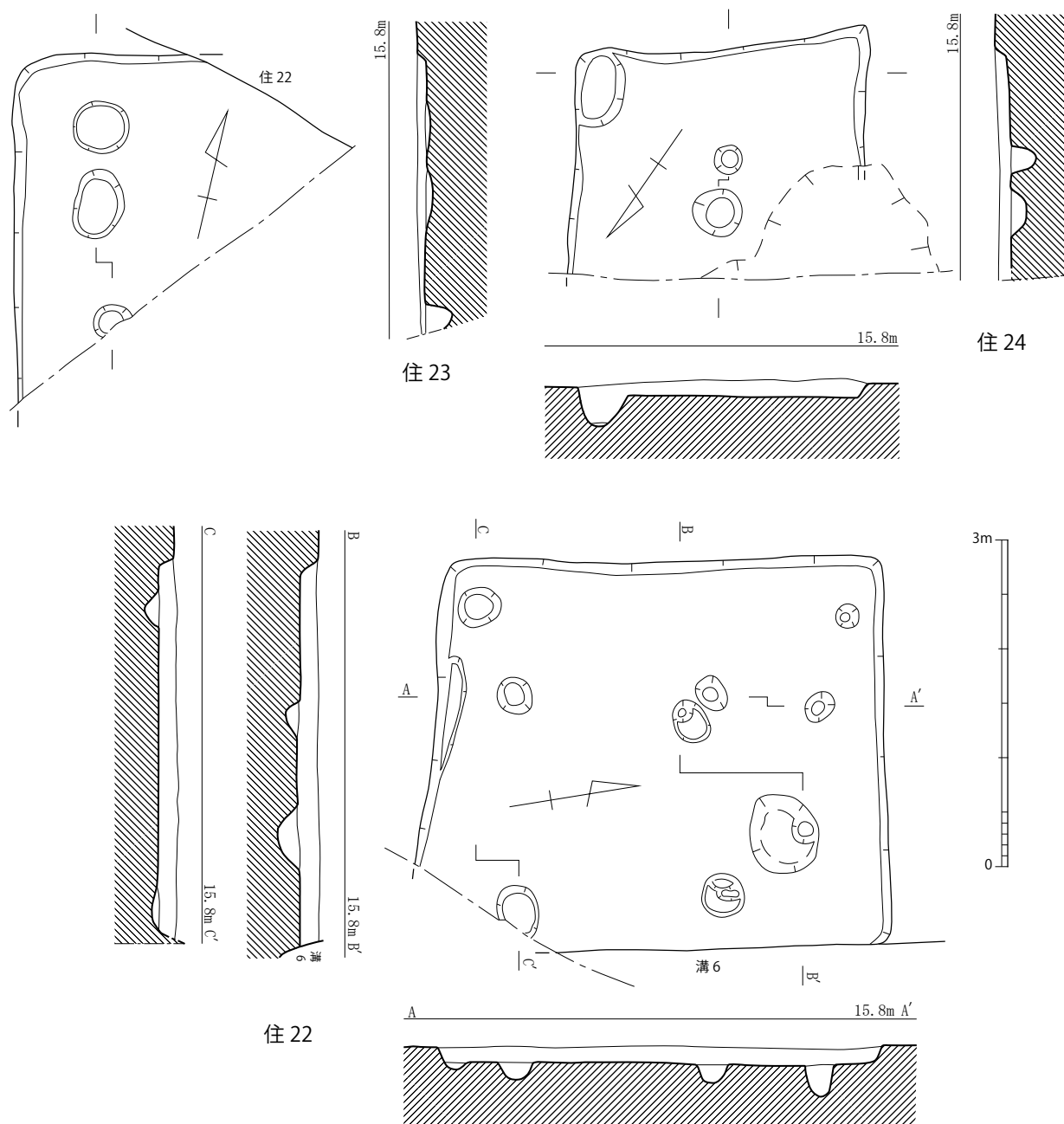
調査区中央に位置し、今回の調査で唯一完全な形で確認された住居跡である。東側にある21号竪穴住居跡を切る。主軸は北東－南西方向で4.2m、北西－南東方向で3mを測り、平面形は長方形プランになる。住居壁は深さ10cm以下と浅いが、住居内からピットを8基確認し、深さ20～40cmを測る。出土した須恵器杯の高台片から8世紀代の住居跡と思われる。



第 55 図 18 ～ 21 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (第 58 図 9 ～ 14)

9 と 10 は弥生土器の甕口縁部片で、逆 L 字状になる。11 は弥生土器の壺口縁部片で、鋤先形である。12 は弥生土器甕底部片か。底部はやや浮くが、平底状である。13 は弥生土器の支脚片である。外面は指頭圧痕が明瞭に残り、内面はシボリの痕跡がある。14 は須恵器の高台付杯片である。高台は断面方形状である。



第 56 図 22 ～ 24 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

21 号竪穴住居跡 (第 55 図)

調査区中央に位置し、20・22号竪穴住居跡に切られる形で確認された。主軸は北東－南西方向で4.8mを測り、東西を他の住居跡に切られるが、残存する住居壁（深さ15cm以下）から長方形の平面プランと考えられる。住居内の南側にはわずかに段差があり、ベット状遺構と思われる。なお、この住居跡に確実に伴う主柱穴は確認できなかったが、20号竪穴住居跡の東側壁で検出した2つの柱穴（深さ20～30cm）が、この住居跡に伴う可能性はある。出土土器から弥生時代中頃か。

出土土器 (第 58 図 15 ～ 18)

15は弥生土器壺の頸部の屈曲部分に断面三角形の突帯が1条付く。16はM字形の突帯が付く弥生土器の壺又は甕体部片か。17は弥生土器の甕又は壺底部片で、平底である。18は弥生土器の高杯脚部片である。外面は摩滅するが、内面にはシボリの痕跡が残る。

22 号竪穴住居跡（図版 29、第 56 図）

調査区東側に位置し、東側は 6 号溝で切られるが 21・23 号竪穴住居跡を切る形で確認された。主軸は南北方向で 4.2 m、北東隅を確認できるので東西方向で 3.5 m を測り、長方形の平面プランになる。住居壁は深さ 15 ～ 20cm を測り、主柱穴と思われる柱穴を複数確認し、深さ 5 ～ 30cm を測る。出土した弥生土器片から弥生時代中期頃の住居跡で、21・23 号竪穴住居跡より新しい。

出土土器（第 58 図 19 ～ 22）

19 は弥生土器の甕口縁部片である。鋤先形の口縁部で、厚さが 1 cm を越えることから大型の甕か。20 は甕の頸部～体部片か。全体的に肉厚である。21 は弥生土器の甕口頸部片である。口縁部は平坦に作られ、上から開けた穿孔がある。22 は甕又は壺の底部片で、やや浮くが平底である。

23 号竪穴住居跡（図版 30、第 56 図）

調査区南東隅付近で確認し、北側を 23 号竪穴住居跡に切られる形で確認された。主軸は南北方向で残存長 3.0 m、東西方向で残存長 3.0 m を測る。平面プランは方形又は長形状と判然としないが、住居壁は深さ 10cm 以下と浅い。主柱穴は西側に 3 基連なる形で確認されたが、南側のみ深さ 25cm と深い。出土した弥生土器片から弥生時代中期頃の住居跡と思われる。

出土土器（第 58 図 23 ～ 25）

23 は復元口径 37cm と大きい弥生土器の甕口頸部片である。口縁部は鋤先形で、頸部以下は丸みをもつ。24 は弥生土器の甕口縁部片で、くの字に近い。25 は弥生土器の高杯脚部片である。内外面は摩滅するが、外面に僅かにハケ目が残る。

24 号竪穴住居跡（図版 30、第 56 図）

調査区北西側で確認した。住居跡の北西側は調査区外になり確認できなかった。主軸は北東－南西方向で 2.7 m を測り、西側は調査区外及び攪乱を受けているので、正確な平面形は不明である。残存する住居壁は深さ 10 ～ 15cm を測る。主柱穴は中央 2 基、南東隅に 1 基確認し、深さ 15 ～ 35cm を測る。出土した弥生土器片から弥生時代中期頃の住居跡と思われる。

出土土器（第 58・59 図 26 ～ 31）

26 ～ 31 は弥生土器の甕又は鉢片である。口縁は鋤形である。29 と 30 は底部片で、29 は平底、30 は上げ底になる。31 は高杯の脚部片である。脚端部近くで、大きく外側に開く。

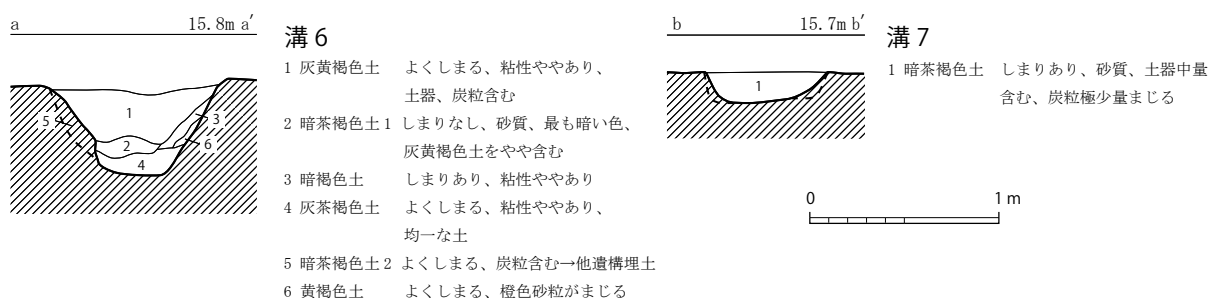
b. 落ち込み

1 号落ち込み（図版 30・第 54 図）

調査区北東隅で確認した。大部分は調査区外になり確認できなかった。当初住居跡と想定して掘削したが、最終的に住居跡とは異なると判断し、落ち込みとして扱い、図版のみ掲載する。主軸は南北方向で残存長 3.2 m、東西方向で 1.7 m を測る。深さ 10 ～ 30cm と浅く、北側に深さ 20 ～ 25cm を測るピットが伴う。南側に一段下がる。出土した須恵器杯片から 7 世紀中頃の時期と思われる。

出土土器（第 59 図 32・33）

32 は須恵器杯身片、33 は肉厚であるが須恵器甕の体部片か。



第 57 図 6・7 号溝土層実測図 (1/40)

c. 溝

6 号溝 (図版 30、第 54・57 図)

調査区東側でやや東よりに傾く南北方向の溝である。長さ 8.5 m、幅 90cm、深さ 50cm を測る。断面は逆台形状で、上層に灰黄褐色土、暗灰褐色土、暗褐色土、下層に灰茶褐色土が堆積する。

出土土器 (第 59 図 34)

34 は弥生土器の高杯片である。外面に縦方向の刷毛目を施す。

7 号溝 (図版 30、第 54・57 図)

調査区南側で北西-南東方向に延びる溝である。長さ 10 m、幅 65cm、深さ 15cm を測る。断面は逆台形状で、埋土は暗茶褐色土の 1 層のみが堆積する。

出土土器 (第 59 図 35～37)

35 と 36 は弥生土器の甕片で、35 は逆 L 字形を呈す口縁で、頸部下に断面三角形の突帯が 1 条付く。36 は体部片で、断面三角形の連続した突帯が 2 条付く。37 は弥生土器高杯脚部片で、外面は丹塗りで、ミガキが施す。脚端部径 16.6cm。

8 号溝 (第 54 図)

調査区南側に位置し、7 号溝の南側で東西方向に延びる溝である。長さ 3 m、幅 40cm、深さ 5cm を測る。断面は逆台形状になる浅い溝で、埋土は 7 号溝と同じ暗茶褐色土が堆積する。

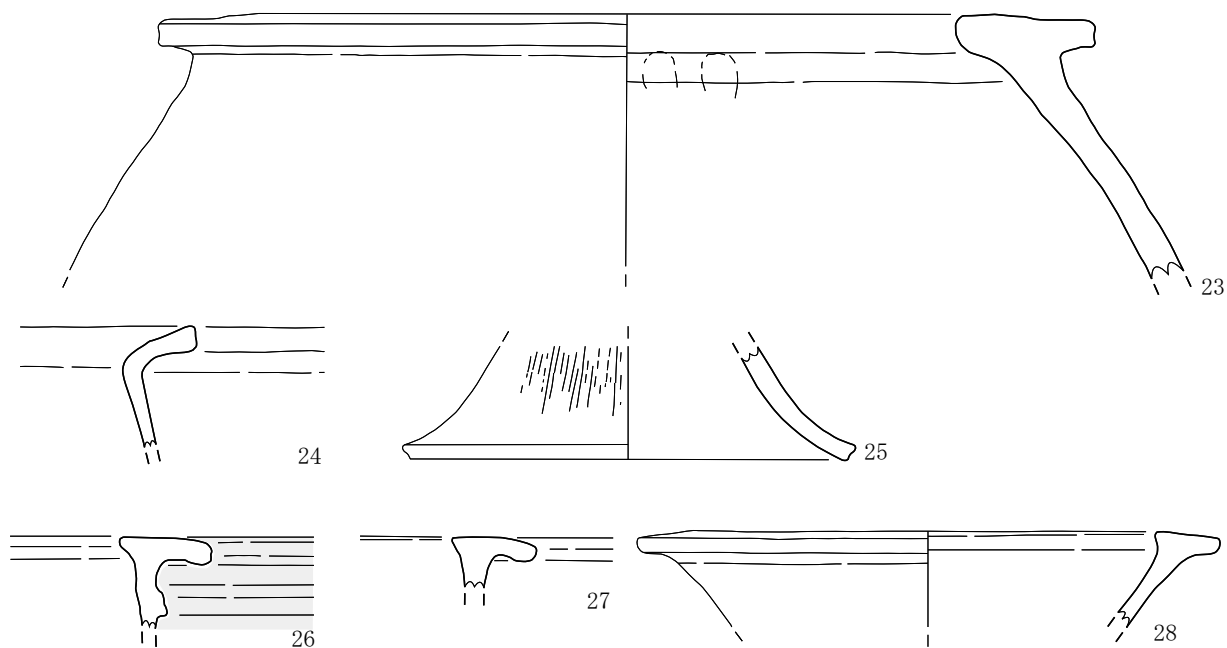
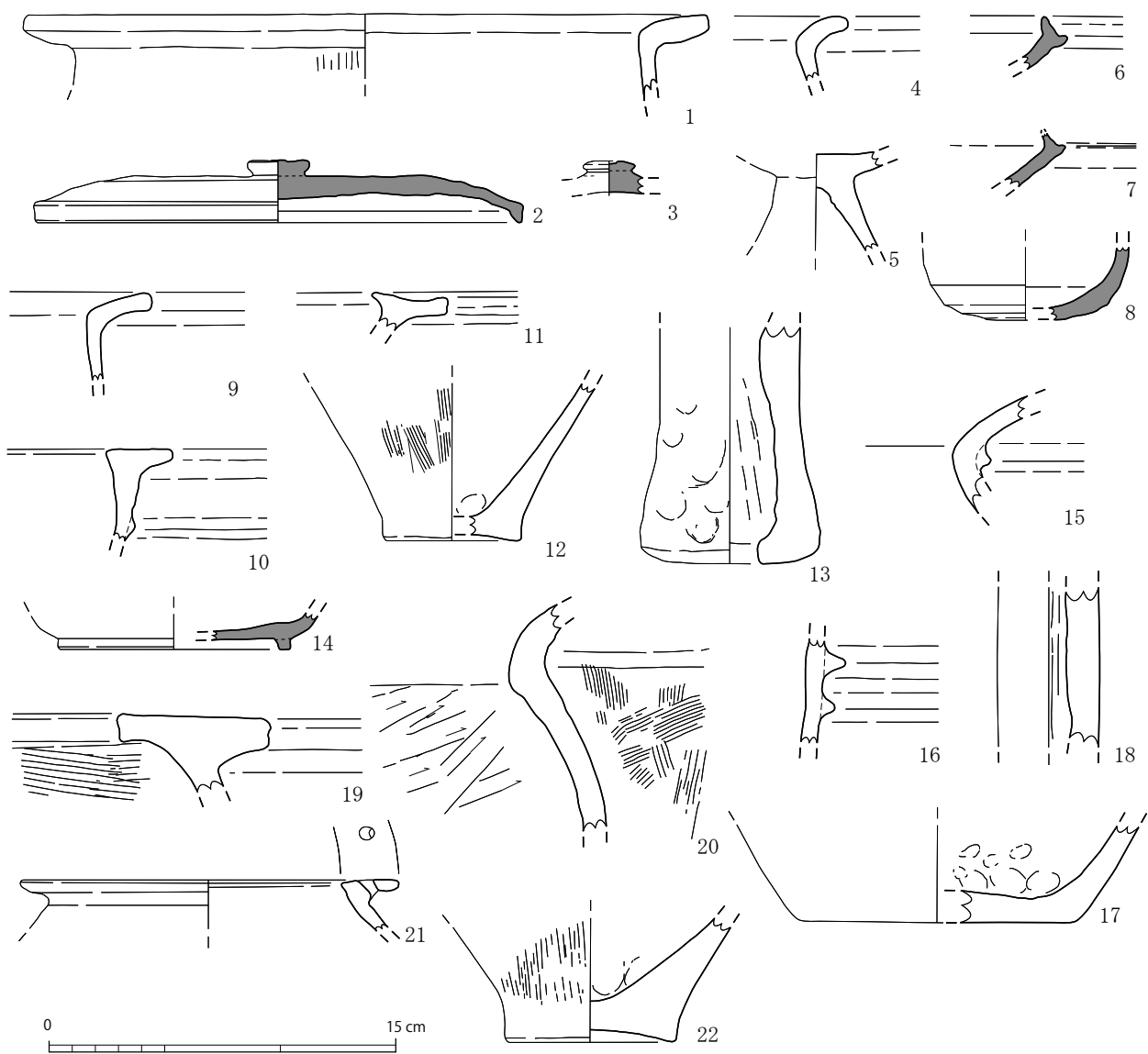
出土土器 (第 59 図 38・39)

38 と 39 は弥生土器の甕口縁部片である。口縁の形状は跳上状と逆 L 字形になる。

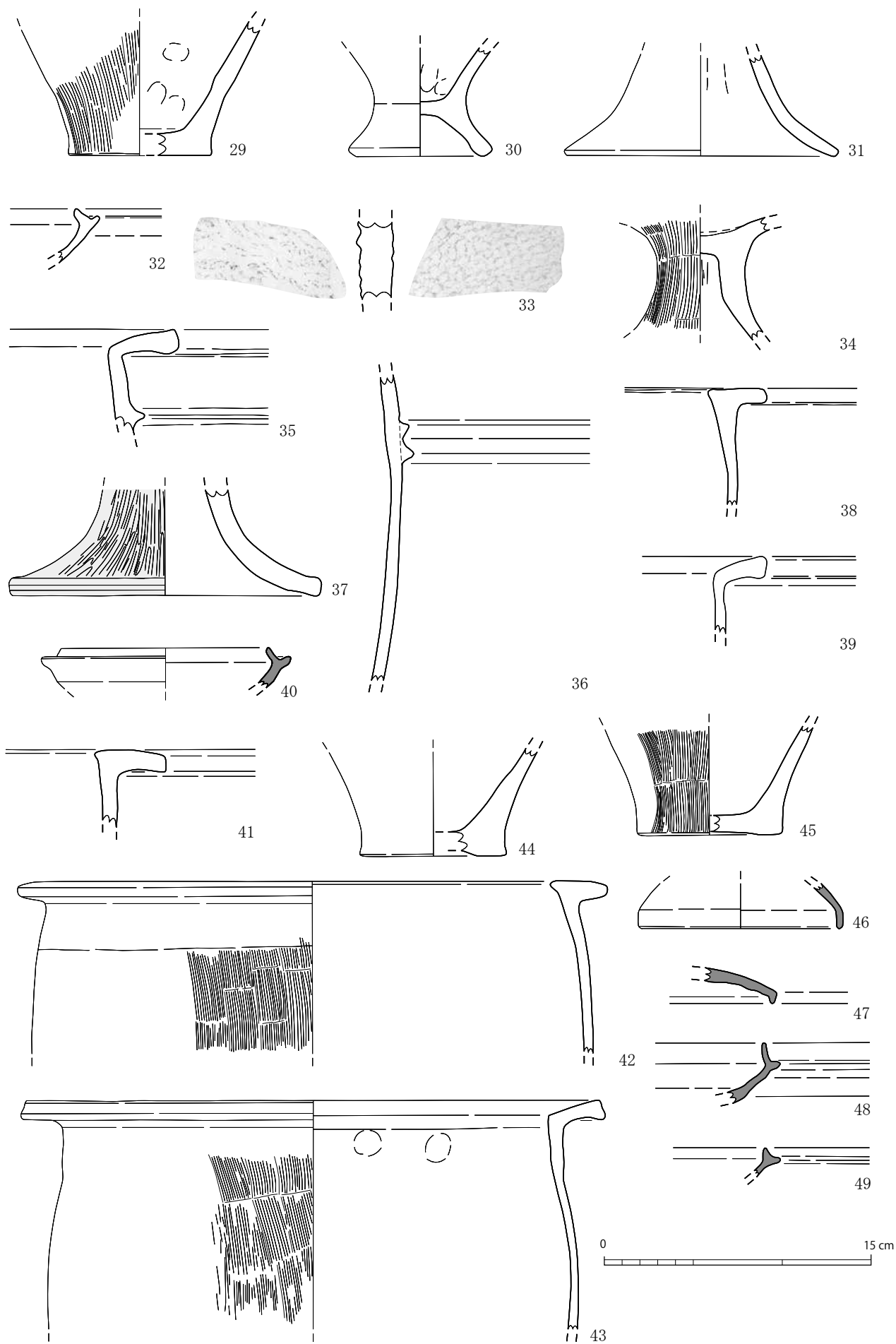
d. ピット及び遺構検出時出土土器 (第 59 図 40～49)

40 は P 6 出土の須恵器杯身である。口縁と受け部との間が狭いので、蓋の可能性はある。

41～49 は遺構検出出土である。41～45 は弥生土器である。41～43 は甕片で、口縁は 41 と 42 は逆 L 字形、43 は跳上状になる。復元口径は 42 で 33cm、43 で 32.6cm を測る。44 と 45 は甕又は壺の底部片である。復元底径は共に 8.2cm。46～49 は須恵器である。46 と 47 は杯蓋で、48 は口縁が嘴状になる。43 は壺の口縁端部片で、外面に刻み目を入れる。復元口径 28cm。48 と 49 は杯身である。50 は全体的に小さく、口縁と受部と間の差が狭いので、蓋の可能性もある。



第 58 図 第 2 次調査出土土器実測図① (1/3)



第 59 図 第 2 次調査出土土器実測図② (1/3)

IV 化学分析

新開遺跡出土種実同定業務

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

本分析調査では、新開遺跡（福岡県久留米市田主丸町豊城所在）の弥生土器包含層より採取された炭化物を含む土壌試料を対象として、水洗および炭化種実の抽出・同定を実施し、当時の植物利用および植生に関する資料を作成する。

2. 試料

試料は、第2面の北東包含層より採取された土壌1点である。土壌試料は土塊複数から成り、650cc（1045.2g）を量る。発掘調査所見によれば、第1面が古墳時代後期から古代の集落中心、第2面が弥生時代中期の集落とされ、炭化物は弥生土器がまとまって出土した包含層中に確認されている。

試料の肉眼観察の結果、炭化物は保存状態が不良で脆弱であるが、長さ4～5mmの楕円体を呈し、豆類と考えられる炭化種実が多い他、残存径1cm程度のドングリ類と考えられる炭化種実が少量混じる状況が確認された。

3. 分析方法

試料全量を分析対象とする。まず土塊1点を粒径0.25mmの篩で水洗して炭化種実の回収を試みた結果、イネ籾片などの微小種実が検出されたことから、九州歴史資料館との協議の上、以下の方法で実施する。

1) 試料を肉眼観察で確認し、土器片等の遺物を抽出後、常温乾燥させる。

2) 水を満たした容器内に乾燥後試料を入れ、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.25mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約20回）。残土を粒径0.25mmの篩を通して水洗する。

3) 水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（岩片・土粒主体）を、それぞれ粒径4.0mm、2.0mm、1.0mm、0.5mmの篩に通して常温乾燥後、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実や土器片などの遺物を抽出する。なお、多数のアズキ亜属種子が検出されたため、粒粒径2.0mmの篩を通り抜けた微細片は炭化種実片（アズキ亜属?）主体とする。

4) 炭化種実の同定は、現生標本や吉崎（1992）、小畑（2008;2011）、中山（2010）、中山ほか（2010）、那須ほか（2015）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数と重量を一覧表で示し、各分類群の写真を添付する。

表1. 土壌試料水洗・炭化種実同定結果

分類群	部位	状態	粒径	第2面 北東包含層			備考
				乾重(g)	(個)	(mm)	
木本							
コナラ属	子葉	破片	>2mm	0.30	20	8.99	
	果実(基部)	破片	>2mm	0.03	2	4.28	
	果実	破片	>2mm	0.02	6	4.32	
コナラ属?	果実?	破片	2-1mm	0.07	30	-	微細片
草本							
イネ	籾	破片	0.5-0.25mm	<0.001	4	0.51	一部灰化
アズキ亜属	種子	略完形	>2mm	0.40	15	5.34	計測対象
		略半分	>2mm	1.06	56	5.44	計測対象
		破片	>2mm	1.45	286	-	
ダイズ属?	種子?	破片	>2mm	0.10	3	6.07	計測対象
炭化種実合計				3.42	422	-	
炭化種実片(アズキ亜属?)主体		破片	2-1mm	2.02	-	-	土粒等含む
		破片	1-0.5mm	1.25	-	-	土粒等含む
		破片	0.5-0.25mm	0.30	-	-	土粒等含む
植物片主体				0.02	-	-	
岩片・土粒主体			>4mm	2.32	-	-	
			4-2mm	0.62	-	-	
			2-1mm	1.85	-	-	
			1-0.5mm	11.81	-	-	
			0.5-0.25mm	11.69	-	-	
土器片				26.45	12	41.25	
分析量				1045.2	-	-	650cc
水洗に使用した篩の粒径				-	-	0.25	

また、保存状態が良好な炭化種実の大きさをデジタルノギスで計測し、アズキ亜属の「簡易楕円体積(長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3× π)」(那須ほか,2015 など)を求めて結果を一覧表で示す。炭化種実片(アズキ亜属?)主体、岩片・土粒主体は、粒径別重量で示す。土器片は個数、重量と最大径、植物片は重量で示す。

5) 分析後は、炭化種実を分類群別に容器に入れて返却する。

4. 結果

結果を表Ⅳ-1、主な炭化種実の計測値を表Ⅳ-2に示す。

第2面北東包含層の土壌試料 650cc (1045.2g) を洗い出した結果、炭化種実 422 個 3.42 g、炭化種実片(アズキ亜属?)主体 3.58g、植物片主体 0.02g、土器片 12 個 26.45g (最大 4.1cm) が検出された。分析残渣は岩片・土粒を主体とし、28.28g を量る。なお、炭化材は確認されなかった。

炭化種実とは、栽培植物で穀類のイネの籾 4 個 0.001g 未満、栽培の可能性のある豆類のアズキ亜属の種子 357 個 2.90g、ダイズ属?の種子 3 個 0.10g、木本で堅果類(ドングリ類)のコナラ属の子葉 20 個 0.30g (最大 8.99mm)、果実 9 個 0.05g (最大 4.32mm)、コナラ属?の果実 30 個 0.07g に同定された。アズキ亜属が圧倒的に多く、炭化種実群全体の 85% を占める。

炭化種実の保存状態は概ね不良であり、イネ籾は灰化して灰白色、他は全て黒色を呈す。以下、各分類群の形態的特徴等を記す。なお、学名は佐竹ほか編(1981;1982;1989)に依拠した。

・コナラ属(*Quercus*) ブナ科 図版番号 1,2,5 ~ 8

子葉・果実は、完形ならば長さ 1.0 ~ 1.3cm、径 0.7 ~ 0.8cm の楕円体で頂部は尖り、基部は切形を呈す。

出土子葉は合わせ目に沿って割れた半分未満の破片で、残存長 0.9cm、残存幅 0.7cm、半分厚 0.5cm

表2. 主な炭化種実の計測値

分類群	部位	状態	番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	簡易楕円 体積(mm ³)	図版番号	備考
アズキ亜属	種子	略完形	1	4.79	3.67	3.68	0.04	33.86	10	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	2	4.48	3.18	3.36	0.03	25.05	11	臍一部残存
アズキ亜属	種子	略完形	3	4.93	3.86	3.87	0.03	38.54	12	臍一部残存
アズキ亜属	種子	略完形	4	4.49	3.36 +	2.78 +	0.02	21.95 +	-	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	5	5.13	3.53	3.81	0.03	36.11	16,17	分析中半割
アズキ亜属	種子	略完形	6	5.34	3.84	4.27	0.04	45.82	14	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	7	4.41	3.53	3.72	0.03	30.31	13	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	8	4.82	2.36 +	3.20	0.02	19.05 +	-	臍欠損,背面欠損
アズキ亜属	種子	略完形	9	4.69 +	3.31	2.84 +	0.02	23.07 +	-	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	10	4.13 +	2.69	2.49 +	0.02	14.48 +	-	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	11	3.92 +	2.63	3.00	0.02	16.19 +	-	臍欠損,基部欠損
アズキ亜属	種子	略完形	12	3.71 +	2.51 +	2.74	0.02	13.35 +	-	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	13	4.13 +	3.37 +	3.23	0.02	23.53 +	-	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	14	4.38 +	2.59 +	3.15	0.02	18.70 +	-	臍欠損
アズキ亜属	種子	略完形	15	3.99	2.87 +	3.05	0.02	18.28 +	20,21	分析中半割
アズキ亜属	種子	略半分	1	5.01	3.74	2.25 +	0.03	44.13	18	初生葉残存
アズキ亜属	種子	略半分	2	4.62	2.92	1.83 +	0.02	25.84	-	
アズキ亜属	種子	略半分	3	4.83 +	3.45	1.87 +	0.02	32.61 +	19	
アズキ亜属	種子	略半分	4	4.71	3.12	1.92 +	0.02	29.53	-	
アズキ亜属	種子	略半分	5	4.38	3.07	1.83 +	0.02	25.76	-	
アズキ亜属	種子	略半分	6	5.14	3.66	2.17 +	0.02	42.73	-	
アズキ亜属	種子	略半分	7	5.75	3.34	1.99 +	0.03	40.00	-	
アズキ亜属	種子	略半分	8	4.69	3.11	1.63 +	0.02	24.88	-	
アズキ亜属	種子	略半分	9	5.44	3.63	2.27 +	0.03	46.92	15	
アズキ亜属	種子	略半分	10	5.26	3.77	2.17 +	0.02	45.04	-	
アズキ亜属	種子	略半分	11	4.55 +	3.02	1.99 +	0.02	28.62 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	12	4.86	4.02	2.20 +	0.02	44.99	-	
アズキ亜属	種子	略半分	13	5.57	3.57	2.01 +	0.03	41.83	-	
アズキ亜属	種子	略半分	14	4.16	3.17	1.62 +	0.02	22.36	-	
アズキ亜属	種子	略半分	15	3.66	2.98	1.47 +	0.03	16.78	-	
アズキ亜属	種子	略半分	16	4.08	2.65	1.50 +	0.02	16.97	-	
アズキ亜属	種子	略半分	17	4.09	3.40	1.80 +	0.02	26.20	-	
アズキ亜属	種子	略半分	18	4.56	3.12	1.52 +	0.02	22.63	-	
アズキ亜属	種子	略半分	19	4.23 +	3.58	1.97 +	0.02	31.22 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	20	4.24 +	3.08	1.63 +	0.02	22.28 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	21	4.29	2.73 +	1.49 +	0.02	18.26 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	22	4.05 +	3.37	1.83 +	0.02	26.14 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	23	4.25 +	3.10	1.51 +	0.02	20.82 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	24	4.77	3.13 +	1.73 +	0.02	27.03 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	25	4.39	3.10	1.66 +	0.01	23.65	-	
アズキ亜属	種子	略半分	26	5.49	3.42	1.95 +	0.02	38.32	-	
アズキ亜属	種子	略半分	27	4.17	2.77	1.27 +	0.02	15.35	-	
アズキ亜属	種子	略半分	28	4.12	3.03	2.03 +	0.02	26.52	-	
アズキ亜属	種子	略半分	29	5.52	3.54	2.03 +	0.02	41.52	-	
アズキ亜属	種子	略半分	30	4.47	2.52	1.82 +	0.02	21.46	-	
アズキ亜属	種子	略半分	31	3.81 +	2.80	1.46 +	0.02	16.30 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	32	4.49	3.22	1.47 +	0.02	22.24	-	
アズキ亜属	種子	略半分	33	4.51	2.96	1.90 +	0.02	26.55	-	
アズキ亜属	種子	略半分	34	4.24	2.62	1.33 +	0.02	15.46	-	
アズキ亜属	種子	略半分	35	3.57	2.62	1.52 +	0.01	14.88	-	
アズキ亜属	種子	略半分	36	4.12	3.36	1.80 +	0.02	26.08	-	
アズキ亜属	種子	略半分	37	3.66 +	2.79	1.76 +	0.01	18.81 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	38	3.54 +	2.58	1.24 +	0.01	11.85 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	39	3.65	3.05	1.45 +	0.02	16.90	-	
アズキ亜属	種子	略半分	40	3.75	2.52	1.48 +	0.01	14.64	-	
アズキ亜属	種子	略半分	41	5.23 +	2.93 +	1.89 +	0.02	30.31 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	42	4.38	3.11	1.74 +	0.01	24.81	-	
アズキ亜属	種子	略半分	43	3.89	2.47 +	1.58 +	0.01	15.89	-	
アズキ亜属	種子	略半分	44	4.22	2.56	1.44 +	0.02	16.28	-	
アズキ亜属	種子	略半分	45	3.43	2.53	1.38 +	0.02	12.53	-	
アズキ亜属	種子	略半分	46	4.43 +	3.53	2.32 +	0.02	37.97 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	47	5.29 +	3.09 +	1.99 +	0.02	34.05 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	48	2.88 +	2.27	0.97 +	0.01	6.64 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	49	3.59 +	2.73 +	1.20 +	0.02	12.31 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	50	2.71 +	2.87 +	1.57 +	0.02	12.78 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	51	2.76 +	2.66	1.40 +	0.02	10.76 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	52	4.31 +	3.05 +	1.87 +	0.02	25.73 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	53	4.03 +	3.00 +	1.30 +	0.02	16.45 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	54	4.47 +	3.26 +	1.66 +	0.02	25.32 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	55	3.89 +	2.84 +	1.78 +	0.01	20.58 +	-	
アズキ亜属	種子	略半分	56	4.91 +	3.09 +	2.10 +	0.02	33.35 +	-	
アズキ亜属	種子	欠損なし	最小	3.43	2.27	2.74	-	12.53	-	
			最大	5.75	4.02	4.27	-	46.92	-	
			平均	4.54	3.14	3.42	-	28.51	-	
			標準偏差	0.58	0.42	0.44	-	10.64	-	
			標本数	44	53	53	-	53	-	
ダイズ属?	種子?	破片	1	6.07 +	4.54 +	3.69 +	0.06	-	4(右)	分析中破損,端部
ダイズ属?	種子?	破片	2	4.17 +	4.7 +	2.63 +	0.02	-	4(左),22	端部
ダイズ属?	種子?	破片	3	4.83 +	3.04 +	2.61 +	0.02	-	4(上),23	

注)計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「+」で示す。

注)簡易楕円体積:長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3×π(那須ほか,2015)。

程度（図版番号 5）。頂部は尖り、長径 1.5mm 程度の孔（主根）がある。表面には維管束の圧痕の浅い縦溝がみられ、半断面は平滑で正中線上がやや窪む（図版番号 6）。

出土子葉は、大型で球状を呈すコナラ亜属クヌギ節（*Q. subgen. Quercus sect. Cerris*）とは区別され、コナラ（*Q. serrata Thunb. ex Murray*）やイチイガシ（*Q. gilva Blume*）を含むアカガシ亜属に由来すると考えられる。ただし、著しい異形性や離れにくさ等のイチイガシの特異性（岡本, 1979）を顕著に示す子葉が確認されないため、コナラ属までの同定にとどめている。

出土果実は破片で、残存径 4.3mm 程度（図版番号 7, 8）。基部は切形で、果皮とは別組織の着点がある。着点は残存径 4.3mm の円形を呈し、表面は粗面で維管束の穴が輪状に並ぶ（図版番号 7）。果皮は厚さ 0.2mm 程度で、表面には浅く微細な溝が縦列し、断面は柵状を呈す（図版番号 8）。

・イネ（*Oryza sativa L.*）イネ科イネ属 図版番号 9

粳（内外穎）は、完形ならば長さ 6～7.5mm、幅 3～4mm、厚さ 2～3mm のやや偏平な長楕円体で、基部に径 1mm 程度の斜切状円柱形の果実序柄（小穂軸）と 1 対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稻粳を構成する。果皮表面には微細な顆粒状突起が縦列する。出土粳は破片で、残存長 0.5mm 程度。

・アズキ亜属（*Vigna subgen. Ceratotropics (Piper) Verdc.*）マメ科ササゲ属 図版番号 3, 10～21

種子はやや非対称な直方体状楕円体。一部の腹面正中線の子葉合わせ目上に残る臍は、残存長 2mm、幅 1mm 程度の長楕円形「厚膜タイプ」（小畑, 2008; 2011）である（図版番号 11a, 12a）。臍に隣接する幼根は突出しない。臍欠損種子には、臍下の断面 V 字の溝が底面まで延びる「アズキ型種子」（小畑, 2008）の特徴がみられる（図版番号 11a, 12a）。種皮は薄く表面は平滑。子葉半断面には胚軸跡の溝が確認され（図版番号 15b～21b）、一部北大基準（吉崎, 1992）の「アズキグループ（幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる）」に該当する初生葉が確認される（図版番号 19b, 21b）。

略完形 15 個、略半分 56 個、計 71 個の出土種子の計測値のうち、長さの欠損がない 44 個は最小 3.4～最大 5.8（平均 $4.5 \pm$ 標準偏差 0.6）mm、幅の欠損がない 53 個は 2.3～4.0（平均 3.1 ± 0.4 ）mm、厚さの欠損がない 12 個は 2.7～4.3（平均 3.4 ± 0.4 ）mm である（表 2）。現在の野生種の最大長 7mm（那須, 2018）より長い種子は認められない。

また、長さ・幅ともに欠損がない 38 個の「簡易楕円体積（長さ/2 × 幅/2 × 厚さ/2 × $4/3 \times \pi$ ）」（那須ほか, 2015 など）は、12.5～46.9（平均 28.5 ± 10.6 ）mm³ である。サイズ範囲（那須ほか, 2015）は、「野生型（30mm³ 以下）」が 29 個、野生型と「栽培型（60～70mm³ 以上）」のサイズが重なる「中間型」が 9 個となり、野生型が多い。

・ダイズ属（*Glycine max (L.) Merr. subsp. max (L.) Merr.*）？ マメ科ダイズ属 図版番号 4, 22, 23

種子は完形ならばアズキ亜属よりも偏平な楕円体を呈す。出土種子？の最大片は約 1/3 片で、残存長 6.1mm、残存幅 4.5mm、残存厚 3.7mm 程度。腹面の臍は確認されないが、隣接する幼根の突出部が確認される。アズキ亜属種子より保存状態が不良で変形しており、焼き膨れて発泡している。

5. 考察

土壌試料水洗・炭化種実同定の結果、新開遺跡の弥生時代中期とされる第 2 面北東包含層より、栽培植物のイネ、栽培の可能性のあるアズキ亜属、ダイズ属？、ドングリ類のコナラ属の炭化種実

が確認され、アズキ亜属が圧倒的に多い組成を示した。穀類のイネ、豆類のアズキ亜属、ダイズ属(?)は、近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆される。

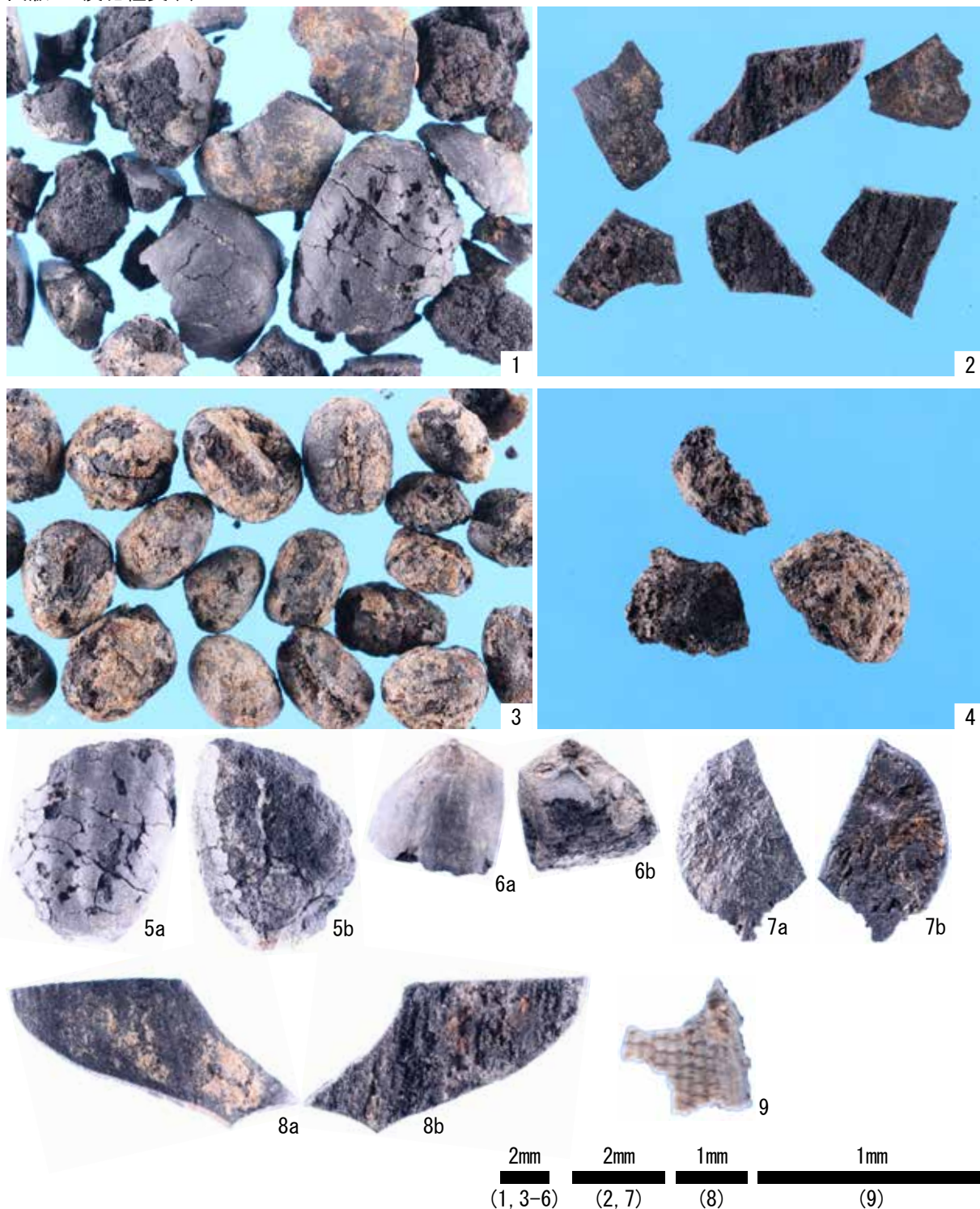
特に、最も多く確認されたアズキ亜属や、少数伴うダイズ属(?)は、近年の土器圧痕調査や炭化種実の研究で、縄文時代以降の栽培やサイズの大型化が検討されている(中山,2010; 西本ほか,2012; 那須ほか,2015;2018;2019等)。今回確認されたアズキ亜属の炭化種子サイズは、現在の野生種ヤブツルアズキ(*V. angularis* var. *nipponensis*)の最大長7mm(那須,2018)を超える長さは認められず、サイズ範囲(那須ほか,2015)も野生型を主体とし、野生型と栽培型のサイズが重なる中間型を含むことが確認された。

栽培植物や栽培の可能性を除いた分類群は、ドングリ類のコナラ属は、出土子葉の形状からコナラまたはイチイガシを含むアカガシ亜属に由来すると考えられ、九州の出土ドングリで圧倒的に多いイチイガシ(渡辺,1975; 岡本,1979; 小畑,2006;2011)の可能性が指摘される。コナラ属は、果実内部の子葉が食用可能で収量も多く、長期保存が可能な有用植物である。遺跡周辺の森林(照葉樹林)から持ち込まれ、イネやアズキ亜属、ダイズ属(?)とともに利用された植物質食料と考えられる。これらの炭化種実には火を受けたとみなされるが、その場で火を受けたのか、別の場所で火を受け炭化した食糧残滓が持ち込まれたのかについては、分析段階で判断することはできないため、共伴する弥生土器等の発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。

引用文献

- 中山誠二,2010,縄文時代のアズキ亜属に関する基礎的研究. 東海史学,第44号,83-103.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.
- 那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・輿石 甫,2015,炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用. 資源環境と人類,第5号,明治大学黒耀石研究センター,37-52.
- 那須浩郎,2018,縄文時代の植物のドメスティケーション. 第四紀研究,57,109-126.
- 那須浩郎,2019,植物利用の変遷. 日本考古学協会 2019年度岡山大会研究発表資料集,41-46.
- 西本豊弘・住田雅和・竜子正彦・高橋 潔・近藤奈央・吉崎 伸,2012,縄文時代のアズキについてー京都市上里遺跡出土のアズキ類の検討ー. 動物考古学,第29号,45-53.
- 小畑弘己,2006,九州縄文時代の堅果類とその利用ー東北アジアの古民族植物学的視点よりー. 九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物,第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・資料集成,31-40.
- 小畑弘己,2008,マメ科種子同定法. 「極東先史古代の雑穀3」,日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書,小畑弘己編,熊本大学埋蔵文化財調査室,225-252.
- 小畑弘己,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 同成社,309p.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編,1989,日本の野生植物 木本Ⅰ. 平凡社,321p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫,1982,日本の野生植物 草本Ⅰ 単子葉類. 平凡社,305p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫,1982,日本の野生植物 草本Ⅱ 離弁花類. 平凡社,318p.
- 吉崎昌一,1992,古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル, No.355,2-14.
- 渡辺 誠,1975,縄文時代の植物食. 雄山閣出版,187p.

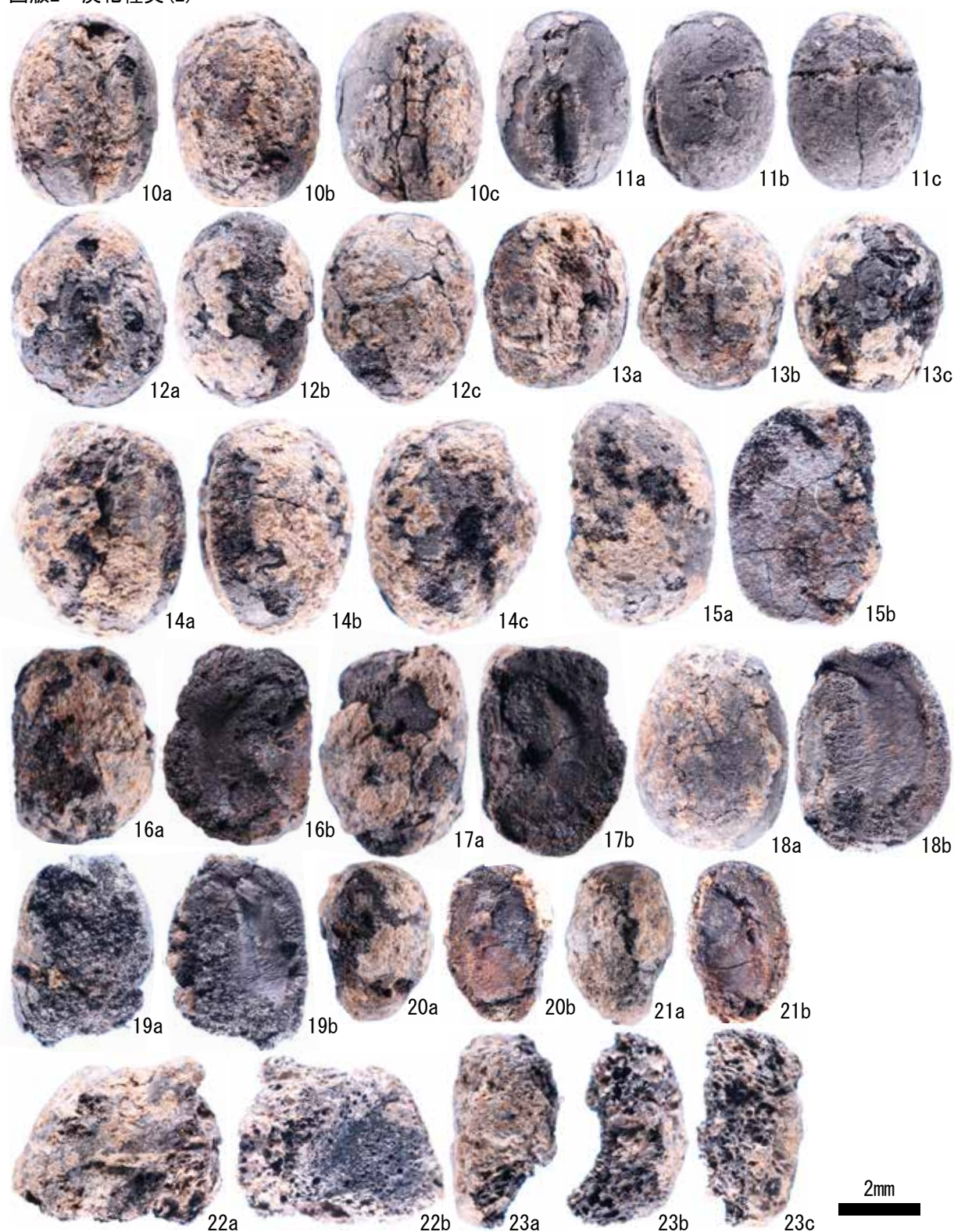
図版1 炭化種実(1)



1. コナラ属 子葉(第2面:北東包含層)
3. アズキ垂属 種子(第2面:北東包含層)
5. コナラ属 子葉(第2面:北東包含層)
7. コナラ属 果実(基部)(第2面:北東包含層)
9. イネ 粃(第2面:北東包含層)

2. コナラ属 果実(第2面:北東包含層)
4. ダイズ属? 種子?(第2面:北東包含層)
6. コナラ属 子葉(頂部)(第2面:北東包含層)
8. コナラ属 果実(第2面:北東包含層)

図版2 炭化種実(2)



10. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 12. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 14. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 16. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 18. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 20. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 22. ダイズ属? 種子?(第2面:北東包含層)

11. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 13. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 15. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 17. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 19. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 21. アズキ亜属 種子(第2面:北東包含層)
 23. ダイズ属? 種子?(第2面:北東包含層)

V まとめ

〔遺跡の時代・時期〕

2 次にあたる新開遺跡の調査成果で、遺跡は弥生時代中期と古墳時代後期から古代にあたる大きく 2 時期に分かれることが確認された。第 1 次調査では 2 面の調査面でその時期が明瞭に分かれるのに対し、第 2 次調査では同一の調査面で両時期の遺構が確認された。

弥生時代中期の主な遺構は、第 1 次調査第 2 面の 17 号住居跡、7～24 号土坑、5 号溝と第 2 次調査の 21～24 号竪穴住居跡、6～8 号溝である。ピットや包含層出土の土器を含めてもそれらの時期は、弥生時代中期の中頃～後半の非常に限られたものとなっている。その中で、16・18・20 号土坑がやや古い傾向にあると言える。なお、5 号溝の井戸としての利用の可能性に注目できる。

古墳時代から古代では、第 1 次調査第 1 面の 16 棟の竪穴住居跡には、カマドを伴いつつも出土遺物が弥生土器に限られるものも少なからずあり、時期を判断できる遺構を整理すると以下になる。

【6 世紀前半】 12 号竪穴住居跡 【6 世紀後半】 8 号竪穴住居跡

【6 世紀末～7 世紀初頭】 7・9・10・13～15 号竪穴住居跡、2～4 号土坑

【7 世紀中頃】 19 号竪穴住居跡 5 号土坑 4 号溝 【8 世紀】 18・20 号竪穴住居跡

このように、8 世紀までの集落の継続性が認められ、それ以降に連続する遺物は基本的に包含層等を含めてほとんど出土していない。ただ、1～3 号溝と流路跡は上記の遺構群とは明らかに様相が異なり、他の遺構を切り、埋土が灰褐色系主体で、出土遺物中で僅かながら 2 号溝・流路跡で黒色土器、3 号溝では皇宋通寶（1038～1040 に北宋で铸造）が出土した。1 号溝からの出土土器はないものの、埋土、方向軸から、これらの遺構の相関性が高いと想定され、11 世紀以降の埋没と考えられる。なお、特に流路跡は、土層の複雑な切り合い関係から一定期間の存続幅が見込まれる。

〔竪穴住居跡・カマド〕

古墳時代から古代にかけての竪穴住居跡は全て方形で、付設するカマドは第 1 次調査でのみ確認された。今回の調査で確認された中で最も古い時期の 12 号竪穴住居跡は、他の住居跡に比して明らかに大型で支柱穴は 4 基以上となる可能性がある。またこの住居のカマドは、他の住居のカマドの燃焼部もしくは構築土の一部が住居の壁より外側に突出するのに対し、煙道のみが外側へ延びる構造である。今回の調査で確認したカマドのほとんどは、住居跡の北側の壁に中央部に付設されている。例外は、1 号の南壁中央、4 号の西壁中央、6 号の南東隅であり、4 号では燃焼部の奥が深くなる特異なものである。

〔地形的変遷〕

第 2 次調査区では、弥生時代とそれ以降の遺構検出面がともに標高 15.5～15.6 m 前後で遺構面はそれよりも 20cm 程度高いと想定される。それに対し、基本土層による第 1 次調査区の第 1 面の遺構面は標高 15.9～16 m 前後、第 2 面は 15.4～15.6 m 前後である。弥生時代中期には第 2 次調査区の方が標高がやや高いのに対し、古墳時代以降では第 1 次調査区がやや高い傾向にある。第 1 次調査の北側調査区の基本土層では、標高 15.6 m から更に深い谷部への流れ込みが見られる。この谷部は、第 1 次調査第 2 面の北から東にかけて落ちる谷と一体と考えられ、第 1 次北側調査区でほぼ遺構が確認できないのは、地形的に低い状況であり続けたとみられる。一方で、弥生時代には谷部であったのが、ある程度の埋没後に利用されたのが、1～6・10 号竪穴住居跡の範囲である。

図 版

1 調査区遠景（東上空から）

※左最奥は耳納山系西端の高良山



2 調査区遠景
（南東上空から）

※中央最奥は三郡山系



3 調査区遠景（北上空から）





1 第1次調査区
第1面全景
(上空から・上が北)



2 第1次調査区
第2面全景
(上空から・上が北)

1 第1次調査区東壁
基本土層（西から）



2 第1次調査区西壁
基本土層（東から）



3 第1次調査北側調査区
全景（南から）



4 第1次調査北側調査区
基本土層（北から）





1 1号竪穴住居跡
(北から)



2 1号竪穴住居跡
カマド (北から)



3 2号竪穴住居跡
(南から)

1 2号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 3号竪穴住居跡（南から）



3 3号竪穴住居跡
カマド（南から）





1 4号竪穴住居跡
(東から)



2 4号竪穴住居跡
カマド (東から)



3 5号竪穴住居跡
(東から)

1 6号竪穴住居跡
遺物出土状況（東から）



2 6号竪穴住居跡（北から）



3 6号竪穴住居跡
カマド（南から）





1 7号竪穴住居跡
(南から)



2 7号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 8号竪穴住居跡
(南から)

1 8号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 9号竪穴住居跡（南から）



3 9号竪穴住居跡
カマド（南から）





1 10号竪穴住居跡
(北西から)



2 11号竪穴住居跡
(南から)



3 11号竪穴住居跡
カマド (南から)

1 12号竪穴住居跡（南から）



2 12号竪穴住居跡
カマド（南から）



3 13号竪穴住居跡（南から）





1 14号竪穴住居跡
(南から)



2 15号竪穴住居跡
(東から)



3 16号竪穴住居跡
(西から)



1 17号竪穴住居跡（西から）



2 17号竪穴住居跡炉跡
（西から）



3 17号竪穴住居跡
南側屋内土坑（西から）



1 1号土坑（西から）



2 2号土坑（西から）



3 3・4号土坑
（南から）

1 5号土坑（西から）



2 5号土坑土層（北から）



3 6号土坑（北から）





1 7号土坑（西から）



2 8号土坑（北から）



3 9号土坑（北から）

1 10号土坑（北から）



2 11号土坑（北から）



3 12号土坑（西から）





1 13号土坑（北から）



2 14号土坑（北から）



3 15号土坑土層（北から）

1 16号土坑（西から）



2 17号土坑（北から）



3 18号土坑（東から）





1 19号土坑（北から）



2 19・20号土坑（北から）



3 21号土坑（南から）

1 22号土坑（東から）



2 23号土坑（東から）



3 24号土坑（東から）





1 1号溝（南から）



2 1号溝土層 [a-a']
（東から）



3 1号溝土層 [b-b']
（東から）



4 1号溝東端部土層
（西から）

1 2号溝（南西から）



2 2号溝土層 [c-c']
（北から）



3 2号溝土層 [d-d']
（北から）



4 2号溝土層 [e-e']
（北から）





1 3号溝（南西から）



2 3号溝土層 [f-f']
（北から）



3 3号溝土層 [g-g']
（北から）



4 3号溝土層 [h-h']
（北から）



1 3号溝（東から）



1 4号溝（南から）



3 4号溝土層 [i-i']
（西から）



1 5号溝（南西から）



2 5号溝東端部遺物
出土状況（南から）



3 5号溝土層 [a-a']
（東から）



4 5号溝土層 [b-b']
（東から）

1 流路跡トレンチ土層
[j-j'] (南から)



2 流路跡トレンチ土層
[k-k'] (東から)



3 第2面北東部包含層
土器・炭化種子出土状況
(東から)



4 第2面北東部包含層
土器溜り (東から)





1 第2次調査区全景
(南から)



2 18号竪穴住居跡
(北東から)



3 19号竪穴住居跡
(東から)

1 20号竪穴住居跡
(北西から)



2 22号竪穴住居跡 (北から)



3 23号竪穴住居跡 (北から)





1 24号竪穴住居跡
(北から)



2 1号落ち込み
(南から)



3 6号溝土層 (南から)



4 7号溝土層 (南から)

1 空中撮影実施状況



2 水汲み風景



3 出土遺物整理風景





住2-2



住6-6



住4-3



住6-11



住5-4



住6-12



住5-5



住6-13



住8-3



住8-4



住9-11



住8-5



住10-14



住9-4



住10-16



住9-9



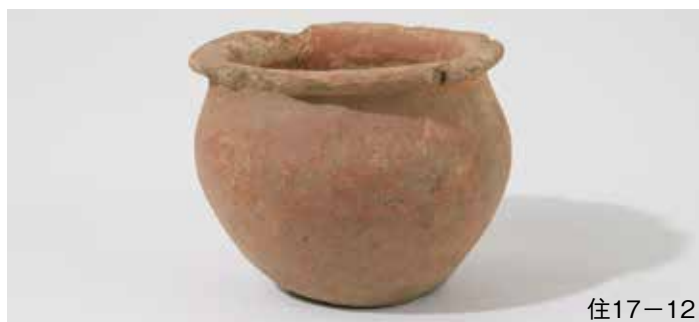
住10-17



住9-10



住12-3





土坑出土土器①





溝3-7



溝5-7



溝5-1



溝5-8



溝5-2



溝5-9



溝5-3



溝5-12



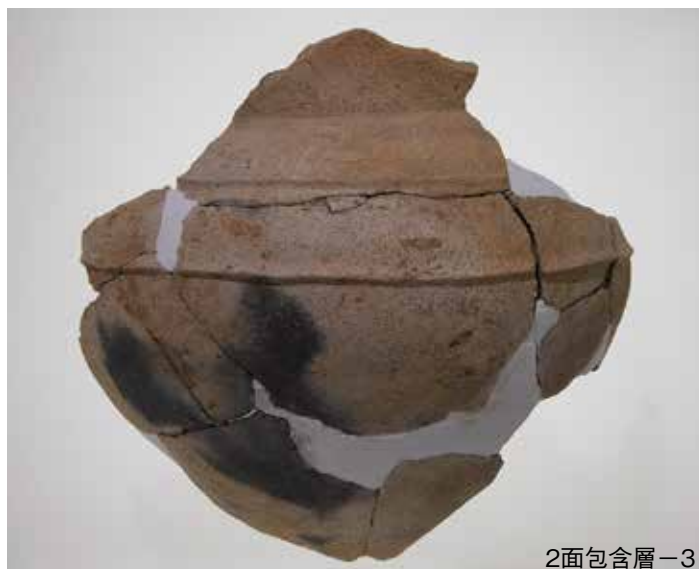
溝5-5



溝5-6



流路跡-27



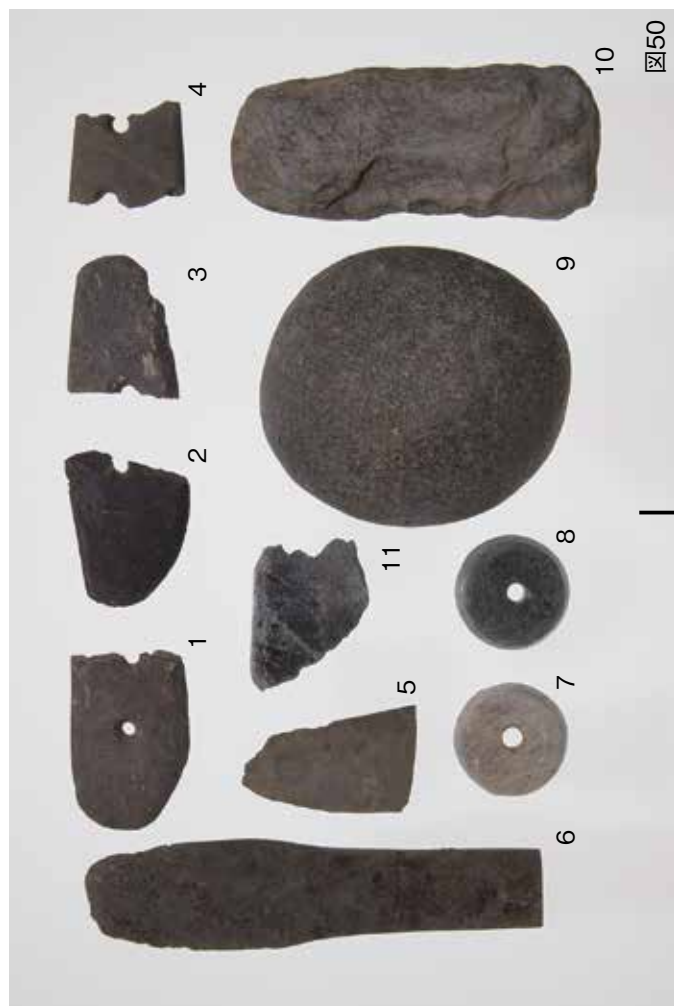


図50

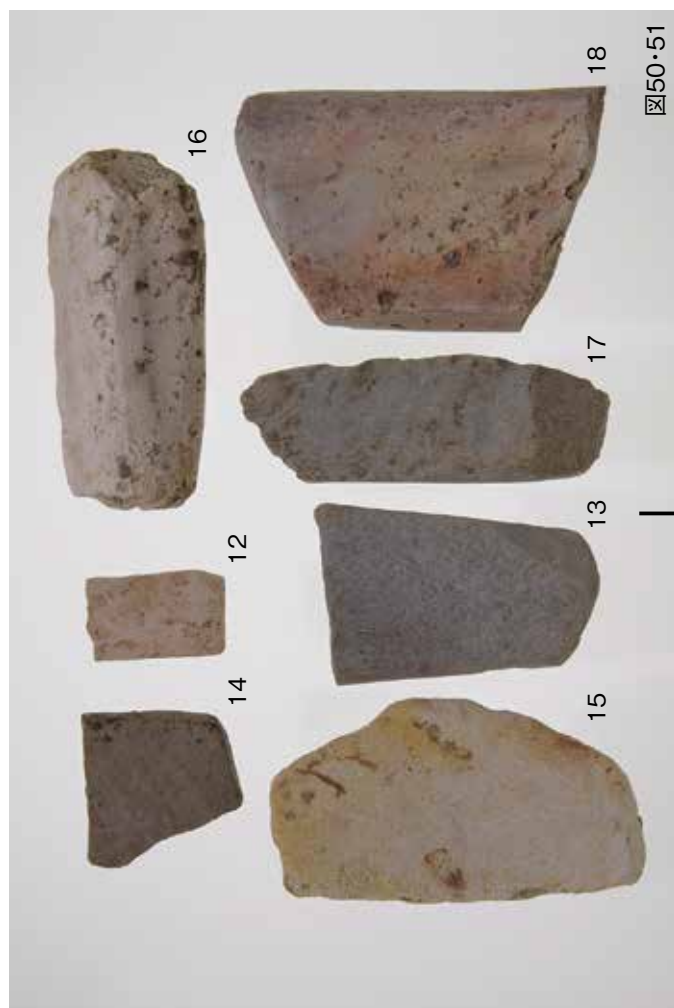


図50・51



1 出土石製品①

2 出土石製品②



图51

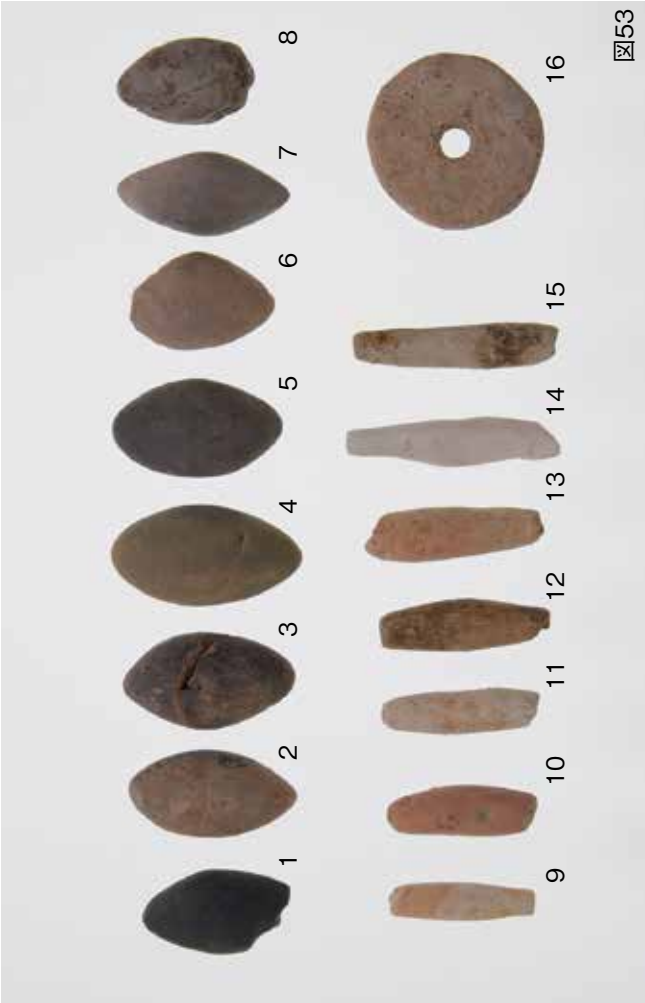


图53

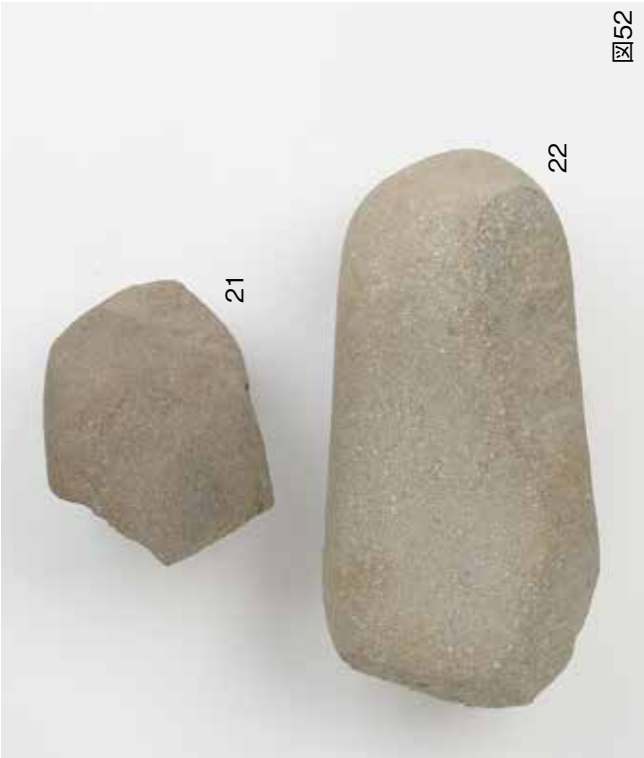
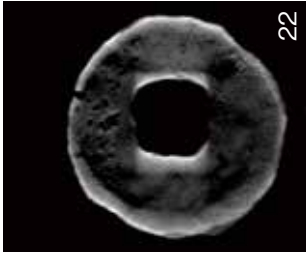


图52



图53



- 1 出土石製品③
- 2 出土石製品④

- 3 出土土製品
- 4 出土金屬製品

報告書抄録

ふりがな	しんかいいせき							
書名	新開遺跡							
副書名	福岡県久留米市田主丸町所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道 210 号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 26 集							
編著者名	坂元雄紀（編集）・坂本真一・梶佐古幸謙							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208 - 3 Tel.0942-75-9575							
発刊年月日	西暦 2023 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
しんかいいせき だいにじちょうさ	ふくおかけんくるめし たぬしまるまちとよき	40203		33° 20′ 50″	130° 41′ 01″	20180626 ） 20190312	第 1 面：1530㎡ 第 2 面：910㎡ 北側：35㎡	国道 210 号 浮羽 バイパス 建設
新開遺跡 第 1 次調査	福岡県久留米市 田主丸町豊城 128-1 他							
しんかいいせき だいにじちょうさ	ふくおかけんくるめし たぬしまるまちとよき	40203		33° 20′ 50″	130° 41′ 03″	20211011 ） 20211022	北側：150㎡ 南側：130㎡	
新開遺跡 第 2 次調査	福岡県久留米市 田主丸町豊城 135-2 他							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新開遺跡 第 1 次調査	集落	弥生時代 古墳時代 古代	堅穴住居跡 17 棟・ 土坑 24 基・溝 5 条・ 流路跡 1 条	弥生土器・土師器・ 須恵器・黒色土器・ 石器・土製品・ 鉄器・銅銭				
新開遺跡 第 2 次調査		弥生時代 古代	堅穴住居跡 7 棟・ 落ち込み 1 基・ 溝 3 条					
要約	2 次にわたる調査で、弥生時代中期中頃から後半の堅穴住居跡、土坑、溝と古墳時代後期から奈良時代に致るまでの堅穴住居跡、土坑、溝等を検出した。古墳時代以降の堅穴住居跡にはカマドが付設されるものが多い。							

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
4	6

一般国道 浮羽バイパス関係文化財調査報告 第26集
210号

新開遺跡

令和5年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 樋口印刷
福岡県三井郡大刀洗町大字本郷 4538